平成１８年度

地域におけるインターネット・パソコンを利用した障害者情報支援に関する調査研究事業

報告書

独立行政法人　福祉医療機構（長寿社会福祉基金）助成事業

平成１９年３月

財団法人　日本障害者リハビリテーション協会

平成１８年度

地域におけるインターネット・パソコンを利用した障害者情報支援に関する調査研究事業

報告書

独立行政法人　福祉医療機構（長寿社会福祉基金）助成事業

平成１９年３月
財団法人　日本障害者リハビリテーション協会

目　次

はじめに 4

聞き取り調査報告 5
大阪府 IT ステーション 6
福祉メディアステーション 8
社会福祉法人　浦河べてるの家 10
なごや福祉用具プラザ 12
山口県障害者社会参加推進センター 14
有限会社　Commit 16
社会福祉法人　沖縄県視覚障害者福祉協会 18
青森県身体障害者福祉センター　ねむのき会館 19
特定非営利活動法人　あおもり NPO サポートセンター 21

障害者 IT 支援セミナー報告 23
セミナー開催趣旨 24
プログラム 25
プロフィール 26
開会挨拶 31
片石　修三　財団法人日本障害者リハビリテーション協会　常務理事
基調講演 32
「より良い支援の実現のために」
畠山　卓朗　星城大学リハビリテーション学部　教授
講演１ 43
「肢体不自由児・者の視点から」
田中　勇次郎　都立多摩療育園医療科　主任・作業療法士
講演２ 85
「視覚障害者の視点から」
金沢　真里　東京都盲人福祉協会　中途失明者緊急生活訓練主任指導員
講演３ 94
「聴覚障害者のための遠隔情報保障」
内藤　一郎　筑波技術大学産業技術学部産業情報学科　教授
意見交換 101
話題提供１：「『情報保障』という ICT ボランティア」
三崎　吉剛　東京都立中央ろう学校　主幹
話題提供２：「障害者支援におけるパソコンボランティアへの期待」
河村　宏　国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所　障害福祉研究部長
話題提供３：「障害者支援におけるパソコンボランティアへの期待」
寺島　彰　浦和大学総合福祉学部　教授

当事者が考えるIT支援について……121
「精神障がい者へのIT支援」……122
伊藤　知之　浦河べてるの家
「パソコンと私」……123
大塚　誠一

障害者IT支援に関する連携に向けて……127
神奈川県総合リハビリテーションセンター……128
「パソコンボランティアとリハビリテーション関係機関とのネットワーク」
松本　琢磨　神奈川県総合リハビリテーションセンター　作業療法士
NPO法人札幌チャレンジド……131
「行政との協働の実践」
「より良いIT支援に向けて」
加納　尚明　ＮＰＯ法人札幌チャレンジド　理事・事務局長
埼玉県障害者ITサポートセンター……137
「事業とパソコンサポートボランティア活動の概要」
増田　隆　埼玉県障害者ITサポートセンター
社会福祉法人プロップ・ステーション……142
「理事長　竹中ナミ氏に聞く」

資料……152
IT支援団体データベース及びマップについて……152
企画委員会構成……153

考察及び今後の展開……154

謝辞……156

はじめに

当協会は、障害者の方々へのより良いIT支援を模索すべく、2年間継続して全国の地域におけるインターネット・パソコンを利用した障害者情報支援に関する調査研究を行った。

1年目は、各地域の当事者を含む支援者及びボランテイア関連団体に対する情報支援の現状と課題について調査・研究を行なった。全都道府県の悉皆調査には至らなかったが、全国の多くの支援団体及び当事者の方々にご協力いただき、IT支援における地域格差、他の支援団体、行政、およびリハビリテーション関係機関・団体等との連携について現状を把握することができた。

2年目は、その結果をもとに、地域における関連団体とのネットワークの重要性を認識し、リハビリテーション関連機関及び専門家との連携や、行政との連携に特に焦点をあてた調査をさらに実施し、有用な支援についての考察を行った。

本報告書には、平成18年度における聞き取り調査結果、また平成18年12月17日に開催した障害者IT支援セミナーの報告、各専門分野の方々からの実践・経験を掲載した。

障害者のIT支援に携わる方々が、本報告書をそれぞれの活動に有効な情報として受けとっていただくことができたら誠に幸いである。

平成19年3月

聞き取り調査報告

大阪府 IT ステーション

所在地:大阪市天王寺区六万体町３－２１
TEL:06-6776-1221
Fax:06-6776-1224
URL:http://www.itsapoot.jp
E メール:suteisyon@itsapoot.jp

【概要】

大阪府は、障害者を含めた「誰もが IT を利用でき、個々の能力を最大限に発揮することが可能な社会」を実現し、「障害者の IT 利用日本一のまち」を目指している。大阪府は、この施策を実現するため平成 16 年 9 月に障害者のための IT 利用総合支援拠点として大阪府 IT ステーションをオープンした。

大阪府 IT ステーションの事業運営は、社会福祉法人大阪障害者団体連合会が大阪府から運営助成と事業委託を受けて行っており、大阪府と大阪府 IT ステーションは相互に連携しながら障害者への IT 支援を推進している。大阪府の取り組みと障害者団体の IT を利用した社会参加と自立への支援に対する熱意が合致して、大阪府 IT ステーションは良い形でスタートし、運営されている。

もともとは大阪府の税務事務所だった 5 階建てのビルを改装し、エレベーターを拡大し、館内には文字案内を付け、各階に車椅子用のトイレを設置しバリアフリー化を進めた建物となっている。その中には 300 台のパソコンが配備され、各フロアは目的別に使用されている。

各フロアの使用
・1F　ワークショップ
　雇用相談、就職支援、求職者情報提供
・2F　IT サポートセンター
　パソコン展示・体験コーナー、IT 利用相談
・3F　IT トレーニングセンター
　テレワーカー養成訓練、テレワーク支援
・4F　IT ジョブトレーニングセンター
　短期職業訓練、障害者特別委託訓練
・5F　IT 講習会、IT 研修会の開催
　障害者 IT 講習会、障害者 IT 中級講習会、IT サポーター養成研修

【取り組み】

障害者の社会参加と自立につなげることを目標として、IT 体験や IT 講習会、さらには職業訓練や在宅で就労するテレワーカーの養成訓練など多様なメニューを用意し、これらの講習、訓練に毎日多くの障害者の方々が夢や希望に向かって励んでいる。

また、これらの障害者の方々に IT 相談や職業紹介、カウンセリング、さらにはテレワーク業務の発注を行うなど、IT に関するさまざまなニーズに応じたきめ細かなサービスを提供している。

２階 IT サポートセンターでは、所狭しと数多くのパソコン、周辺機器、ソフトを展示し、実際に体験できるようになっている。パソコンのサポートは、来館、電話、ファックス、メール、手紙

(点字を含む)などにより幅広く対応している。

これらの取り組みと併せ、企業や社会全体の理解と協力を得るため、企業に向けた啓発や雇用相談、求職情報の提供など、ハローワーク等関係団体とも連携をとりながら障害者雇用に向けた各企業への取り組みを支援している。

また、小・中・高、養護学校の教師等を対象にしたe-AT講習会等も行われ、教育現場におけるITの推進もバックアップしている。

平成19年度までの主要目標は以下である。

・重度の視覚・聴覚・肢体障害者を対象とするＩＴ基礎講習会受講者　1万人
・障害者を支援するＩＴサポーターの養成・確保　1000人
・障害者テレワーカー(在宅就労)を　100人
・職業訓練の開催や雇用支援コーディネーターの配置によるＩＴを活用した雇用　300人

ITステーションに来館した平成17年度の利用者実績は延べ2万人超。　講習会受講者が払うのはテキスト代のみ(1,000円程度)で受講料は無料。常駐の職員が約25名。

また、ステーションの事業はボランティアの方々の活動にも支えられており、これまで約200名の障害者のIT習得をサポートするボランティア(ITサポーター)を養成、講習会時における受講者へのサポートや個人指導等の活動を行っている。

障害者や支援に関わる方に対してはメールマガジンを発行して技術的な情報提供に努めている。

パソコンを使いこなせるようになった障害者の方々ができるだけ就労できるように訓練を重視し、また企業とも積極的に接触して障害者の雇用に対する啓発活動にも力を入れている。ITステーションでは企業から発注があった仕事を障害者の方が行う専用の部屋(テレワーク室)も設けている。

企業等から安心して仕事が発注してもらえるよう平成18年12月にテレワーク室の業務(Web制作並びにデータ加工等情報処理業務)について、国際規格である情報セキュリティマネジメントシステム(ISMS)の認証を取得している。

大阪府の担当者は、雇用、在宅就労等支援現場の状況把握に努め、障害者が抱えている問題等をフィードバックし、大阪府の施策に反映させている。自治体と障害者団体が密接な連携を持つことによりきめ細やかな支援を行っている。

【今後の課題】

大阪府ITステーションに来館できない方々のために今後はボランティアによる在宅での訪問指導やネットワークを介して学ぶe-ラーニング講座の開講等を予定している。

そのため障害のある方が住む地域ごとに支援を行えるよう地域でITサポーターを養成し、身近に対応できる体制の必要性を強く感じている。

平成18年度からいくつかの市町村等地域と提携して障害者IT講習会の開催やITサポーター養成研修等の事業展開を図っている。

ITサポーターの養成に加え、聴覚障害、盲ろうの方々に対する専門的及び技術的な対応ができる講師やスタッフの確保も課題。

福祉メディアステーション

所在地:岐阜県大垣市加賀野４－１－７　ソフトピアジャパンセンター１Ｆ
TEL(FAX): 0584-77-1282
URL:http://www.f-media.jp/index.htm
Ｅメール:info@f-media.jp

・飛騨ブランチ
高山市本町 3-38 スクラム企画内

【概要】

平成８年、岐阜県は「高度情報基地ぎふ」を目指し、その戦略拠点として大垣市に、IT 系企業を県内外から集めたソフトピアジャパンを設立した。当時の岐阜県知事が障害者 IT 支援に対し理解があり、また当事者団体側の熱心な働きかけが実り、ソフトピアジャパンの中に障害者の方々への IT 支援を行う福祉メディアステーションの開設が実現した。

福祉メディアステーションの目的は、マルチメディアを活用して障害者や高齢者の自立、社会参加、創作活動、就労等を支援することである。

岐阜県(障害福祉課、高齢福祉課)及び財団法人ソフトピアジャパンが財政的、技術的支援を行い、障害当事者が主体となって運営を行っている。

活動内容は、福祉メディアプラザ、福祉メディア実習室の運営、派遣事業(IT ホームティーチャー派遣、パソコンボランティア派遣事業)と講習会(パソコン研修、障害者パソコンボランティア養成講習会)を行う他、バーチャルメディア工房事業を展開し、就労支援も行っている。

【取り組み】

職員は８名で、ボランティアが約 119 名で支援を行っている。

福祉メディアプラザ内に展示体験用パソコン及び関連機器を設置し、職員がアドバイスや指導を行う。また、展示コーナーには数多くの支援機器を展示し、訪れた障害者の方や保護者の方に機器の紹介や、パソコンに関する相談やアドバイスも行っている。また、常に障害者の方に使いやすい支援機器を探し、紹介に努めている。

福祉メディア実習室は予約制で、高齢者や障害のある方のうち初心者を対象に Windows の基礎やインターネットの初歩を学べる学習施設で、選任のインストラクターが指導している。

IT ホームティーチャーと障害者パソコンボランティア派遣は福祉メディアプラザに出かけることが困難な方に対する支援で、障害者の方を在宅で支援している。

IT ホームティーチャーは文字入力、インターネットの閲覧、メールの使い方等のパソコンの基本操作を指導するもので、延べ 15 時間程度 (3 時間× 5 回) の支援を行う。受講希望者には、事前に係員が出向いて聞き取り調査を行い、障害の状況、習熟度、希望などを聞き、個々に講習内容や時間を設定する。スイッチや周辺機器等のコーディネートも行う。

障害者パソコンボランティア派遣は、ソフトウェア導入や周辺機器のトラブル、インターネット接続のトラブル、その他パソコンに関するトラブルへの対処を行う。

福祉メディアステーションはパソコンボランティアを養成するために養成講習会を実施している。平成 17 年度は４会場で行った。また、視覚障害者へのサポート要請が増加していることを受け、平成１７年度からは視覚障害者サポートボランティアを目的とした講習会を一般講習とは別に開催した。講習を終えた人はパソコンボランティアとして登録をする。現在までに 200 名弱の登録がある。ボランティア同士の交流会も行っている。

より良い支援を提供するため毎月、福祉メディアステーション、岐阜県障害福祉課、身体障害者福祉協会で月１回運営委員会を開き、活動の状況や問題点の把握に努めており、自治体との連携がスムーズに行われている。

また、他の支援団体とはメーリングリスト、セミナー等を通して交流をはかり、情報交換に努めている。

【課題】

課題としては、活動できるボランティアの限られているので、人員の強化を重視している。また、ボランティアの支援技術の情報が不足していること、展示する支援機器の導入は予算との兼ね合いがあり、紹介したい機器を全て購入はできないなどの問題がある。

社会福祉法人　浦河べてるの家

精神障害者へのICTの事例
調査先:有限会社・社会福祉法人「浦河べてるの家」(北海道　浦河郡浦河町)
実施日:平成18年10月14日

【概要】

「浦河べてるの家」とは、総人口1.600人程の浦河町にあり、精神障害を持つ人々の共同住居・共同生活の場となっている。メンバーは約120人で、有限会社、共同作業所・共同住居(グループホーム)・通所授産施設を運営している。そこでは、様々な悩みを抱えた精神障害者に配慮した2つのICTの事例についてあったので紹介をする。

テレビ会議システムの開発

日本財団の助成で、リモートでもコミュニケーションがはかれる方法として、サーバーを利用した「テレビ会議システム」を開発し、2003年に運用を開始した。この開発については、浦河べてるで暮らすようになった山根幸平氏が自分の思い(幻聴など)を皆に伝えて現実なのか現実でないかを確認してもらうことでだんだん社会に復帰できていくことがわかってきて、このことを他の地域の人たちに伝えたいと考えるようになったことがきっかけとなったそうだ。同じようなことをソーシャルワーカーの方も考えていたので一緒にその開発のための助成先を探して、最終的には日本財団が受け入れてくれた。2002年のことであった。

普通のテレビ会議システムにテキストチャット機能、ホワイトボード機能、ファイル共有機能、メッセンジャー機能、アンケート機能、録画・録音機能が付いている。ユーザー側の回線はADSL以上の回線が必要である。同時アクセスユーザーは10人に限定され、分割された画面を通して会議などを行うことができる。ユーザー側のソフトはフリーとなるが、業者によると機材に20万から25万ぐらいが必要だそうだ。現在、北海道は3カ所、本州に何カ所かにつながり、作業所や大学や関係する企業ともつながっている。最初はつないだままにしてあり、他の精神障害者団体の人たちと抱える問題などについて相手の顔を見て話すことができ、当事者のSOSに対処することができた。しかし残念ながらこのシステムを担当するメンバーに逃亡癖があり、一時的に休止状態になってしまっている。それまでは、いつでも連絡を取り合うことができるように24時間、稼動をしている状態であったが、今後、他の団体の人たちと日時など設定をしてお互いに言いたいことを言い合うミーティングを企画・実施したいと考えている。

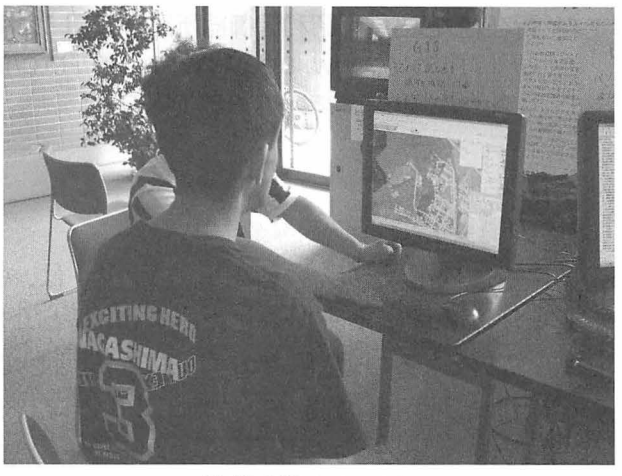
最近は、テレビ会議の代替方法としてフリーでダウンロードできるスカイプを使うことが多くなったそうだ。

テレビ会議システム

防災GIS(Geographic Information System)システムの開発

国立身体障害者リハビリテーションセンター障害福祉研究部の河村宏氏をリーダとするチームと「べてるの家」の山根氏が共同で障害者と高齢者の防災の取り組みの1つとして、障害者の自己決定のためのGIS(地理情報処理システム)の改良を行っている。20種類あるソフトからアクセシビリティが考慮されているソフトを選んだそうだ。このGISを利用することでユーザ

ーは、地震や津波の際の避難経路と避難場所など様々の情報を得られる。このシステムにインプットする情報については、「べてるの家」の精神障害を持つ人々、地域住民、町役場が連携することで進められている。前述の開発者、山根氏は自身が統合失調症であり、当事者の立場から必要な機能をこのGISのシステムに組み込んでいった。そしてできあがったものを地域住民、べてるの家の人たちに評価してもらい、河村氏をはじめとする国リハのメンバーにフィードバックを行なっている。実際に浦河の海岸近くに住む自治体のメンバーやべてるの家のメンバーを集め、津波を想定した防災訓練を行った際に利用してもらったそうだ。山根氏は、今後、自治体と連携をして、地域に必要な生活情報をこのGISに組み込んで、日常生活においても利用してもらいたいと考えている。



防災GISシステム

防災マニュアルについては、マルチメディアDAISYを使った、地震発生時の『防災マニュアル』製作の取り組みを行なっている国リハチームの援助を受けて、べてるの家では、いつ起っても不思議ではない日高沖地震による津波に備えて、実際に自分達で避難場所まで歩き、その道筋を文字と写真と音声で示した『避難マニュアル』をマルチメディアDAISYで製作を行なっている。自分たちがマニュアルにでてきているのでとても身近に感じられ、こうすれば安心だという感覚がでてきたという。メンバーの一人清水さんは、当協会のインタビューの中で、DAISYについて次のように語っている。

「DAISYっていうのは、文字で喋るのが出てきて、映像が出てくるので、考えながら、確認しながら見ることができるので、私達精神障害者がもっている混乱しやすいとか色々障害があるんですけど、そう言ったメンバー達にも、凄く解かりやすくて、親しみがもてました　」

今後、精神障害者への災害などの情報提供方法としてのDAISYの広がりが期待される。

マルチメディアDAISYを使った『防災マニュアル』

【まとめ】

上記 については、日本各地にいる精神障害者がお互いに悩みなどを話し合い、解決をしていくというユニークなコミュニケーションが、TV会議システムを利用することで効率的に進められるという事例であり、の開発においては、精神障害者のコミュニティと地域の住民、自治体の連携による障害者を含めた安全な町づくりを目的とするネットワークの構築が見られる事例である。

なごや福祉用具プラザ

所在地:名古屋市昭和区御器所通３丁目 12-1　御器所ステーションビル３階
URL:http://www.japan-net.ne.jp/~nrc/plaza/
Ｅメール:nrc4@japan-net.ne.jp

【団体の概要】

なごや福祉用具プラザ（以下、プラザ）は、名古屋市昭和区に「介護実習・普及センター」として平成９年７月にオープンした。福祉用具と介護知識・技術の普及を通じて皆様の日々の生活を応援している。その他、個々のニーズを発掘して、福祉用具への意見・試用感をメーカーに届けたり、新たな福祉用具の開発や技術ボランティア活動の拠点として機能することを目指している。

具体的には、以下のような事業を展開している。

1．福祉用具の展示・相談
2．福祉用具の販売・斡旋とリサイクル情報案内
3．高齢者住宅改修相談、障害者・高齢者向け住宅相談
4．介護実習・研修
5．家族介護者教室
6．福祉用具の製作・改造
7．技術ボランティアの養成
8．福祉用具に関する情報収集・提供
9．障害者のパソコン導入支援や周辺機器の選定相談

プラザにはリハビリテーション工学技師（以下、リハビリテーションエンジニア）が１名常駐し、全国的に専門的なエンジニアを置く機関があまりない中、ユニークな存在と言える。また「自助具」「被服」「パソコン」の３つの技術ボランティアグループが活躍し、職員とともに利用者を支援している。

【障害者 IT サポート事業】

身体に障害のある方を対象に、身体状況、使用する目的などに応じたパソコン等の IT 関連機器の導入支援や選定、機器の入手に関する助成制度や情報を提供しながら、様々な IT 関連機器の相談に応じている。

障害のある方へのパソコン支援は、全職員（相談員）と約 10 名の技術ボランティア・パソコングループ（以下、パソコンボランティア）で行っている。支援対象となる利用者は、身体障害、視覚障害、聴覚障害、高齢者（知的障害、重複を含む）と多岐に渡り、身体状況や目的に合う機器やソフトウェアの選定を行って、特に入力装置等のハードウェアやソフトウェアを試しながら支援を行っている。職員には様々な職種の相談員がいて、パソコンボランティアはプラザの窓口相談で整理された問題に対し、リハビリテーションエンジニアと連携をとりながら導入支援に関わっている。

利用者からパソコンボランティアへ派遣要請があった場合、最初の導入部はリハビリテーションエンジニアが行うが、その後は直接、利用者がパソコンボランティアに連絡をとることもある。

利用者は無料で支援が受けられる。パソコンボランティアに対しては、プラザから活動費として1回1,000円と交通費実費(平成18年度実績)を支払っている。

またプラザでは、パソコンボランティア養成講座を年に1回程度開催し、その育成に努めている。

【専門職との連携】

リハビリテーションエンジニアが利用者にパソコンの支援をする際、身体状況に応じて入力装置やソフトウェア等その方に合ったものを選定し、それでも十分ではない場合には補助装置を自ら製作して対応し、支援を行っている。プラザではパソコン支援を行う際、当初から利用者のニーズを把握し支援を行うためには、様々な視点を持ち、パソコンボランティアと連携をとりながら活動を行っている。また、プラザの中に工房室があり、利用者にあったスイッチ等をそこで製作できることもこの施設の特色のひとつである。

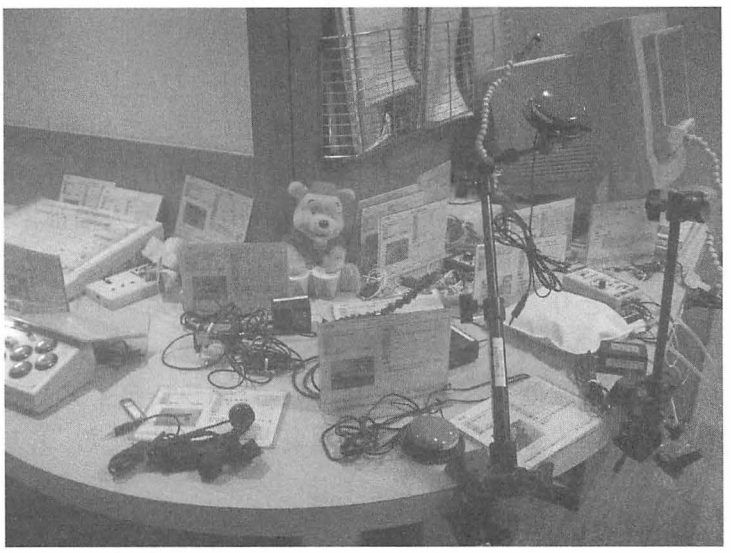
【他の支援団体との連携】

名古屋市では、市内の障害者IT支援団体が情報交換を行える「交流会」を開催している。また、プラザが主催するパソコンボランティア養成講座で講師及び受講生らが他の支援団体と情報交換を行っている。

【利用者のニーズを引き出す】

取材に応じていただいたリハビリテーションエンジニアの田中芳則氏は「まずは、何事も信頼関係を築いてからでしか始まらないと思う。」と語り、支援を行うにあたっては技術の前にまず人と人とのコミュニケーションが重要であるとしている。また、パソコンを活用して何がしたいのかを利用者本人とよく話し合い、ニーズを見極めることが大切だと述べている。

工房室の概観



試用できるスイッチ類

山口県障害者社会参加推進センター

所在地:山口県山口市大手町９番６合　山口県社会福祉会館内
URL:http://www3.ocn.ne.jp/~syogai35/
Ｅメール:syogai35@jeans.ocn.ne.jp

【団体の概要】

社団法人山口県身体障害者団体連合会は山口県における身体障害者の福祉の向上、社会への「完全参加と平等」の実現を目指すことを目的とし、山口県身体障害者団体連合会事業と山口県障害者社会参加推進センター事業を行っている。

山口県障害者社会参加推進センター(以下センターと言う。)は、障害者の社会参加を推進するための様々な事業を展開しているが、その中のひとつにパソコンボランティア養成・派遣事業がある。

【パソコンボランティア養成・派遣事業】

平成14年、障害当事者団体としては早い時期に県(国)からの委託を受け、パソコンボランティア養成・派遣事業を始めた。障害者への支援に熱意がありパソコンボランティアとして活動したい人は、養成講習会に参加してもらい、パソコンボランティアとして登録。講習会では障害者の理解を深めることと、ボランティアについての実践を学んでもらう。

支援方法は障害者宅へのボランティアの派遣。パソコンを学びたい障害者の方から派遣要請があれば、センターがコーディネートし、ボランティアの派遣を行う。現在のボランティア登録者数は40名弱。ボランティアの証明書の有効期限は3年。それを過ぎれば再登録してもらう。

平成17年度の派遣実績は延べ166回、平成18年度は184回（平成19年1月現在)。実績は毎年伸びている。利用者一人に対して、原則として15時間以内の支援を行う。利用は無料。ボランティアには日当と交通費を支払う。

講習内容は、メール、インターネット、ワード、エクセルなど基本的な操作が中心。利用者から派遣申請用紙を提出してもらい、希望に添って相談して支援内容を決める。

支援対象者は身体障害者、聴覚障害者、知的障害者、精神障害者。

＊視覚障害者については、(社福)山口県盲人福祉協会が支援を行っている。

センターの職員はボランティアが気負いなく支援ができるように、できるだけコミュニケーションをとり、フォローするようにしている。4年前に県から委託を受けて以来、試行錯誤をしながら障害者のニーズに添った支援を心がけている。支援者同士が情報交換及び交流できるよう講習会を開催するようにしている。ボランティアとセンターの担当者、ボランティア同士の信頼関係を築くことが支援には重要との視点にたち、工夫をしながら活動を行っている。

【自治体との連携】

今のところ、県とは委託側、受託側という関係にとどまっているが、自治体からは支援に関する情報提供を含め積極的に協力してほしいと考えている。

【リハビリテーション関連機関との連携】

現時点では、リハビリテーション関連機関等との連携はなく、重度障害者への対応と支援機器に詳しいリハビリテーション関連専門職との連携を望んでいる。

【課題】

支援技術に対する情報の不足。支援者が技術を習得する時間、場所がない。支援者が足りない。実際に活動を行っているのはボランティアに登録している人の約半数。充分な予算がない。派遣できる内容の線引きが難しい。

重度障害者を支援するソフトに熟知したボランティアの育成及び専門家との連携の必要性がある。また、支援機器業者の関わりが必要だが現時点ではない。

ボランティア同士、関係団体のネットワーク作りが難しい。

パソコンリサイクル事業で提供された障害者の方々が使っているパソコン及び周辺機器はバージョンが古くなって状態が悪く、使いづらくなってきている。障害のある方にこそ新しい機器を使うことに意義がある。

センターやボランティアだけでは、満足のいく支援をするためには限界があり、行政、企業、障害専門家等からの情報提供や連携が非常に重要であると感じている。

有限会社　Commit

沖縄県那覇市安謝 1-2-5
Eメール:michel_angelojp@yahoo.co.jp

【団体の概要】

平成 17 年、ヘルパーステーションとして (有)Commit ヘルパーステーション コミットを立ち上げる。管理者の迎里崇雅氏は平成 16 年度、沖縄県の委託事業であるパソコンボランティア派遣事業の事務局を任されていた。迎里氏は就労につなげるため IT 作業所サンブリッジをコミットに併設し、そこではパソコンを使った仕事を障害を持つメンバーが主体的に行っている。また、コミットはパソコン指導をボランティアで行っている。

【パソコンボランティア活動】

職員と作業所 (IT 作業所サンブリッジ) に通っているメンバーが支援者。職員とメンバーで約 10 名弱の体制。メンバーの年齢は 20 歳代～ 50 歳代。支援対象者には無料で教えている。活動資金はヘルパーステーションの収入等をあてている。

上記以外に以下事業を受託している。

1. 自治体から委託を受けて IT 業者が中間に入り、パソコン講座を開催。3ヶ月のコース(週3回)で、対象は身体・視覚・聴覚・知的・精神障害者。障害別の講座を開設した。要請があれば訪問支援を行う。支援内容は基本的なパソコン操作、インターネット、メール、ワード、エクセル、スクリーンリーダー。障害によって内容に多少変化をつけている。(平成 16 ～ 18 年度) 就労コースは IT 業者が担当。
2. 障害者職業センターから委託を受け、OA 講習会を開催。視覚障害者のためのパソコン指導を行う。
3. 職業訓練校の障害をもつ方々のコース(平成１８年度)

【リハビリテーション関連機関との連携】

様々な障害 (重度、てんかん等) を持つ方々の支援をどのように行っていくかという問題がある。現在は当事者の方とよく話し合って緊急の際の対応などに備えている。現時点では、リハビリテーション関連機関等との連携はなく、障害をもつ人と支援機器に詳しいリハビリテーション関連専門職との連携を望んでいる。

【課題】

パソコン講座のコースを終えた人をできるだけコミットで受け入れ、就労につなげたいと考えているがコミットのみではマンパワーが不足しているので、やむなく受け入れを断っている状況がある。就労の受け皿を行政側も、企業も真剣に考えてしい。行政、企業が歩み寄ってくれることを望んでいる。

コミットの目指すのは就労支援なので、障害者の方々が働くためにはパソコンの技術以外に社会的な信頼を得る必要があり、そこをどう障害を持つ方々に習得してもらうかが課題。また就労のためには、企業とのルート作りをしていくことが重要であると考えている。

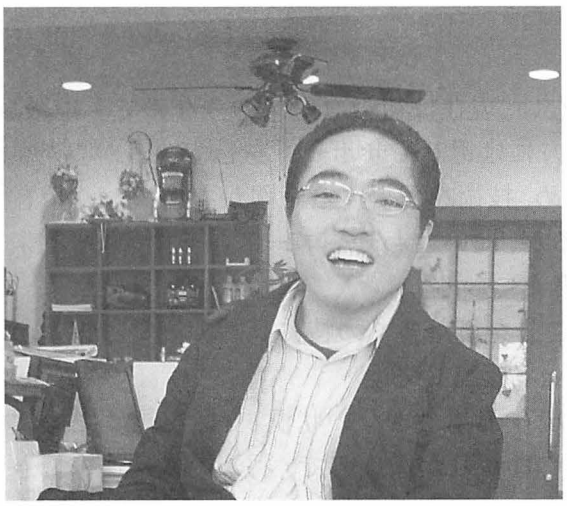
【聞き取り調査を終えて】

迎里氏はご自身も当事者で車椅子を利用している。障害を持つ方々のニーズや問題を理解しつつ、コミットを立ち上げて、社会で働くためには技術のみではなくコミュニケーション能力も非常に大切だと実感した。その経験から、パソコンを習いたいとコミットに問い合わせがあったときは、まず本人がパソコンを使って何をしたいのかを主体的に考えてもらうようにしている。パソコンを使って働きたいのか、またはインターネットなどで社会との接点を持つために活用したいのか、その目的は自由だが、いずれの場合も目的意識を持って学びに来てほしいと考えている。

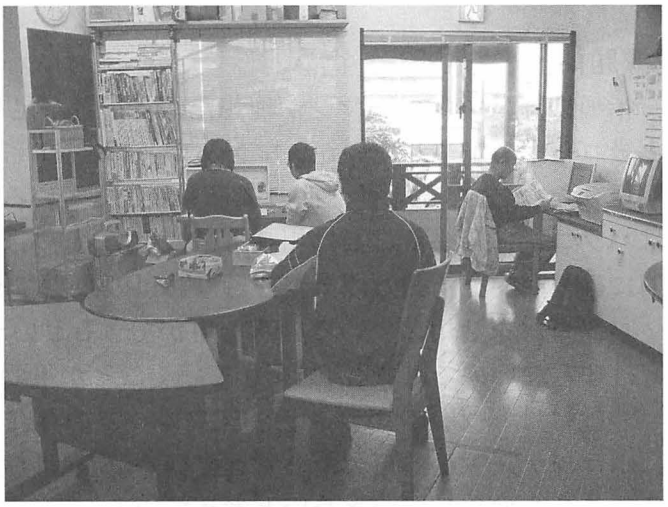
迎里氏は、ヘルパーステーションの経営、サンブリッジの運営、就労先とのコーディネート、パソコン講習会のアレンジ、企業とのやりとり、パソコン講師など一人で何役もこなす多忙な日々を送っている。また、行政に対しても就労やパソコン支援に対する働きかけを行っている。

当初、沖縄県に関してはパソコンボランティアの活動が見えにくく、聞き取り調査先も難航したが、パソボラグループの存在は確認できずとも迎里氏のように熱意を持って取り組んでいる人の存在を知ることができたことは収穫であった。

今後、沖縄県での障害者へのIT支援のニーズがますます高まることは予想され、コミットが先駆者的な役割を果たす可能性が大きい。多くの支援者が起されることを期待し、また行政、民間、ボランティアが連携することにより支援内容が充実するので、そのときにコミットの経験が生かされてくることは想像に難くない。



迎里氏



IT作業所サンブリッジ

社会福祉法人　沖縄県視覚障害者福祉協会

沖縄県那覇市松尾２丁目１５番地２９号
TEL:098-8632997
Ｅメール:info@okishikyo.net

【団体の概要】

設立は昭和３２年１２月。援護または更正の措置を必要とする視覚障害者に対し、その独立心を損なうことなく、正常な社会生活を送れるよう援助することを目的として、社会福祉事業を展開している。県委託業務のパソコン教室、サポートは相談事業の中で行っている。

【パソコン初級教室】

県の委託を受けて、平成１７年度から開催。週１回で２０回コース。パソコン初心者の視覚障害者に対して、パソコンを利用して情報入手、共有・発信、コミュニケーション手段の習得を目的としてパソコン操作方法、インターネットの使用、メール送信等の基本的な操作方法を指導する。募集は協会のニュースレター等で行っている。定員は５名。受講料は無料。毎回定員の３倍の応募がある。

支援対象者はほとんどが４０～60歳くらい。希望としては、スクリーンリーダーを使ってインターネットによる情報の入手、メール、文章入力等。若い人は盲学校や仲間で教えあったりしてできる場合がほとんどなので、応募はない。

【課題】

指導の際はマンツーマンが理想だが支援者が足りない。現在は初級コースのみなので、中級、上級コースを増やしたいが、マンパワー不足。在宅の方には電話でサポートをしているが、人員が足りない。また支援者は他の業務もかかえているため、技術を習得する時間がない。また、現在はパソコンに関することは相談事業の中で行っているが、問い合わせやニーズが多いので、将来的には専門的な情報処理業務を行う窓口の必要だと考えている。

パソコンを活用していろいろな事ができるということをまだ多くの特に高齢の視覚障害者の方は知らないので、広報活動をしていくことが重要だと考えている。

沖縄にはパソコンボランティアグループの存在が現在確認できない状況。支援を行うためにはボランティアが不可欠だと考えている。現在は横のつながりがないので、将来的には連携できるところを増やしていきたいと考えている。

青森県身体障害者福祉センター　ねむのき会館

所在地:青森市大字野尻字今田 52 番地 4 号
TEL:017-738-5033
FAX:017-738-0745
URL:http://www.nemunoki.jp/
E メール:nemunoki2@eos.ocn.ne.jp

【団体の概要】

昭和 48 年、社会福祉法人青森県社会福祉協議会が運営主体となり開館した。

平成 18 年度より指定管理者制度により、財団法人青森県身体障害者福祉団体連合会が運営主体となり以下の事業を推進している。

・青森県障害者 IT サポートセンター運営事業
・障害者スポーツの振興事業
・青森県障害者社会参加促進センター運営事業
・相談・情報・啓発事業の推進
・芸術・文化講座開催等事業
・青森県障害者社会参加推進センター運営事業
・送迎・貸し出サービス事業
・県内障害者団体等との連携

【パソコン講座】

平成１４年度より県から委託され、助成金により実施している。一年ごとの委託契約。支援者は職員(２～３名)とボランティア(視覚障害者支援５～６名、肢体８名)。職員がコーディネートしてボランティアを手配し、以下の講習を行う。

・視覚障害者パソコンボランティア講習会
・地区別視覚障害者パソコン講習会
・初級パソコン講習会(ワード、エクセル、メール、インターネット)
・中級ホームページ作成
・中級ワード・エクセル
・メール送受信・インターネット検索
・(初級)知的障害者

講座は無料。講座で使うテキストは会館のものを利用するので、購入する必要はない。定員は５名。５月～９月を前期と 10 月～３月を後期に分けて、４回ずつ行う。ボランティアは点字教室等で募集。

視覚障害者を対象にした講習はすでに、行われているが、視覚障害者に教えるボランティアを平成 19 年度から八戸、弘前、五所川原で育成する計画がある。

知的障害者施設でパソコン講習を行う場合もある。重度の方々への在宅での支援は行っていない。

平成 19 年度は、アビリンピック(障害者技能競技大会)に出場するという目標を立てて、出場できるようにパソコンの技能を高めたいと考えている。

【課題】

ボランティアの人材を確保するのが難しい。電話による相談業務をやりたいが、スペースがない。講習を終えても自宅にパソコンがない人が多いので、実際にはパソコンを使いこなすことができない。ボランティアを集めて勉強会などを開催したいが、他の業務もあり今のところ実現できない。障害者の方々の住む地域で支援を行えるようにボランティア同士のネットワークを構築したい。

特定非営利活動法人　あおもりNPOサポートセンター

所在地:青森市新町2-6-25奈良屋ビル2F
TEL:017-776-9002
FAX:017-776-9003
URL:http://www.anpos.or.jp/
Eメール:info@anpos.or.jp

【団体の概要】

1999年、あおもりNPOサポートセンター(ANPOS)は青森県内初の特定非営利活動法人として活動を開始した。「NPOのためのNPO」として、市民にむけた啓発活動、NPOの支援とネットワークづくり、調査研究や政策提言を主な活動としている。その中で情報弱者と言われる障害者の方々へのパソコン講座を開設し、社会参加への可能性を拡げる活動を行っている。

【IT支援事業】

設立当初より、障害のある方々へのパソコン支援を試行錯誤しながら行っていた。IT教師養成講座を開設し、障害のある人にパソコンを教えることのできる人材の育成に努めた。そのような活動が新聞にも掲載され、青森県情報政策課からITバリアフリーサポート事業の委託を受け、2002年から2004年の3年間、高齢者・障害者のへのIT支援事業を実施した。常務理事・事務局長の三澤章氏が通常より大きな文字で、障害者・高齢者の方々に視覚的にもわかりやすい講習会用のテキストを自ら作成した。この事業には3年間で2000人の方々が受講した。

現在は主に視覚障害者(主にロービジョン)の方々に対するIT支援を中心に活動している。こちらはテキストを使用せず、6～10人のボランティアがマンツーマンで教えている。ボランティアの年齢層は40代～50代。平成17年度は4名の方のサポートを行った。その中には、今年中学生になる生徒もいて、教科書をPDFにして提供する計画をしている。ロービジョンの支援に関しては弘前大学の眼科の医師に活動を紹介し広報を行っている。

また、2005年よりNPO団体を対象にしたマイクロソフト社の社会貢献プログラム「ITげんき講座」を運営し、NPOや市民団体がパソコンをより活用できるよう啓発活動も行い、青森県全体のIT活用の推進を目指している。

【課題】

障害のある人になんとか社会に出てもらおうとWebデザイナー養成講座を開設したが、応募がほとんどなかった。自ら社会に出て働こうという意欲が当事者側にも必要だと感じている。また、家族、一般市民などの意識改革が障害者の社会参加には欠かせないが、大都市に比べ、他人の目を気にするという地域的な特色が壁になり、障害者の方々が外に出にくい。

また、IT支援団体間の連携が重要だと考えているが、そこまでには至っていない。

障害者 IT 支援セミナー報告

セミナー開催趣旨

障害者 IT 支援セミナー
より良い支援の実現のために

昨年度実施いたしました「地域におけるインターネット・パソコンを利用した障害者 IT 支援に関する調査研究事業」では、全国のパソコンボランティア団体にアンケート調査と複数の団体への聞き取り調査を行い、支援の実態と課題の把握に努めました。その結果、より良い支援を行うためには様々な課題があることが浮き彫りになりました。特に地域における IT 支援団体とリハビリテーション関係機関との連携についてネットワーク構築の必要性があげられました。そこで本セミナーでは特にパソコンボランティアとリハビリテーションの連携に焦点をあて、基調講演に続き「障害の特性に配慮した IT 支援の在り方」について専門家から講演をしていただきます。また意見交換では本事業企画委員から今後のパソコンボランティア活動の方向性とネットワーク構築についてのご提言をいただき、参加者と共に障害者へのより良い ICT 支援について討議をする機会を提供いたします。

開催日：2006 年 12 月 17 日（日）
会　場：新宿住友ビル 47 階　スカイルーム
主　催：（財）日本障害者リハビリテーション協会
助　成：独立行政法人　福祉医療機構

プログラム

13:00　開会挨拶
片石　修三／財団法人日本障害者リハビリテーション協会　常務理事

13:10　基調講演：「より良い支援の実現のために」
畠山　卓朗／星城大学 リハビリテーション学部　教授

講演　～障害の特性に配慮した IT 支援について～

13:40　講演 1：「肢体不自由児・者の視点から」
田中　勇次郎／都立多摩療育園医療科　主任･作業療法士

14:10　講演 2：「視覚障害者の視点から」
金沢　真理／東京都盲人福祉協会　中途失明者緊急生活訓練主任指導員

14:40　講演 3：
「聴覚障害者のための遠隔情報保障－支援の現状とボランティアとの連携－」
内藤　一郎／筑波技術大学産業技術学部産業情報学科　教授

15:10　休憩

意見交換

15:20　意見交換
･コーディネーター：
望月　優／株式会社アメディア　代表取締役

･話題提供者：
「『情報保障』という ICT ボランティア」
三崎　吉剛／東京都立中央ろう学校　主幹
「自立と参加を支える IT とは」
河村　宏／国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所障害福祉研究部長
「障害者支援におけるパソコンボランティアへの期待」
寺島　彰／浦和大学総合福祉学部　教授

･コメンテーター：
加納尚明／札幌チャレンジド　理事･事務局長
湯汲英史／社団法人　精神発達障害指導教育協会　常務理事

17:00　閉会

プロフィール

畠山　卓朗／はたけやま　たくろう
星城大学 リハビリテーション学部 教授

1949年:岐阜市に生まれる
1972年:中部工業大学(現,中部大学)工学部電子工学科　卒業
同年:民間企業において工業用ロボットの開発に従事
1974年:神奈川県総合リハビリテーションセンター　研究部勤務
1981年:労災リハビリテーション工学センター　研究部勤務
1987年:横浜市総合リハビリテーションセンター　企画研究室勤務
2001年:博士(工学)名古屋大学
2002年:星城大学 リハビリテーション学部　教授
現在に至る

長年、重度肢体不自由がある人々の支援機器の研究開発・サービスに取り組んできた。
現在は、リハビリテーションを志す学生の教育に携わるかたわら、地域の保健師、セラピスト、技術ボランティア、メーカーにおける製品開発、などの支援に取り組んでいる。

田中　勇次郎／たなか　ゆうじろう
東京都立多摩療育園医療科　主任・作業療法士

略歴
作業療法士歴33年目。
この間、身体障害・発達障害分野の作業療法に従事。中でも、神経筋疾患の作業療法に長年携わる。筋萎縮性側索硬化症（ＡＬＳ）への代替コミュニケーション手段の適合に関して多くの経験を持つ。現在は、脳性麻痺児(者)へのＩＴ活用支援にも取り組んでいる。
なお、重度脳性麻痺の弟をもつ兄である。

学会および社会における活動など
東京都作業療法士会　福祉用具委員会　委員長
日本作業療法士協会　保健福祉部　障害者ＩＴサポート委員会　リーダー
「道具とくらしの研究会」(日本作業療法士協会生涯教育単位認定制度団体として申請中)会長
「コミュニケーション用具支援ネットワーク研究会」発起人
日本ＡＬＳ協会「ＡＬＳ基金」研究奨励金選考委員(本年度まで)

著書(分担執筆)
「作業療法ケースブック・コミュニケーションスキルの磨き方」(2006年発行予定　医歯薬出版)
「生活場面から見た福祉用具活用術」(2006年３月　中央法規出版)
「新ＡＬＳケアブック」(2005年12月　川嶋書店)
標準作業療法学「身体機能作業療法学」(2005年４月　医学書院)
「レクリエーション　改訂第２版」(2004年８月　三輪書店)など

金沢　真理／かなざわ　まり
東京都盲人福祉協会　中途視覚障害者緊急生活訓練事業　主任

仕事について
國學院大學　国文学部日本文学科　日本文学専攻を卒業
社団法人　東京都盲人福祉協会に入社
現在　中途視覚障害者緊急生活訓練事業　主任

視覚障害について
10 代後半で進行性の眼の疾患「網膜色素変性症」と診断され、20 才過ぎから徐々に見えなくなる。現在、中心はほとんど見えず、両サイド視野が少し斑に残っており、そこでコントラストがハッキリしたものや動く物体を確認できることもある程度の見え方。

その他
1983 年から 2000 年 3 月：ラジオ日本 東京都提供番組「わたしの東京」レポーター
1997 年から 2000 年：ＪＢＳ日本福祉放送「金沢真理　風の髪飾り」のパーソナリティー
1999 年 4 月から 2001 年 3 月：視覚障害リハビリテーション協会 会長
2006 年 5 月から：日本網膜色素変性症協会　理事　他

内藤　一郎／ないとう　いちろう
国立大学法人　筑波技術大学産業技術学部産業情報学科　教授

1991 年立教大学大学院理学研究科原子物理学専攻修了。
同年筑波技術短期大学電子情報学科助手、同助教授を経て、現在、筑波技術大学産業技術学部産業情報学科教授。博士（理学）。

大学院では、観測ロケットや人工衛星を用いた高層大気微量成分（オゾンなど）の観測研究を行う。筑波技術短期大学に着任後、聴覚障害者の教育に従事する中、聴覚障害者のコミュニケーションや情報保障の問題に興味を持ち，手話電子辞書の開発研究、テレビ電話を用いた聴覚障害者のコミュニケーションや情報保障システムの研究などに取り組むようになった。

教育においても、ペットボトルカーを用いた計測制御実験や歩いてグラフを作る、歩行ロボットの製作など学生が興味を持って技術を身に付けられるような研究テーマの工夫を行っている。

地域貢献活動においては、地域の聴覚障害者やその支援者（手話通訳者や要約筆記者など）の意識調査を行い、その結果をもとに、大学を手話通訳者養成講座や要約筆記者養成講座に開放するなど積極的に取り組んでいる。

望月　優／もちづき　ゆう
株式会社アメディア　代表取締役

1958年1月28日:静岡県静岡市に生まれる。

1965年4月:静岡県立静岡盲学校小学部に入学。1974年4月:東京教育大学教育学部附属盲学校高等部に入学。1977年4月:麗澤大学ドイツ語学科入学。1982年:麗澤高等学校非常勤講師(英語)となる。1986年3月:麗澤高等学校退職。1986年9月:国立職業リハビリテーションセンター電子計算機科入学。プログラミングの学習を本格的に開始。

1989年2月:株式会社アメディア設立。視覚障害者向けのシステム開発・販売を事業化。以後、1996年9月に印刷物読み上げソフト「ヨメール」、1999年1月にホームページ読み上げソフト「ボイスサーフィン」、2003年8月に音声・拡大読書機「よむべえ」を発売。

仕事以外の活動としては、2005年4月に社会福祉法人日本盲人社会福祉施設協議会盲人用具部会長に就任。視覚障害者用の機器開発を行なっている業者をまとめる。また、同年4月に東京中小企業家同友会障害者委員会の委員長に就任。中小企業での障害者雇用に注力している。
阪神ファン。48歳。独身。

三崎　吉剛／みさき　よしたけ
都立中央ろう学校　主幹　数学科教諭

1985年から1992年:都立村山養護学校
1981年から1985年:都立江戸川養護学校
・肢体不自由教育への自助具としてのパソコンの導入
・「障害者でもパソコンを使う」ではなくて「障害者だからこそパソコンを使う」という発想
・様々な自作スイッチとソフトによって、文字や数式を表現することを可能にした。
・「肢体不自由とは表現手段がないことで学習上の問題が生じている。パソコンを使いこれを改善することが可能である。」と同僚と考えて、進めてきた。

1992年から2005年:都立八王子盲学校
・すでに普及していた音声ワープロ以外の利用方法の検討
・ネットワークから情報を得ることで「情報障害」の解消を目指す
・数列を音列に変換することで学ぶ数学教材の開発
・獅子座流星群のネットワークによる音声中継の実験

2005年から:都立中央ろう学校(1年目は開設準備室)
・新設のろう学校に、「見える校内放送」の設置をすすめる
・「見える校内放送」のモニタを授業中に電子黒板として利用することをすすめる

河村　宏／かわむら　ひろし
国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所　障害福祉研究部長

1970 年から 1997 年まで東京大学総合図書館に勤務。（財）日本障害者リハビリテーション協会情報センター長を経て、2003 年 7 月から現職。DAISY コンソーシアム理事、WAI/W3C 常任委員、世界盲人連合国連委員会委員、アジア太平洋障害者センター支援委員、障害者放送協議会委員。すべての人が共有する知識と情報のデザインを追及し、情報アクセス権と著作権の調和を目指した活動に取り組む。また、ソーシャルインクルージョンの立場に立ち、障害者・高齢者の災害への事前の備えへの情報支援と国際協力に力を注いでいる。

寺島　彰／てらしま あきら
浦和大学総合福祉学部　教授

大学で障害児教育について学んだ後、視覚障害者更生施設のソーシャルワーカーとして 16 年間勤務した後、厚生省（現厚生労働省）障害福祉専門官、国立身体障害者リハビリテーションセンター国際協力専門官、同センター研究所障害福祉研究部社会適応システム開発室長、同障害福祉研究部長を経て現職。研究テーマは、障害者福祉政策と福祉機器を活用したソーシャルワーク。ソーシャルワーカー時代から、福祉機器を活用してソーシャルワークを実践してきており、必要に応じて「視覚障害者用おしゃべり電話帳」や「視覚障害者用ワープロ NRCD-Pen」等の福祉機器を自ら開発し、ソーシャルワークに活用してきた。また、継続して、障害のある人々の福祉機器活用を支援するボランティアを行ってきており、（財）日本障害者リハビリテーション協会が実施する「パソコンボランティア指導者養成課程」の講師を務めている。

加納　尚明／かのう　なおあき
札幌チャレンジド　理事・事務局長

1961 年生まれ。京都市出身。
1985 年、京都工芸繊維大学卒業。
1989 年より札幌に在住。以来、北海道総合通信網（株）にて営業職に従事し、地域情報化に取り組む。
2000 年 7 月より NPO 法人札幌チャレンジドに参加。
2000 年 1 月～ 12 月、札幌市市民活動促進検討委員会公募委員。
2005 年 4 月から北海道大学公共政策大学院に入学。
2006 年 4 月より、会社を退職し、札幌チャレンジドの事務局長として専念。

湯汲　英史／ゆくみ　えいし
(社)精神発達障害指導教育協会　常務理事

1979年3月:早稲田大学　第一文学部　心理学専攻　卒
1979年3月:心身障害児通所訓練所「さざんかの会」の常勤職員として就職
1992年4月:上記法人が新たに医療機関、(社)発達協会王子クリニックを開設
　　心理・言語室担当を兼任
2002年4月:常務理事に就任

早稲田大学教育学部非常勤講師(2002年～)
(社)日本知的障害福祉連盟常務理事(2005年～)
社会福祉法人「さざんかの会」理事(2001年～)
NPO法人　子育て支援センター＜はーとふる＞理事(2005年～)
練馬区障害児保育巡回相談員(1982年～)
知的障害者雇用事業所　株式会社イクゥオール専務理事(1997年～)

著書
「おもちゃで育てる一障害を持つ子のための ファーストプログラム」(1985年　ぶどう社)
「なぜ伝わらないのか　どうしたら伝わるのか」(2003年　大揚社)
「子どもが伸びる関わりことば　26」(2006年　すずき出版)
「発達障害をもつ子への保育・子育て支援」(2006年　明治図書)
など多数。

国家資格
社会福祉士、精神保健福祉士、介護支援専門員、言語聴覚士など

開会挨拶

片石　修三　財団法人日本障害者リハビリテーション協会　常務理事

財団法人日本障害者リハビリテーション協会の片石でございます。

本日は障害者IT支援セミナーに参加いただき、ありがとうございます。

障害者の方々のIT支援を推進していくためには、継続的な関係者の努力が必要でございますが、このように関係者が一堂に会し意見交換を行うことも必要ではないかということから、当協会といたしましては昨年に続き、このようなセミナーを開催することといたしました。

昨年におきましては、IT支援に関わっている専門家の方々、そして実際に利用されている方々から貴重なご意見の発表をいただきました。今回は、昨年実施しましたセミナーの結果、そして関係者からの聞き取り調査等を踏まえまして、より効果的なIT支援を進めるために求められるボランティアの方々と、リハビリテーションに従事される専門家の方々等との連携というものをどのように進めていったらより効果的な支援が行われるかということに少し焦点を当てて企画させていただきました。

幸い、障害者のIT支援に深く関わっておられる方々の参加、ご協力をいただくことができました。全体的な支援のあり方、そしてそれぞれの障害の特性に配慮した支援はどうあるべきかということにつきまして、参考になるご意見をいただけるのではないかというふうに思っております。

参加された皆さんが、今回のセミナーから少しでも得るものがあればたいへん幸いでございます。

講演していただきます方々、意見発表していただく方々には、快くお引き受けまたはご協力をいただきまして、感謝を申し上げます。

最後になりますが、本日お集まりの皆様の中にも多くの支援者の方がおられると思いますが、日頃の活動に心から敬意を表します。

そして、今回のセミナーにつきましては、独立行政法人福祉医療機構のご支援をいただいて開催できることとなりました。このことを報告し御礼申し上げまして、たいへん簡単でございますが開催の挨拶とさせていただきます。

どうぞ、よろしくお願いいたします。

基調講演

「より良い支援の実現のために」

畠山　卓朗　星城大学リハビリテーション学部　教授

皆さん、こんにちは。畠山です、よろしくお願いします。

今ご紹介をいただきましたように、現在、大学に勤めて５年目になります。それ以前の28年間は、臨床現場、リハビリテーションセンターなどの臨床現場で、主に重度の肢体不自由の障害のある方の、生活支援といいますか、サービスと機器開発に取り組んできました。今日はその中で、いろいろ学ばせていただいたことを皆さんにお伝えしていきたいと思います。

IT支援ということなのですが、私の話は、少し皆さんがっかりなさるかもわかりません。ITにならないかもわかりませんけど、とにかくよりよい支援のためにということでお話をさせていただきます。（スライド１）

まず最初に、皆さん、今日ここにお集まりの方ということでは、「支援」というキーワードと、それからもう一つは「技術」というキーワードがあると思います。そういう意味で、皆さんがお使いの福祉用具とか福祉機器、あるいはその使いこなしも含めて「支援技術」という言葉を使わせていただきます。

障害のある利用者さんと、それからここにおられる、障害のある方ももちろんたくさんお見えになりますけれども、その方を支えておられる支援者、という言葉を使わせていただきます。利用者さんと支援者の方がここにいまして、いい支援技術があればそれでうまく物事が動いていくかというと、そうでもないように思うのです。ここに何か、大切なものが必要ではないか。これはクイズではないのですが、最後のほうで私なりの考え方をお話したいと思います。何か大切なものがあるのではないか。そんなことをずっと考えていたことがあります。

今日お話させていただきますのは、３つの点に触れて、お話をさせていただきます。
（スライド２～４）

１番目に、動機を引き出す。動機というとやる気ですね。私は常に今、学生さんを目の前にしていかにやる気を引き出すかというので戦っているのですが、まさにそのやる気です。

それから、２番目が、機器活用で生まれる生活の流れ。機器を活用していく中で、実は生活が作られていくというお話をさせていただきます。

それから３番目に、これは短いのですけれど、よい気づきに出会うために、という３つの話題でお話をさせていただきます。

この方はお風呂場で滑って、浴槽の縁に首のあたりを強くぶつけました。具体的に言うと、頸椎ですね、首のあたりの骨の頸椎の４番目を強く損傷しました。肩から下がほとんど麻痺した状態になってしまいました。（スライド５）

口にチューブをくわえ、息を吹いたり吸ったりします。圧力がずっと黒い管の中を通って白い……ごめんなさい、視覚障害の方にもなるべくわかるようにお話しますけれど、わからなければわからないということをおっしゃってください。この人はベッドで、座位、座る形で座っておら

れます。ベッドの上で座る姿勢でおられますけれど、目の前にはオーバーテーブルという幅の狭いテーブルがあります。そこに白い箱がありまして、口でくわえたチューブが白い箱の中に伝わっていきます。先端が２つに枝分かれしておりまして、両側に小さな風船がついていると思ってください。片側はしぼんでいます。片側は最初からふくらんだ形をしています。チューブが枝分かれして２つに分かれているんです。息を吹きますと、しぼんだ風船がぷくっと膨らんで、表面で軽いスイッチをカチッと押します。今度は息を吸われますと、膨らんだ形の風船がしぼんで、ちょっとわかりにくいのですが風船の中にスイッチが入っています。それを、風船の内面でカチッと押すんですね。とにかく２個のスイッチを使えるようになるんです。息を吹いたり吸ったり。

そのスイッチが、やはりオーバーテーブルの上に乗せられたテレビのリモコンにつながっていまして、この方が息を吹きますとテレビのリモコンの電源ボタンを押したことになります。今度は息を吸いますと、チャンネルをプラスってありますよね、チャンネルを順番に上げていく。それにつながっている。非常に単純な道具です。これは私が３時間くらいで組み立ててお届けしたんですね。現在では市販品で売っています。

ただ、実はこの方にお会いしてから実際に使っていただくまでに、１か月かかりました。なぜ１か月かかったのか、そのあたりをちょっとお話します。

病院で訓練を受けて、ベッドの上で座れるように訓練を受けて、家に帰ってきた。でも何もされないまま、天井を見て生活されている。なんとかしたい。当時は保健婦さんと呼んでいましたけれど、保健婦さんからのニーズが私どもに伝えられました。私はエンジニアです。リハビリテーションエンジニア、それから作業療法士、担当の保健婦さんと一緒にチームを組んででかけていきます。

まず最初の日、私のほうから「どんなことでお困りですか」と申し上げましたら、「いや、誰が呼んだんですか、何も困ってない」とおっしゃいました。「ああ、そうですか」とその日は帰ります。１週間後に、今度は私一人で訪ねていきます。「こんにちは、近くに来る用事がありましたので顔を出させていただきました」。「いや、もう特に何も困ってないですから」と繰り返されます。

実は私は３週目も４週目も通うんですね。何をしているかというと、私にはオーダーが出ていまして、とにかく４回通ってください。４回通ってニーズがなければ、終わりましょう。そこで訪問を終わりましょう。嫌がられるんですね、３週目はもっと嫌な顔をされた。

今日が４回目です。「今日が最後ですね」と、保健婦さんが運転をしながら、私は助手席に乗っていました。保健婦さんのほうから、「そういえば、あの人は野球監督をしてたんだって」、「へえ、どこの監督ですか」と聞いたら、ジャイアンツにＳ選手という選手がいました。有名な選手。若い方はご存じないですけど、うなずいておられる方にはなんとなく近いものを感じるのですが、学生に言ってもわかりませんね。へえ、と言ってそんな会話をしている間に、家に着きました。こんにちはと入っていきましたらもう怒っておられて、「もう来るなって言っただろう」っていうふうな、もう最初から怒っておられます。私が思わず口から突いて出たのが、「野球お好きなんですってねえ」って震えながらしゃべったんですね。そうしましたら「どこのファンだね」と言われまして、ごめんなさい、私は東京で話すと怒られるかもわからないんですが、アンチジャイアンツって言ってしまったらちょっと嫌な顔をなさって、嘘をつけばよかったと思ったのですけれど、でも野球の話だけは続いたんです。楽しみだね、と。野球はちょうど夏の時季で、ナイター放送をやっていて、保健婦さんとしきりに話されていました。保健婦さんのほうからも、実は今日で訪問が最後です、ニーズは何にもないのと聞いていらっしゃる。何にもないとおっしゃいまし

た。今度もう一つ、保健婦さんが最後の言葉をおっしゃったんです。どうせ駄目だろうけれど、ダメモトという言葉がありますね。駄目だろうけれど、もしあったら言ってみたら。実は私たちの支援の中では、ふざけているように聞こえるかもわかりませんけれど、そうではないんですね。どうせ駄目だろうからとおっしゃったのが、このテレビのチャンネルを変えることでした。電源ではないんですよ。保健婦さんが「どうして」と言うと、奥さんが台所に立っている時なんか、忙しそうにしている。野球放送が始まりそうなのだけれど、というときに、そんなのは奥さんに頼んだらと言うのですが、自分でこうなってしまったし、ただでさえ申し訳ない、だから我慢するということを奥様のおられないところで小さな声でおっしゃいました。とにかく今日は帰りましょうと帰って、1日おいて、これは半分ちょっと押し売り状態かもしれません。無理矢理、「とにかく使ってみてください、本当に申し訳ありません」と言って使っていただいている様子です。息を吹くとテレビが点いて、息を吸うたびにチャンネルが変わっていきます。少しずつ表情が変わってきました。目の表情も変わってきました。「ありがとうございました、これが動くことがよくわかりました、もうこれで今日を最後にしたい」と言いましたら、「いや、来たいんだったらもうちょっと来てもいいよ」ってこの方からおっしゃったんですね。

私たちの支援の中では、こういう場面ってあるんですね。まったくこちらを振り向いてくださらない方が、ふっと振り向いてくださる瞬間があるんですね。これが、実は私たちにとってもとても大切な瞬間というか、それを期待しているんですね。

とにかく使っていただくことになりました。1週間後にこの方から、奥さんを通じて電話がありました。もしこういうことが、テレビの電源操作、チャンネル操作ができるのであれば、電話を受け取ることができないか。「もちろんできますよ」、今ちょっと画面の右下に電話機、白っぽい電話機の様子が映っていますが、これは実はNTTさんと一緒に製品化をお手伝いした「シルバーホンふれあいS」という、息でダイアリングできる電話機があるんですね。月々550円で借りることができます。NTTの福祉料金です。こんな電話機をご紹介できますよ、かかってきたときには息を吹きますと送受話器を取り上げなくてもスピーカーとマイクでお話ができるんです。それをご主人にお伝えくださいと電話で言いましたら、それを聞いたご主人が、電話の向こうで聞こえたんですけど、「なんで最初から教えなかった」と怒っておられるようなんですね。私はちょっと意地悪な気持ちが出て、「奥さん、確か何もいらないとおっしゃってましたね」って、それをまた奥さんが伝えてですね、「謝っておけ」というやりとりがありました。これはちょっと余分な話をさしあげました。

今ずっとお話をさせていただいている様子を、これは実は私たち、振り返ってみるとよく感じるのですが、スモールステップの原則という言葉があるそうです。とても低い踏み台なんですね。ですけれど、私たちからみると、「え？それが大事なの」ということが、実は人の気持ちを動かすことがあるということを思います。逆に、私たちから見て「こういうのを使ってもらえないと駄目だよね」とか「これこそ本当の支援だ」という先端的な技術とかですね、自分の中でこれを試してみたいというときに、失敗してしまうことがあるんですね。それは、よくよく後で反省してみると、私たちの価値観であって、利用者さんの価値観ではなかったということに気づきます。

それから、まずは小さなステップから、それから後は継続的に接近したり、その人のニーズに接近したり、あるいはとにかく継続的に関与していく中で、少しずつ何かに近づいていくというのが私たちの支援の大切さではないかというふうに、これはもう皆さんが日々感じておられることをここでお話しただけだと思います。（スライド6）

よく、先ほどの「動機を引き出す」、「やる気を引き出す」には、2つの要素があると言われていますね。これは和田秀樹さんという方が本の中で書いておられるのですけれど、外発的動機と内発的動機がある。外発的動機は何かというと、よく、へんな言葉かもわかりませんけれど、飴とムチとかですね、美味しいものを目の前に与えたり、ムチで叩いたりというのが、ちょっと怖いのですが、そういう要素と、もう1つは内発的動機は内から自然に湧いてくるということですね。外発的動機は、何かすると褒美がもらえる、褒美がもらえるから頑張ろうという、これも決して悪いわけではないですね。それから、何かしないとたいへんなことになる。原稿を出していないと後でたいへんなことになるとか、日々感じているのですが、学生さんなんかはレポートを出さないとたいへんなことになる。これも動機なんですね。もう一方で、内発的動機は、先ほどから申し上げましたように内から湧いてくる、あ、自分はできるんだということに気づく。これは自己有能感というような呼ばれ方をしますね。自分ができるんだ、自分もできるんだ、あるいは場合によっては他人よりもできるかもわからない。そんな気持ちを引き出すことが、実は大切なのだろうと思います。

これは、実は技術の素晴らしさというよりも、ちょっとした技術でもそれを引き出すことがあるのかもしれない、そんなことすら思います。(スライド7、8)

2番目の話題に移っていきます。機器活用で生まれる生活の流れ。(スライド9)

これも私が横浜市の総合リハビリテーションセンターで、ここは在宅訪問サービスをやるということで、特徴があるんですね。必要に応じてスタッフがチームを組んでどんどんでかけていく。先ほどの方もそうなのですが、そこで出会った場面をご紹介したいと思います。

今画面に映っているかた、申し訳ありません、肢体不自由の方が続きますけれど、皆さん、別の障害に接しておられる方はとらえ直しながらちょっと考えていただけるとありがたいです。(スライド10、11)

この方は今ベッドに横たわっておられまして、気管切開をして喉に穴をあけまして、人工呼吸器をお付けになっています。ALS、筋萎縮性側索硬化症という難病です。実はこの映像を撮らせていただく3年前までは、横浜の緑区から東京の霞が関まで毎日通勤電車で通勤されていた方なんですね。3年後の今の様子なのですが、人工呼吸器をお付けになって、この方が自由に動かせるのが右手の人差し指だけという状態です。5ミリ程度。操作力も非常にわずかな力しかありません。皆さんの頭を、ちょうど朝の6時というふうに戻していただきたいですね。このお宅の時計は6時を示しています。この時刻というのは、このお宅ではまだ誰も目を覚まされていません。奥様は毎晩深夜2時、3時まで及ぶ介護で、慢性的な寝不足状態で、まだ目を覚まされていません。朝6時にこの方はぱっと目を覚まされます。この方の生活は、右手の人差し指から始まるんですね。筋萎縮性側索硬化症とか、あるいは筋ジストロフィー、そういった方の場合は、たとえば指先が動く場合、動かす距離ですね、移動距離はとても小さい。数ミリ程度ということもあります。操作力もとても小さいですね、100グラム以下。0グラムにほとんど近い場合もあります。ただし、指先の巧みな動作、とんとんとんというような動作が残っていることがあります。巧緻性のある動作、巧みな動作ですね。カチカチカチという、右手の人差し指に付けたスイッチを、指先をカチカチと動かします。そうすると、今テレビの上に環境制御装置という黒い箱が乗っかっています。指先をカチカチカチと動かすと、ランプが順番に押した数だけ動いていきます。そして、今度は目的のところ、たとえばテレビというところで長めに押されます。そうするとテレビがぱっとつきます。これは身の回りの電気製品を操作するための道具なんですね。朝のニュース番組を15分ほどご覧になります。しばらくしてからまたカチカチカチと、テレビをいったん消して、それからしばらくしてから、今度は同じテレビなのですが、そこにコミュニケーシ

ョンエイドの電源をご自分で入れられて、文章を書き始めます。ただ1個だけで操作できる、1個のスイッチだけで文章を書ける方法があります。順番にランプが動いていって、かちっとやると今度は縦に動いていって、3回押すことで文章を作れる道具があります。1時間ほど文章をお書きになります。発症してからこれまでずっと自分が辿ってきた経過、それからご自分がこれからどうなっていくのかということをおわかりになっていますので、家族一人一人に対するメッセージを書かれます。指先だけで1時間というのは実はとてもたいへんなのですが、1時間文章を書かれまして、そしてパソコンに文章をご自分で保存されます。そして、いったん脳を休める意味でテレビを切って、しばらくしてからまたテレビを点けて、チャンネルを回して別の番組をご覧になります。時計は朝の7時半です。

何をお話しているかということですね。実は7時半になると奥さんがようやく「おはよう」と顔を出されます。何をお話していますかというと、私たちの生活の流れとはまったく違います。朝起きて顔を洗ったりトイレへ行ったり、そういうことはできません。でも、この方なりの生活が、ここで営まれているということをぜひおわかりいただきたいのです。

残念ながら、この方の指先が動かなくなりました。若いスタッフが額の上にスイッチを貼り付けて、眉毛を上げると皺ができますよね。距離が短くなります。額の距離。かちっとくっつく。というかこれ、いいから作ってみようというときに気をつけていただきたいのですが、電気の知識が十分にない人がやると感電事故を起こしたりしますから、もしやられるのであれば、右側に、薄い映像で申し訳ありませんけれど、光ファイバーを眉毛のあたりに持ってくるんですね。これで感電する心配はありません。そして眉毛で光を反射させるとか、そういう方法があります。眉毛の上に、ちょっと紙をつけて反射物をつけたりします。こういう方法を使いますけれど、これを作ってくれました、若いスタッフが。ただ、私たちは、もう先ほどご紹介した生活の流れは無理だろうと思っていました。そうしたら、見事にそれは違っていました。この方が、その後の約10年ですね、この額だけで、額を何回も動かすというのはたいへんだと思うのですが、額だけで先ほどご紹介したような生活を営んでおられました。

あるとき、この方がパソコンの画面に書かれた言葉、自分で生活を組み立てられるというのは、生きている実感がするということをおっしゃいました。それから、私たちが訪ねて行くと、よく奥様に向かって、パソコンの画面上で「お茶をお出しして」とか「椅子をお薦めして」という、家族の長としての役割もされていました。（スライド12、13）

最終的には、小冊子も発刊されました。

今、この前に映しているスライドは、逆三角形で下から生活、遊び、創作、それから一番上の社会参加という3層になっているんですね。これは実は私たちが普段営んでいる生活をここで表しているつもりなんです。生活があって、遊んだり何かを作ったり、それからここに皆さんがお集まりのように、まさに社会参加している。この横幅を生活とか活動の幅というふうに考えていただきたいのですが、これが私たちの生活です。ただ、先ほどご紹介しましたように、特に進行性の疾患をお持ちの方の場合、病状が進行して行きますと、社会参加が奪われて、そしてさらに遊んだり何かを作ったりということが奪われて、さらに進んでいくと生活すら奪われてしまう。最後は生命維持だけの段階になってしまう。そんな場面に出会います。（スライド14）

私たちは実は、こういう場面で相談を受けることがあるんですね。これも間違えてはいけないのですが、これは私自身が間違えていたことなのですけれど、一見すると「ああ、何もできない方なんだ」、こう支援者がそもそも間違えてしまいがちなんですね。表情がうまく、表情筋を動かせない方を見ると、「ああ、この方は何も表情ができない方なんだ」、でも目の表情を見落とした

りしていることがあります。今日お話してきましたように、生命維持段階にある方においても、人の支援とそして支援機器、福祉用具とかそういうものをうまく活用することで、生命維持段階にある方が、ご自分なりの生活を営んだり、あるいは遊んだり、電話回線を通じて囲碁で遊んでおられる方もおられます。それから、好きな写真、駅でカメラのシャッターを切れるようにしてくれというニーズがありまして、好きな野鳥を撮られて、市民ホールで写真展を開かれて多くの人に囲まれた、そんな場面がありました。まさに立派な社会参加だと思います。私たちとは、自分の、支援者の価値観ではなくて、それぞれの人にとっての価値観に目を向けていくということが必要ではないか、そんなふうに思います。

3番目の話題です。(スライド 15 ～ 18)

よい気づきに出会うために。先ほどから、一番最初にこんな絵をお見せしました。利用者と支援者がいて、支援技術がある。素晴らしい支援技術があればそれでいいのか。すると、そうではない。これは実は単純なことなのですけれども、私は「気づき」ということだと思います。とにかく気づかなければ、いい支援はできない。私自身が気づかないで支援を失敗してしまったことは、いくらでも、失敗のデパートというくらい、これは余計な話なのですけれど、私は失敗学会の会員なんですね。言うと皆さん、お笑いになるのですが、これは本当のことです。本当に入りました。いっぱいの失敗があるんですね。でも失敗から学んで成功につなぐという意味で大切だと思うのですけれど、この、気づかなければ失敗してしまうということで、最近出会った言葉で「セレンディピティ (serendipity)」という言葉があります。これはよくテレビなどでも紹介されていますけれども、偶然の幸運に出会う能力。能力がいると言われるんです。宝くじを買ったら当たったって、そうじゃないんですね。なにかAというものを一所懸命追い求めていると、Aには届かなかったのだけれどBというもっと素晴らしいものに出会ったという。でもそれも、Aを見つけられなかったということでがっかりしていると、Bすら見落としてしまうという、実はそういう能力がいる。こういう能力を磨きたいと私は思っています。

ただ、気づかなければ、このセレンディピティも生きてこない。そういう意味で、私はよい気づきに出会うために、これは特に在宅訪問の支援の中で本当に感じていったことで、とにかく利用者さんと場と時間の共有を重ねる、一回こっきりではなかなか見えてこない、少しずつ見えてくる。ここは、私たちが見えてくるだけでなくて、利用者さんも私たち支援者が見えてくる。双方向なのだと思います。それから、先ほども申し上げましたように、先入観を排除する。何となく勉強していくと、後遺症がこうなんだとか、こういう場合にはこうすればいいという、マニュアルサービスにどうも行ってしまう自分を感じるんですね。だけど、そういう中で、やはり自分の先入観がどんどん入って行ってしまう。それから、私たちは何か道具をお届けしたときに、私が作ったものを使ってくれなくて、もっと自分で工夫されて何かされてしまった場合に、がくっと来ることがあるんですね、支援者としては。なんで使ってもらえなかった、これは失敗だと思うのですけれど、実はそうじゃないということを前に教えられたことがあります。だって、利用者さんがうまくいったら、それは成功じゃないかというところになかなか気づけない自分があるんですね。だから、相手の価値観に接近するということを、私自身が難しいのですけれど、そんなことを考えています。

それから最後に、角度を変えてみる。普段とは違う角度から見ないと見えてこないものがあるように思います。これは次の、最後の部分でお話します。

最後の部分ですけれど、私はこの世界に、この世界というか支援の世界に入ってもう三十数年経つのですけれど、それ以前は電子工学専門で、ロボットの開発をしていたのですね。最初にひょんなことからこの世界に入ったときに、まず利用者さんとお話ができること、それを目標にし

ていました。コミュニケーションが下手ということもあって、ただ、実はそれだけでは仕事ができないということに後で気づいてきます。現在私は３つの視点、利用者さんと接する場合に３つの視点を持っています。これを押しつけるつもりはありません。皆さんなりの、考えるときの材料にしていただければと思います。（スライド 19、20）

まず、最初に利用者さんと出会う場面を思い浮かべていただきたいのです。少し離れたところから「こんにちは」と声をかけながら近づいていくのですけれど、少し距離があるんですね。そうすると支援者に映ってくる視野には、比較的若い方で、たとえばここに今絵で描いてある様子では、ベッドに座られて、背もたれを上げて座ることができるんだ。それから、絵には描かれていませんけれど窓があって、今日は窓が開いていて気持ちいい風が入ってくるとか、それからベッドの置かれている位置もわかります。これは在宅訪問の場合ですね、家の中にぽつんと置かれていたり、交差点のような場所にあったり、これは全体をつかむという意味でとても私は大切だと思います。これはちょっと冷たい表現に聞こえるかもわかりません、「観察者の視点」というふうに、ここでは呼ばせていただきます。とても全体像をつかむという意味では大切です。
（スライド 21）

ただ、これだけでは仕事ができませんので、利用者さんに近づいて行って、そうするとこちらを振り向いてくださったり、あるいは覗き込んだりして、利用者さんの表情とか、あるいは息遣いなんかも感じ取ることができます。これを、私が最初に目指していた「対話者の視点」と、コミュニケーションできればと言っていた、ただ私はここから入ったのですけれど、よく言われました。もうちょっと離れないと利用者さんのことが見えないよ、近づきすぎだということでよく叱られました。私が尊敬するソーシャル・ワーカーからよく言われました。（スライド 22）

ただ私はこの２つの視点でずっと仕事をしてきたのですけれど、もう１つこの先に視点があることを教えられました。ご覧になれる方はちょっとよくご覧にならないとわからないのですけれど、支援者と利用者さんの距離は変わりません。でも利用者さんがあっちを向いているんですね。あっちというかこっちというかよくわからないのですが、あっちのほうを向いているんですね。こちらを振り向いてくれていないのです。そうすると、ああ、横顔というと、そうじゃないんです、ここで申し上げたいのは、利用者さんのとらえている世界が、どこまで支援者に見えるのかなというのが、これはちょっとわかりにくいと思うのですけれど、とりあえず「共感者の視点」と呼ばせていただきます。（スライド 23）

今お話したように、３つの視点、観察者、対話者、共感者。私にとってはこの３つの視点が大切です。（スライド 24）

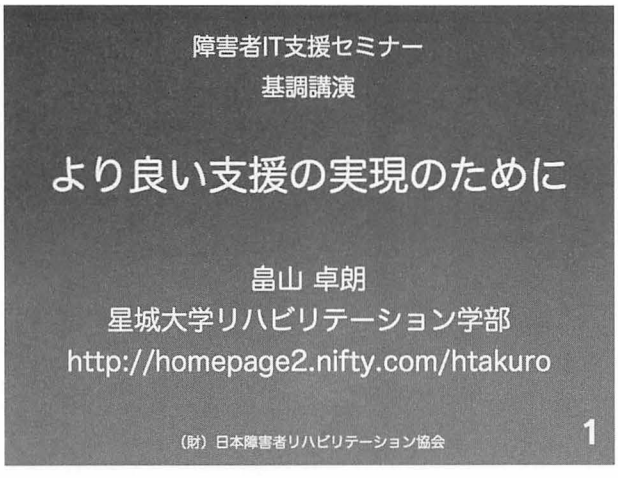
でも、３番目の視点というのは、私には見えていませんでした。実はそれを教えてくれたのは、もう既にお亡くなりになっているのですけれど、国立療養所南九州病院の筋ジス病棟に入院していました轟木敏秀さん。彼が 24 歳のときに、私は初めてお会いすることになりました。それから 11 年間、彼は生きました。筋ジストロフィーのデュシェンヌ型の彼です。今画面に映っている様子では、ベッドに完全に水平状態で横たわって、人工呼吸器をつけて、幸いですね、気管切開をした当時は声を出せませんでしたけれど、この状態では声が出せます。ただ、ベッドの背もたれを上げたり、これは心臓に負担があるということでできません。側方を向く、横向けの姿勢も負担があるということで、できません。天井を見ているだけの生活なんですね。（スライド 25）

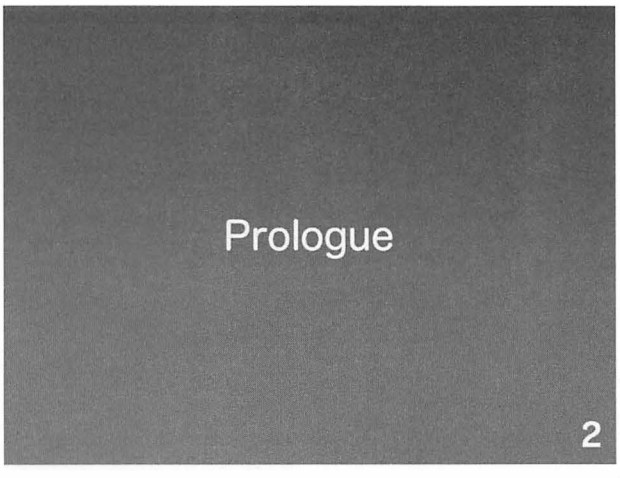
1995 年に、「我が分身たち」という NHK の映像が流れました。40 分間の放送なのですけれど、最後の３分間の映像を実は私はこの物作りでお手伝いをさせていただいたのですけれど、物作りしているときには道具の意味が本当にはわかっていませんでした。この映像が流れて最後の３分間の中で、普段とは違う世界があることに気づきました。（スライド 26）

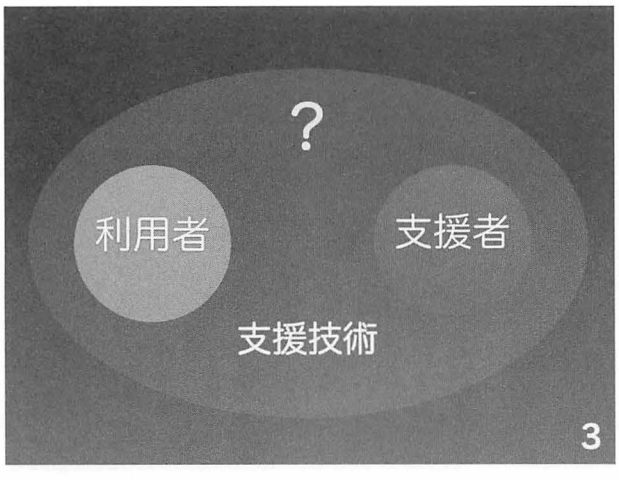
私はこんなふうに思っています。IT 支援というのは、やはり生活支援の一環として、あるいは生活の流れの中で支援していくんだ、IT だけが先にあるのではない、そのあたりを思いながら、いつも反省しながら、仕事をしています。

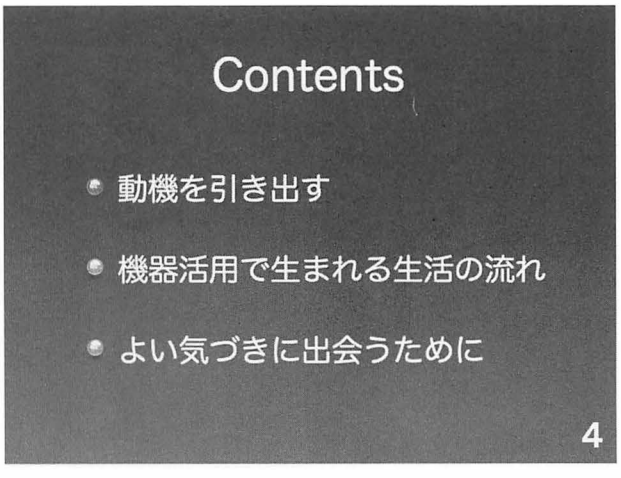
どうも、長時間ありがとうございました。失礼します。

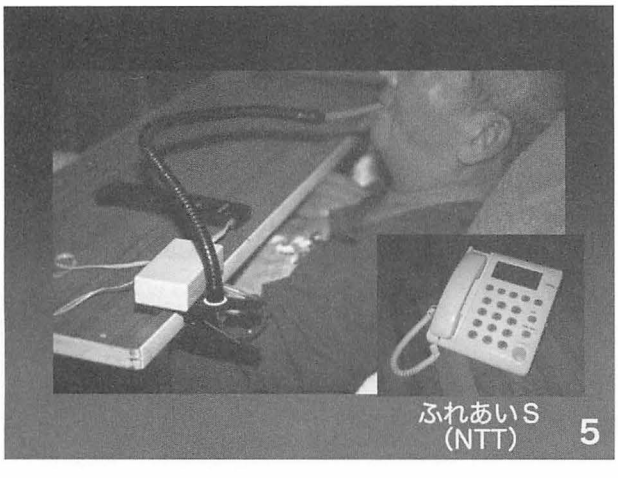
資料スライド

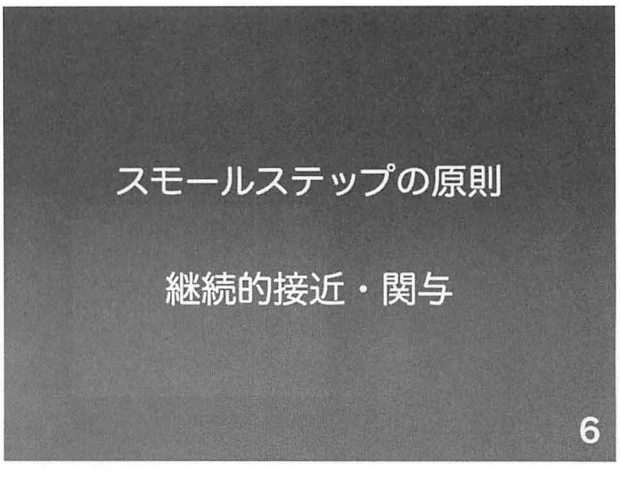










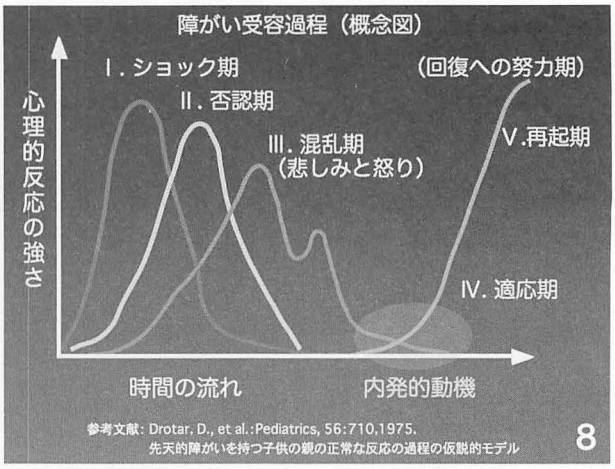


動機（やる気）を引き出す

- 外発的動機（アメとムチ）
  - 褒美がもらえる
  - しないと大変なことになる
- 内発的動機（内から自然に湧く）
  - 自分はデキル（自己有能感）

引用　和田秀樹: The Thinking and Behavior to Succeed, 幻冬舎, 2006

7



参考文献: Drotar, D., et al.:Pediatrics, 56:710,1975.
先天的障がいを持つ子供の親の正常な反応の過程の仮説的モデル

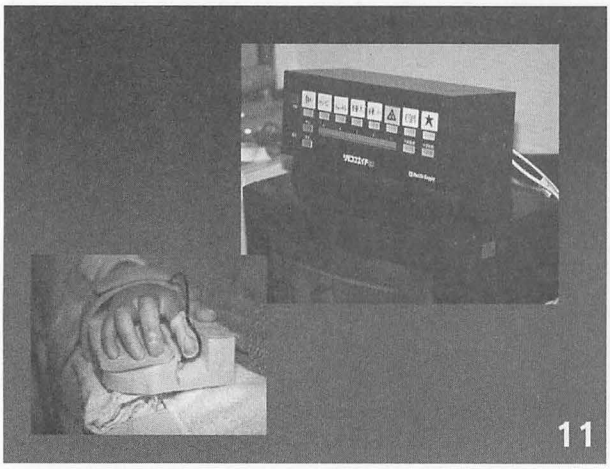
8

Contents

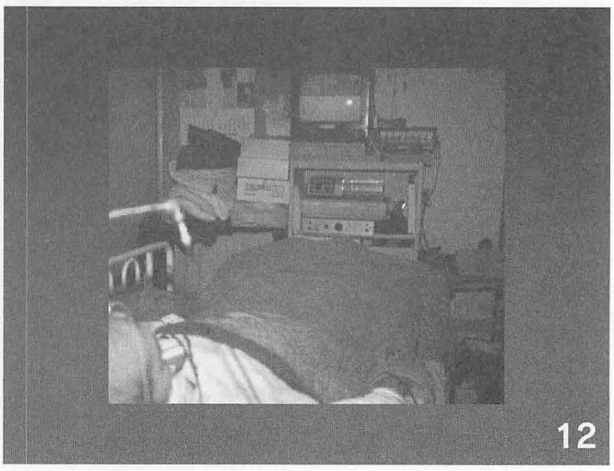
- 動機を引き出す
- 機器活用で生まれる生活の流れ
- よい気づきに出会うために

9

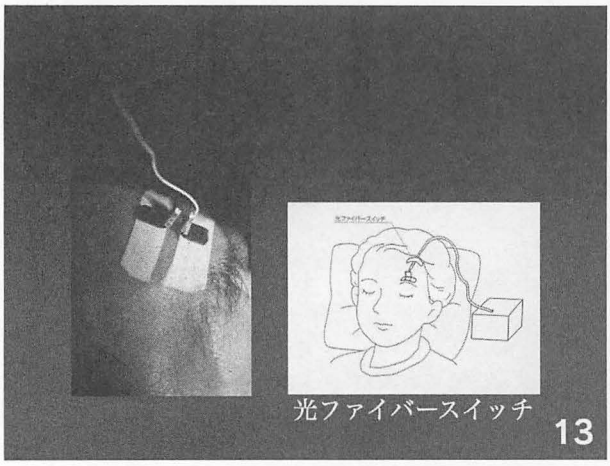
10



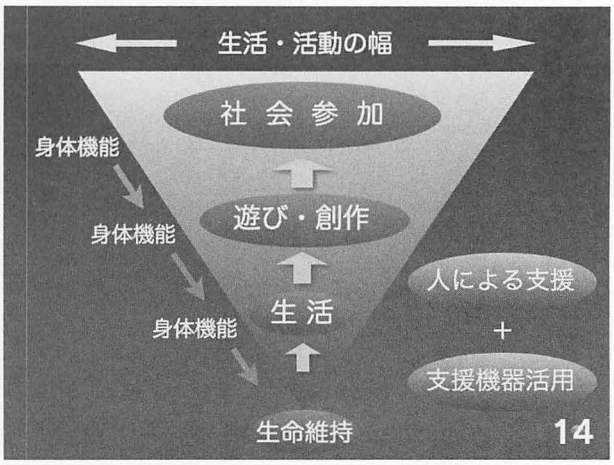
11



12



13

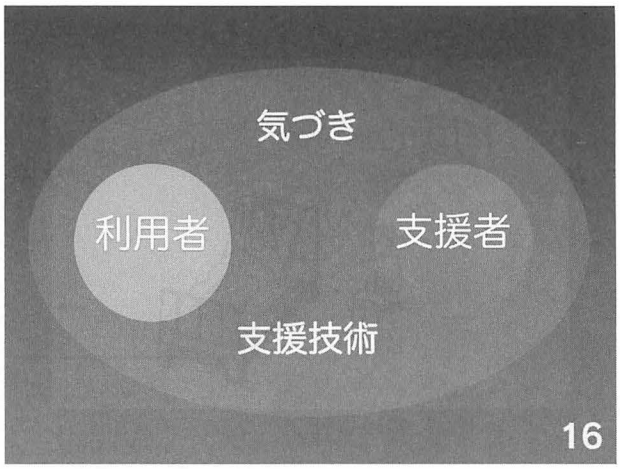


14

Contents

- 動機を引き出す
- 機器活用で生まれる生活の流れ
- よい気づきに出会うために

15



16

Serendipity

セレンディピティ

偶然の幸運に出会う能力

17

よい「気づき」に出会うために

- 場と時間の共有を重ねる
- 先入観を排除する
- 相手の価値観に接近する
- 角度を変えて見てみる

18

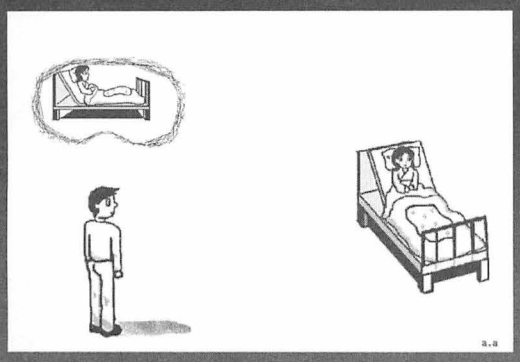
Epilogue

19

利用者を捉える３つの視点

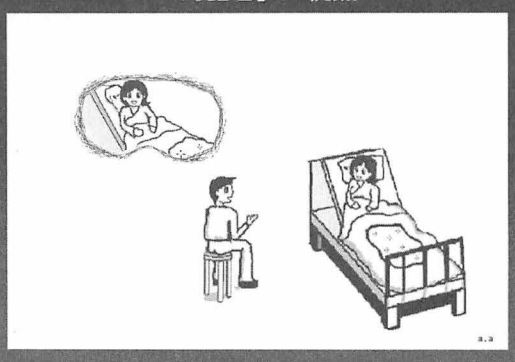
20

「観察者」の視点

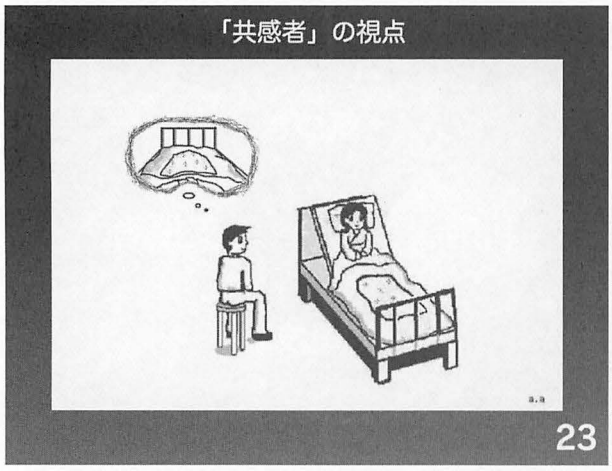


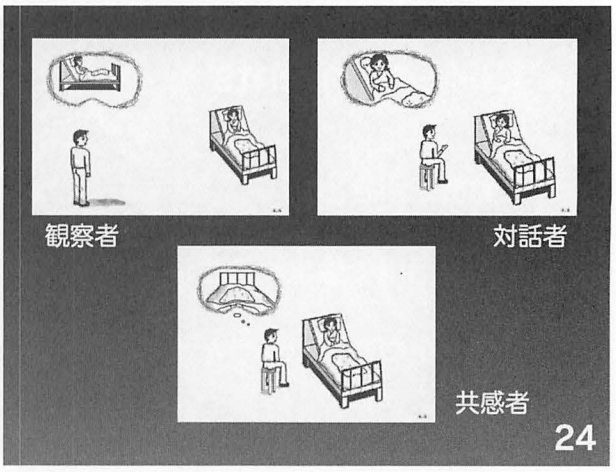
21

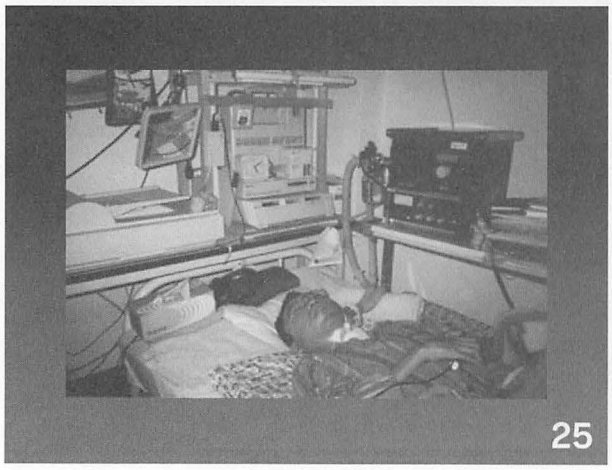
「対話者」の視点



22


「共感者」の視点
23


観察者
対話者
共感者
24


25

気づきの達人に！
26

講演1

「肢体不自由児・者の視点から」

田中　勇次郎　都立多摩療育園医療科　主任・作業療法士

今、ご紹介いただきました田中です。よろしくお願いします。

私は日本作業療法士協会（OT協会）にも属しております。今日のお話ですが、協会にITサポートという組織ができましたので、そのことと、あとは障害に応じたパソコンの操作方法や意思伝達装置の操作スイッチの選択方法などのお話をしていきたいと思います。よろしくお願いします（スライド1～2）。

まず、OT協会についてご紹介したいと思います。OT協会ができたのは昭和47年です。現在の会員数が約3万人います。そして養成校が158校あって入学定員が6,898人です。まだ学校が増えていますので毎年7,000人ぐらい卒業生が出てくると思います。この様な状況の中で、作業療法士は医療、保健、あるいは教育、職業、福祉というところで仕事をしています（スライド3）。

次に障害者IT支援についてですが、総務省の「障害者IT利活用支援の在り方に関する研究会」という研究会の報告書が出されました。先ほどお話しされた畠山さんがここに関わられておられたと思います。この報告書の中に、「リハビリテーション分野では、IT支援を本来業務として進めやすいのは作業療法士である」と書かれています。このことに対して「組織として対応を急がねばならない」ということになりました。そこで、今年度からIT支援組織を作って活動を開始したところです。私がこの部門のリーダーになり、現在、e-AT協会という組織と一緒に仕事をしています。

次に挙げますATネットが総務省のバリアフリーポータルサイトを引き継いだホームページです。この中に、作業療法士のＩＴ支援に関する仕事を紹介しようと動いています。これが充実していけば、皆さんによりよい情報が提供できると思います。また、作業療法士自身のIT支援に関する知識・技術の向上にも役立つと思い、ホームページ作りを進めております。また、事業部でも障害者ＩＴサポートに関する研修会を始めています。OT協会の仕事を簡単にご説明しました（スライド4～7）。

この画像はリウマチの方が頸椎の手術後にパソコンを操作している画面なのですが、障害に応じたパソコン操作方法の選択については、神経難病の方を例にとってご紹介します。

まず神経難病のご説明をしようと思います（スライド8）。

神経難病は原因が不明であり、的確な治療法がなく、予後が不良で長期・慢性の経過をたどり、療養に高額な費用がかかり、患者・家族の精神的・物質的負担が極めて大きくなります。このような難病の条件を満たした神経原因性の疾患を神経難病といいます（スライド9）。

次に神経難病の運動機能障害の特徴と代表的疾患についてご説明いたします。簡単に書いてしまったのですが、運動機能の障害として、一つは協調運動不全です。手が震えたり揺れたりする状態が起こり、掴んだり触れたりすることが正確に行えなくなります。その代表的な疾患としては脊髄小脳変性症（SCD）があり、その中では多系統萎縮症（MSA）が数的に多い疾患です。他の疾患ではパーキンソン病があります。

もう一つは、筋力低下が主症状になっている疾患です。筋力低下があると力が落ちてしまいます。こういう病気の代表的な疾患は筋萎縮性側索硬化症（ALS）です。あとは脊髄性筋萎縮症(MSA)で、ウェルドニッヒホフマン等の病気があります(スライド 10)。

機器導入にあたって考えるべきことを触れたいと思います。機器導入に際してチェックしておくべきことは、一つには導入の目的を明確にすることです。何のために機器を導入するのか。電子メールを利用するのか？あるいは会話に利用するのか？そのためには、利用者の能力を知らなければいけない。例えば、意思伝達装置の導入を考える場合、漢字変換機能があったほうがいいか？レッツチャットのように会話だけでいいか？検討することになります。次に、使用環境を知ることです。設置場所がどのようなところになるか？介助者はいるのか？使用頻度はどの程度か？コールとして利用する必要がるのか？あるいは、操作スイッチはコールだけ利用できればいいのか？コミュニケーションエイドの操作も必要か？このようなことを考える必要があります。

その他として、他の用具と比較することです。漢字変換を利用して文章を作るというワープロ作業の場合、意思伝達装置でもいいし、パソコンの入力支援ソフトを使ってもいい。どちらがいいのか比較する必要があります(スライド 11 ～ 12)。

次に、どのような基準で機器を選択するかと言うことをお話しします。基本的にはご本人が希望する方法です。皆さん手を使うことを望まれますので、そこでやれるように考え、駄目ならば他の部分、例えば足を利用するという考え方です。また、用具の選択としては一般製品でやれることを考え、駄目なら特殊なものを使うという考え方です。

次は構造が単純なもの。それが駄目ならば複雑なものでもよい。自由度が高いもの。それが駄目なら低くてもよい。キーボード操作ができればそれを利用し、キーボードが無理ならマウス。それも駄目ならスイッチという考え方です。

あとは、なるべく経済的な負担がかからないものにする。これは給付制度のあるものとないものということも関係します。こういう基準で考えています(スライド 13)。

次に、パソコン操作方法の選択フローをご説明します（スライド 14)。皆様のところに、この部分だけ印刷したもの（パソコン操作方法の選択フローとその解説）が配布されていると思います。これは 10 年くらい前になるのでしょうか、リハ工学関係のある委員会があって、畠山さんも一緒におられたと思うのですが、そこで作ったフローチャートを少し改良させてもらったものです。

まず、キーボードが直接指で操作できて、同時打鍵もできて、目的の文字が正確に入力できれば普通のものを利用できる。こういう流れで考えています。キーボードの操作が指でできない場合は、腕を吊るか支えればできるのではないかと考える。それで同時打鍵や目的の文字を入れられれば普通のものを使うことができる。

次に、同時に同時打鍵できない場合はどうしたらいいのか。これはキーをロックさせる仕組みを作るとか、Windows のパソコンであればユーザー補助がありますので、その設定をして目的の文字を入れられるようにする。これだけでは、目的の文字をうまく入れられない場合は、キーガードやいろいろな用具、補装具などを導入して利用できないかを考えていく。隣接した文字を間違えて入力してしまう場合は、これもユーザー補助の設定でキーの応答特性を変更してみる。この様にして、一般のキーボードをそのまま使えるような方法を考えます。

キーボードが使えない場合は、タブレットやポインティングデバイスとオンスクリーンキーボードなどを使う入力手段を考えていきます。最終的には、パソコン入力支援ソフトと操作スイ

ッチで利用することを考えます。

異なった手段として音声認識という方法があります。音声認識ソフトが利用できる場合があります。音声認識手段をフローのどこに入れるべきか検討が必要ですが？これも加えたフローを出しますのでご覧下さい(スライド15)。

我々がよく使う補助具に、ポータブルスクリーンバランサー(ＰＳＢ)という腕を吊る用具があります。これで腕を吊ってキー操作をさせると簡単にできる場合があります。この方々はALSですが、上から吊るしたり、下からトラフで支えたりする方法でやります(スライド16)。

これはWindowsのユーザー補助設定画面です。フィルターキー機能の設定が有効で、特に手の震えのある方は、入力を保持させるような設定や、オートリピートを消すような設定をするとMSAの方などに有効です。これがその画面です(スライド17)。

このように入力キーボードの付いたウェブ端末を使われている方の場合は、ユーザー補助の設定ができないので、アクリル板等を利用してキーガードを作り、そこにキーをロックさせる仕組みも作ります。キーガードにリング状の部品を取り付け、キーをロックさせる時はリングを縦にしてキーを押し込むようにします。筋力低下で手指が曲がってしまう場合は、装具で関節を固定して指を伸ばした状態にさせます。この様な工夫を施し、今まで使われていた機器を利用できるように考えていきます(スライド18)。

これは少し古い画像ですが、指が全て伸びてしまって曲げられない状態への対応です。このよう場合は、触れてはいけない指を包んでしまう。人差し指だけでキー操作するようにベルト状の装具を作りました(スライド19)。

これはタブレット型の入力装置です。KBマウスという畠山さんが作られたものです。これを使っている筋ジスの方です。自由度が高いことで活用していました(スライド20)。

これはオンスクリーンキーボードです。MS-IMEのソフトキーボードとATOKのクリックパレットです。これらは有効に使えます(スライド21)。

ポインティングデバイスとオンスクリーンキーボードを組み合わせて利用しているALSの方ですが、クリックボタンが押しにくくなってしまって、その部分を外に出しています。外に取り付けているスイッチはマイクロスイッチです。また、「手に汗をかきマウスから手を離すことが困難になり困る」という訴えがあり、綿の手袋を装着させて汗で手がくっついてしまうことを防いでいます(スライド22)。

この方は、ビクターのハンディマウスという製品を改造して利用しているＳＭＡの方です。ポインティングデバイスを改造して、顎あるいは口の動きでポインターレバーを操作し、改造したクリックボタンを手で操作しています。インターネットで大学の講義を受けることに活用しています。在宅の現場でいろいろと工夫をした方です(スライド23)。

ジョイスティックや操作スイッチでオンスクリーンキーボードを操作する方法の例で、マウスコントローラーという機器を利用しているALSの方です。それぞれのジャックに操作スイッチのプラグを入れて、マウスの動きを６個のスイッチで行っている画面です(スライド24)。

これはＮＥＣのオペレートナビという入力支援ソフトと操作スイッチの例で、スイッチボタンを足で操作しているALSの方です(スライド25)。

音声認識ソフト、これはViaVoiceです。これは動画なのですが、音が出せないので静止画像にしています。この方は呼吸器を装着していますが、呼吸器のリズムで声が出るので、音声認識ソフトをどの程度認識するかやってみました。ある程度認識してくれることが分かり、キネックスと併用することでパソコン操作が結構速くできるようになることが確認できた方です(スライド26)。

事例を紹介しようと思います(スライド27)。
この方はMSAの50歳代の方です。合併症治療の入院期間中にパソコンの操作を指導してパソコンが使えるようになり、退院後インターネットを活用することでいろいろなことがきるようになった方です(スライド28)。キーガードが便利に使えていた例で、その画像がこれです(スライド29)。このキーガードは手作りでなく、業者に依頼して作ってもらったものです。MSAのように手が震える方でも他のキーを触れないで済み有効です。Windowsのユーザー補助設定は必要なくこれを取り付けるだけで十分でした。

次はALSの方で、この方は人工呼吸器を常時装着しており、会話は通常文字盤をアイコンタクト方式で利用しています(スライド30)。意思伝達装置は「伝の心」を使っていて、入力手段はタッチセンサーです。この画面はちょっと見づらいのですが、アンティーク用品のWebサイトの画面です（スライド31)。以前からアンティーク用品の収集が趣味だったようです。ショッピングができるようになってとても喜ばれました。神経病院の在宅診療の中でフォローしていた方で、「お買い物もこういうやり方ができますよ」とお話ししたら、ネットショッピングにハマってしまいました。

これは30代のALSの方で、この方は車椅子に座ることができています(スライド32)。発声はかなり厳しくなって文字盤を使っています。仕事でパソコンを使われていた方なので、パソコン入力支援ソフトのオペレートナビと、らくらくマウスというスイッチ型のマウスを導入しました。これらを利用して仕事をされている画面です。
仕事の内容は物品の管理で、パソコンに送られてくるデータをチェックし、必要な物品を発注することです(スライド33)。以前から在宅勤務が可能な仕事であったようです。
ALSの方は手の障害から始まる方が多く、上肢は全廃状態でも足は動くという方が結構おられます。以前、神経病院の作業療法室で在宅患者さんのＱＯＬの状態を調査したのですが、この方は以前と変わらずに仕事をされているので、ＱＯＬがほとんど低下していないという結果がでました。

今までお示しした方々がＩＴ機器を活用できたのは、当然本人の資質や家族の介助・協力もありますが、お医者さんがご本人に神経難病であることを伝え、十分に病気の説明をして、ご本人がそれを受け入れたことが大きな要因になっていると思います（スライド34)。その他、在宅医療支援体制が整っていて、介護にあたる家族や介護者も安心して在宅療養生活を送ることができたこと。具合が悪くなれば入院できるという安心感が得られていたこと。機器の不具合や運動機能の変化に対して、作業療法士が出向き迅速に対応したことなどが挙げられます。

次に参ります。

今度は操作スイッチのことをお話したいと思います(スライド35)。

これはALSの例ですので、他のタイプの障害の方に合うものかどうかは分かりません。これもお手元に資料(ALSの操作スイッチ選択フローチャート)があると思います。基本的に操作スイッチで動かす意思伝達装置などは、手が動いていても目で操作するという方はいません。手が動けば手を使いたいと思われる方が多く、指が使えれば指、そういう流れでスイッチを選択していけば良いと思います。ただ、ナースコールは頻回に操作しなければならないので筋力が落ちてくると、手以外のほうがよく動く場合があります。それでもご本人が「いや、手でやりたい」と手にこだわられることもあるし、また「いや、違うところでも」という方もおられる。このような場合は、よくお話して替えていくことになります。なるべくご本人の希望に沿うようにする。動作に必要な力を軽減させるために、スイッチからセンサーに替える。違うところでよければ、動くところに替える。このような流れを載せてあります。手以外のところは、左から足、口の回り、額、眼球の動き、水平眼球運動をとるセンサーを使ったりします。そして、左の上のほうに脳血流量YES/NO判定装置というものがあります。今は製品化されています。これは全く動きがなくなってしまう、Totally Locked-in Stateという状態の方が対象となります。これは生体反応を利用してYES/NOを判定するものです。100%確実というわけではないのですが、脳血流量の変化を見るということで意思伝達する。一つの手段です。神経病院にいたときに何人かの方に試させてもらいました。ちょっと時間は掛かりますがよく反応していました(スライド36)。

これは、指を持ち上げてスイッチを操作する。股関節の外旋で操作する。さっきの画像を大きくしたところです。ニューマティックセンサーを足で押す。顎でタッチセンサーを操作する。唇で触れて操作する。額のところで操作する。眼球の水平方向の動きで操作する。こういうものがあります(スライド37～44)。

病院などの施設では、操作スイッチをナースコールに接続する必要が起こります。センサーの間に入れてナースコールに接続する機器も出ています。一つの機器を載せました。センサーコントローラーです(スライド45)。

医療との関わりの必要性を述べます(スライド46)。これは私の弟です。脳性マヒです。首が悪くなってしまって頸椎の手術をした後、「伝の心」を使っている文章を作成しています。その画面です。療養施設で生活する中、今まではキーボードを押せていたのですが、加齢による問題で不可能になりました(スライド47)。

神経難病は当然ですが、他の疾患でも加齢と共にいろいろな二次的問題が起こってきます。それぞれの状況に応じて適切な治療が必要になると感じています。これは神経病院の例ですが、入院から在宅という方向を示していますが、入院から在宅も含めて医療のサポートは重要です(スライド48)。

神経病院の難病の患者さんの診療形態ですが、当初は外来通院です。時期がきて診断確定のために入院し、その後また外来通院しながら生活します。だんだん通院ができなくなり他院に入院するか、神経病院の在宅診療になるか、あるいは地域移行するか選択することになります。ただ、在宅診療や地域移行となっても、合併症やショートステイで、また神経病院に入院することはあるわけです。こういう流れで患者さん方は生活して、医療のサービスを受けていくことになります(スライド49)。

これは、長年入院していたお子さんの例ですが、今はもう20代になっています。乳幼児期から在宅までずっとフォローしました。乳幼児期から入院しており、主治医から活動の幅を広げて欲しいと依頼され、パソコン操作を利用した学習を指導しました。その後在宅診療の中でフォローしました(スライド50)。

これはベッドサイドで、幼児期の取り組みの例です。呼吸器を付けていましたので移動させることが容易でなく、ベッドサイドで行いました。古い画像で白黒です(スライド51)。

この頃、ちょうどよいソフトがなく自作しました。スイッチも現在のようなモノがなく作りました。1、2、「2回押す」などのことが理解できるのか？試してみているところです(スライド52)。

現在はブログを作って、今日のゲストなど書いて、国際福祉機器展に来た場面や、私が訪問した時のことなどを紹介する文章を書き活用しています。これが彼女の生き甲斐になっています(スライド53)。

次は地域に移行したALSの患者さんの例です（スライド54)。ショートステイで入院された時に、キーボードが押し辛くなったので良い方法を教えて欲しいと言われ、腕を吊って行うことを提案しＰＳＢを紹介しました(スライド55)。その後、人工呼吸器を装着し「伝の心」を活用して、『心に翼を』という本を出版されました（スライド56)。また、PSBは絵を描くことに活用していました(スライド57)。

外来で脳性マヒの方を最後にご紹介します(スライド58)。

私の弟は、手術後あまり状態がよくなかったのですが、この方はとても手術後状態が良くなられた方です。最初の入院時に、足で絵を描くためのホルダーを作ったりしながら信頼関係を構築していきました。頸椎症が悪化して呼吸苦が起こり再入院した時は、頸椎手術への不安や悩みを聞きそれらの解消に努め、手術を受けることを促しました。

結果、頸椎症の悪化した部分がきれいに取れて手が使えるようになり、キーボードを押すことや携帯電話のボタンを押すことができるようになりました（スライド59～62)。現在は、ホームページを作ってボランティアの募集や自分の気持ち伝えられています(スライド63)。

在宅でＩＴ支援の充実をどうすれば良いかというのを、今活動しているところです。病院や地域の作業療法士、あるいはITサポートセンターなどとネットワークを作って、在宅におられる方々のサービス向上を行っていかなければならない(スライド64)。

その実践として「コミュニケーション用具支援ネットワーク研究会」というのを作りました。これはスイッチを作る実習をしながら仲間づくりをしています。これは今年の10月1日、ITサポートセンターでの画像です(スライド65)。

以上で終わります。

資料スライド

障害の特性に配慮したIT支援について

―肢体不自由児・者の視点から ―

都立多摩療育園　医療科

作業療法士　田中勇次郎

1

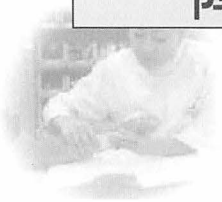
JAPAN Japanese Association of Occupational Therapists

社団法人 日本作業療法士協会

▶会長より ▶作業療法の紹介 ▶活動紹介 ▶入会案内 ▶English Information

＜TOPIC＞

（社）日本作業療法士協会 障害者IT支援の取り組み



- （事業部） 事業部主催研修会一覧を更新しました（3/2）
- （教育部） SIG他学会協会認定一覧を更新しました（3/2）
- （スカパー） ３月番組表を掲載しました（2/23）
- （国際部） 国際部お知らせを更新しました（2/23）
- （採用情報） 職員採用情報を掲載しました（2/22）
- （国際部） パキスタン地震－青年海外協力隊一般短期派遣募集のおしらせ（2/14）
- （海外関連） WFOT定款（改正案）についての意見募集（2/14）
- （お知らせ） 日本ALS協会、小林孫兵衛記念医学振興財団からおしらせ（2/14）
- （保険部） 18年度診療報酬情報・介護報酬情報を更新しました（2/9）
- （お知らせ） 重要＜会員向け＞勧誘電話、押し売り等にご注意ください（2/8）
- （事業部） 事業部主催研修会一覧を更新しました（2/7）
- （配布資料） 新着があります（2/6）

2

日本作業療法士協会の活動

日本作業療法士協会（ＯＴ協会）は作業療法士資格取得者からなる団体で、昭和４１年に設立されました。昭和４７年には世界作業療法士連盟に加入し、昭和５６年３月法人認可されました。会員数*は現在 29,293 名おり、日本国内の作業療法士の約 87%が当協会に加入しています。

活動内容としては、作業療法士の社会的地位の向上・学術技能の研鑽並びに人格資質の陶冶に努め、医療・保健・福祉の向上をはかり、国民保健の維持向上に寄与することを目的に、学会・研修会の主催をはじめ、機関誌及び会報の発行、作業療法啓発を目的とした広報活動など国内外に向けてのエネルギッシュな活動を行っています。

都道府県組織

各都道府県に作業療法士会があり、会員相互の資質向上、情報交換をはじめ地域の医療、保健、福祉に貢献すべく独自の活動を展開しています。

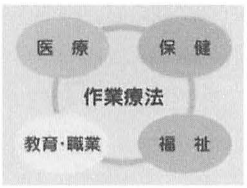
また、平成６年から都道府県作業療法士会連絡協議会が組織され、全国レベルの情報交換を目的とした活動も展開しています。

養成校

養成校数*：158 校（183 課程） 入学定員 6,898 名

作業療法の実施領域

作業療法は、身体障害、発達障害、精神障害、老年期障害などの領域で実施され、作業療法士は、医療、保健、福祉、教育・職業などの分野で活躍しています。



3

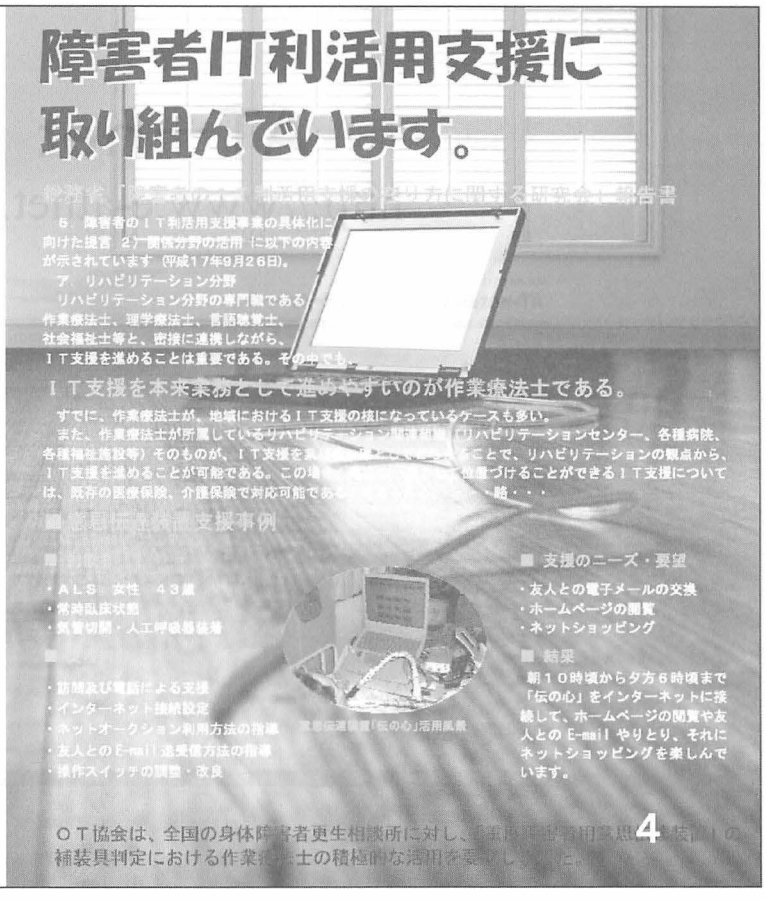
*平成１８年１０月１日現在

総務省「障害者のＩＴ利活用支援の在り方に関する研究会」報告書

５．障害者のＩＴ利活用支援事業の具体化に向けた提言　２）関係分野の活用 に以下の内容が示されています（平成１７年９月２６日）。

ア．リハビリテーション分野

リハビリテーション分野の専門職である作業療法士、理学療法士、言語聴覚士、社会福祉士等と、密接に連携しながら、ＩＴ支援を進めることは重要である。その中でも、ＩＴ支援を本来業務として進めやすいのが作業療法士である。すでに、作業療法士が、地域におけるＩＴ支援の核になっているケースも多い。また、作業療法士が所属しているリハビリテーション関連組織（リハビリテーションセンター、各種病院、各種福祉施設等）そのものが、ＩＴ支援を業務の一環としてとらえることで、リハビリテーションの観点から、ＩＴ支援を進めることが可能である。この場合、業務の一環として位置づけることができるＩＴ支援については、既存の医療保険、介護保険で対応可能であると考えられる。　・・・略・・・



e-AT利用促進協会

http://www.e-at.org/

特定非営利活動法人
e－AT 利用促進協会

～福祉とテクノロジーの共存を目指して～

e-AT利用促進協会は、障害のある人や高齢者の自立した生活を助ける電子情報支援技術（e-AT）と、コミュニケーション支援技術（AAC）の普及を目的として設立されました。
誰もが電子情報技術を活用して、より豊かで自立した生活が営めるような社会づくりを目指しています。

● NEWS！ ●

2006.2.24 update　特定非営利活動法人e-AT利用促進協会とマイクロソフト株式会社は、「障害者のIT利用支援のためのUP（アップ）プログラム」を共同で開催します。

第1回 障害者のためのITサポート基本セミナー（2005/4/23-24）開催のご案内
第2回 障害者のためのITサポート基本セミナー（2005/5/28-29）開催のご案内
第3回 障害者のためのITサポート基本セミナー（2005/9/17-18）開催のご案内
第4回 障害者のためのITサポート基本セミナー（2005/11/19-20）開催のご案内
→第4回セミナーお申込み用紙(pdf 17kB)
第5回 障害者のためのITサポート基本セミナー（2006/1/28-29）開催のご案内
第6回 障害者のためのITサポート基本セミナー（2006/2/18-19）開催のご案内
第7回 障害者のためのITサポート基本セミナー（2006/3/4-5）開催のご案内
■マイクロソフトのUP紹介サイト
http://www.microsoft.com/japan/mscorp/citizenship/ca/up/

5

AT－net

http://www.e-atnet.jp/

身体障害者向け通信・放送役務提供・開発推進助成事業

AT-net 新しいバリアフリーのポータルサイト

本ウェブサイトは、障害のある方自身のテクノロジー活用を促進するとともに、それを支える支援者の方々への情報提供を行うサイトです。総務省の「障害者のIT利活用支援の在り方に関する研究会」でまとめられた報告書や、ICT支援基盤整備の有用性を評価した「ICT支援ポータルサイト」の結論結果を活用して運用されます。また、「こころ」の機能を徐々に統合し、拡充していきます。まずは、支援者の方々向け情報提供を中心に構築しますが、当事者の方々も楽しめる「買い物」や「学び」の機能を拡充していきます。

新着情報:

本ウェブサイトは、随時機能を拡張し、情報量も増やしていきます。その都度お知らせしていきますので、お楽しみに。[2008年7月1日]

サイトポリシー

1 ICT支援の手順とポイント

2 ニーズに合った支援機器を探す

利用者のニーズに合った支援機器を効果的に選択して、リスト化できるようにしています。

3 支援事例の参照

支援機器活用事例を提供します。利用者の事例やサポートの事例が検索できます。利用者の事例から使用している支援機器が参照できます。

4 お問い合わせ

本サイトに関するご質問・ご意見・ご提案をお待ちしております。

ページのTOPに戻る

© Copyright by AT association. All Rights Reserved.

6

障害者ITサポート研修会

JAPAN Japanese Association of Occupational Therapists

事業部

平成18年度事業部主催研修会案内および申込書はこちらからダウンロードできます

関連団体との研修会は別途申込み方法がありますのでその都度案内します

平成18年度事業部主催・関連研修会

詳細が決定しているものは(随時更新)研修会名をクリックすると詳細ページに移動します

保健福祉関連研修会

研修会名	開催日	会場	参加費	申込開始日	申込締切日	担当者
障害者ITサポート研修会(岡山)	9月10日(日)	岡山市生涯学習センター	2,000円	7/24	8/25	北山 順業(玉野総合医療専門学校) kitayama@tamasen.ac.jp
障害者ITサポート研修会(北海道)	10月14日(土)	札幌市生涯学習センター	2,000円	8月中旬開始予定	9/8	加藤 恵子(日本福祉リハビリ学院) k_katou@tsushimakinen.ac.jp

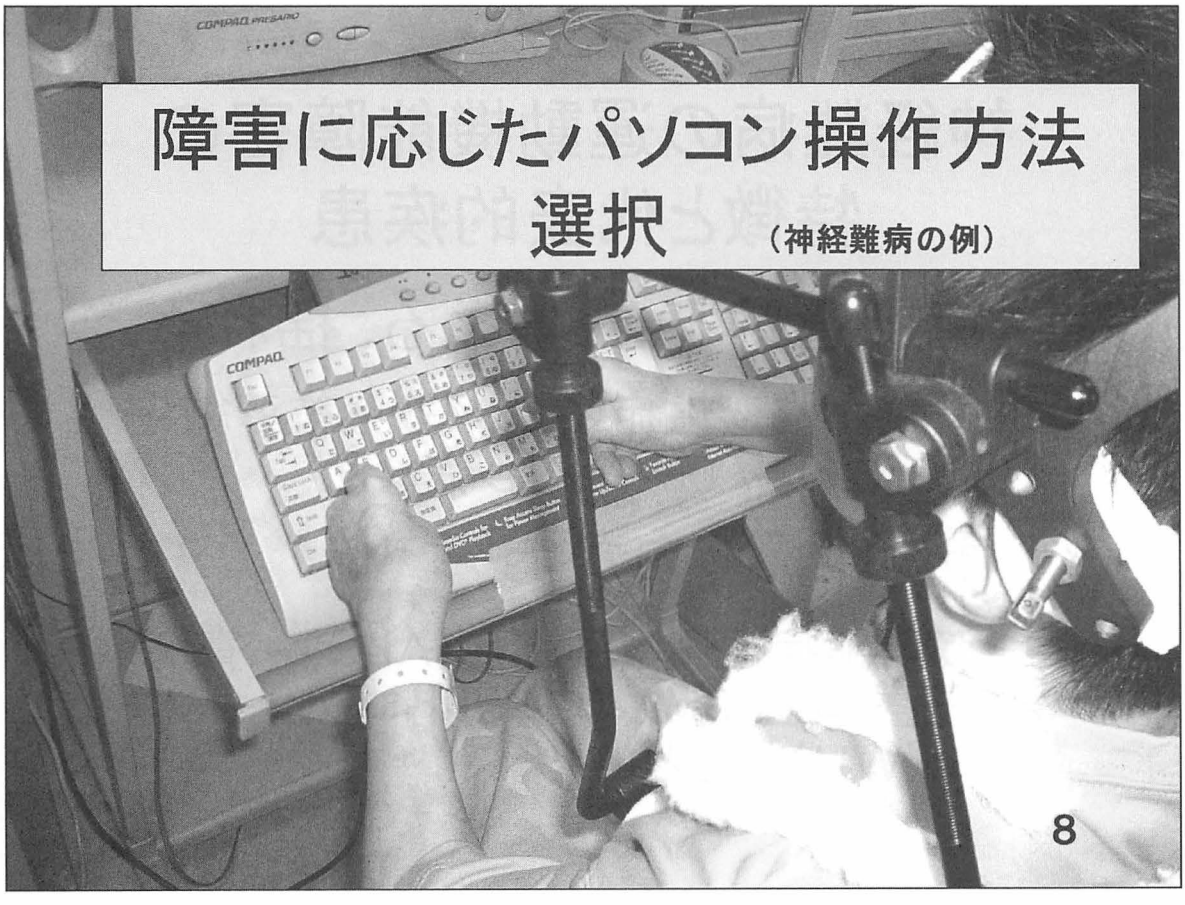
介護予防

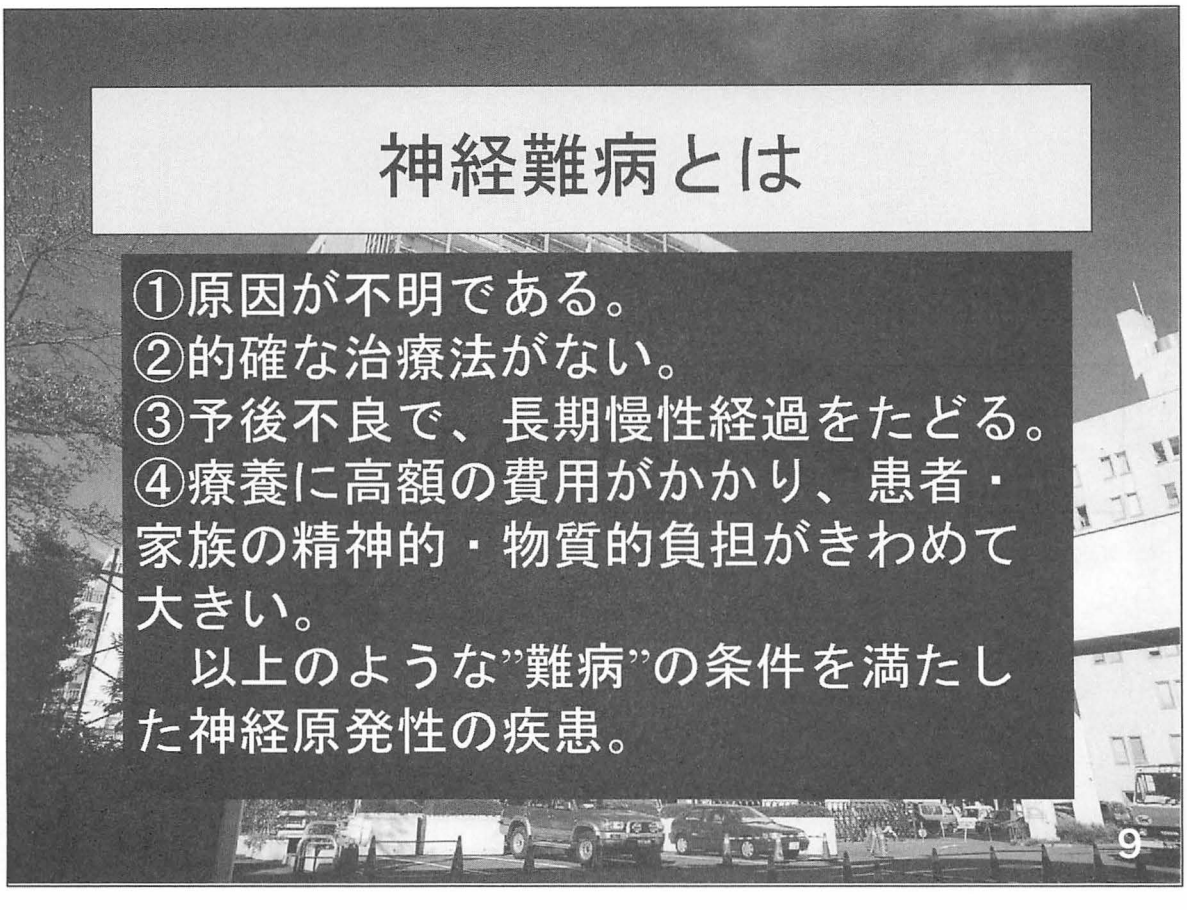
福祉用具研修基礎Ⅰ(岩手・東京・兵庫・島根・香川・沖縄で開催)

精神・身体

研修会名	開催日	会場	参加費	申込開始日	申込締切日	担当者

7


障害に応じたパソコン操作方法選択
（神経難病の例）
8


神経難病とは
①原因が不明である。
②的確な治療法がない。
③予後不良で、長期慢性経過をたどる。
④療養に高額の費用がかかり、患者・家族の精神的・物質的負担がきわめて大きい。
以上のような”難病”の条件を満たした神経原発性の疾患。
9

神経難病の運動機能障害の特徴と代表的疾患

- 協調運動不全：震える、揺れる

  脊髄小脳変性症（SCD《多系統萎縮症（MSA）》），パーキンソン病など

- 筋力低下：力が弱い

  筋萎縮症性側索硬化症（ALS），脊髄性筋萎縮症（SMA《ウエルドニッヒ・ホフマン（WH）》）など

10

機器導入にあたって

11

機器導入に際してチェックすべきこと

（　）内は例

- 導入の目的を明確にする（電子メール、会話）
- 利用者の能力を知る（意思伝達装置とレッツチャット）
- 使用環境を知る（設置場所、介助者）
- 使用頻度を知る
  （コールとコミュニケーションエイドの操作スイッチ）
- 他の用具と比較する
  （意思伝達装置とパソコン入力支援ソフト）

  など

（古田恒輔　福祉用具の専門セミナー資料より一部改変）

12

機器選択の基準

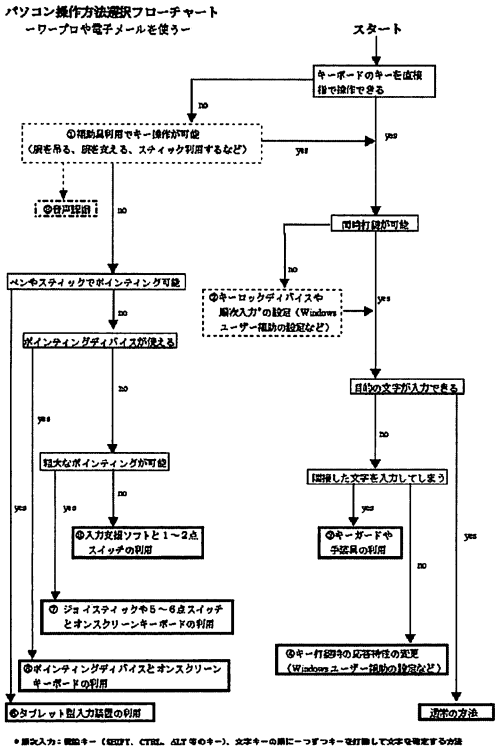
（　）内は例

- 希望強→希望弱（手操作→足操作）
- 一般品→特殊品（パソコン→意思伝達装置）
- 構造単純→構造複雑
  （マイクロスイッチ→センサー）
- 自由度高→自由度低
  （キーボード→マウス→スイッチ）
- 安価（給付制度有）→高価（給付制度無）

13

パソコン操作方法選択フロー

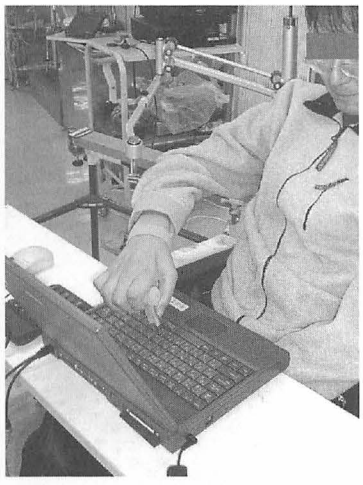
14



15

① 補助具

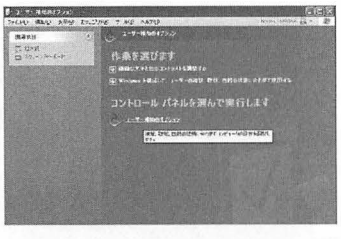
ポータブルスプリングバランサー（ＰＳＢ）で吊る



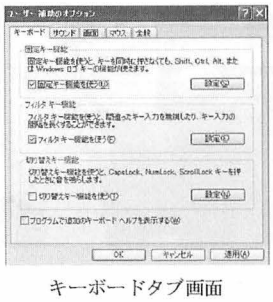
トラフ付きＰＳＢで腕を吊る（で支える）

16

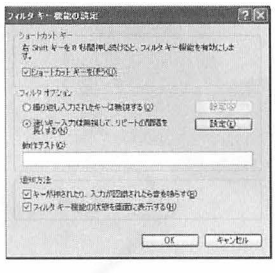
②, ④ Windowsユーザー補助



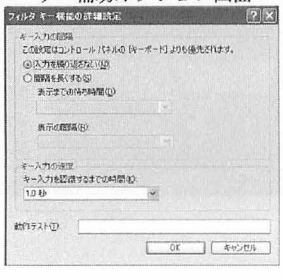
ユーザー補助オプション画面



キーボードタブ画面

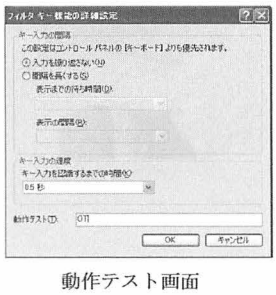


フィルタキー機能の設定画面



「キー入力間隔定」の「入力を繰り返さない」選択画面

キー入力速度選択画面



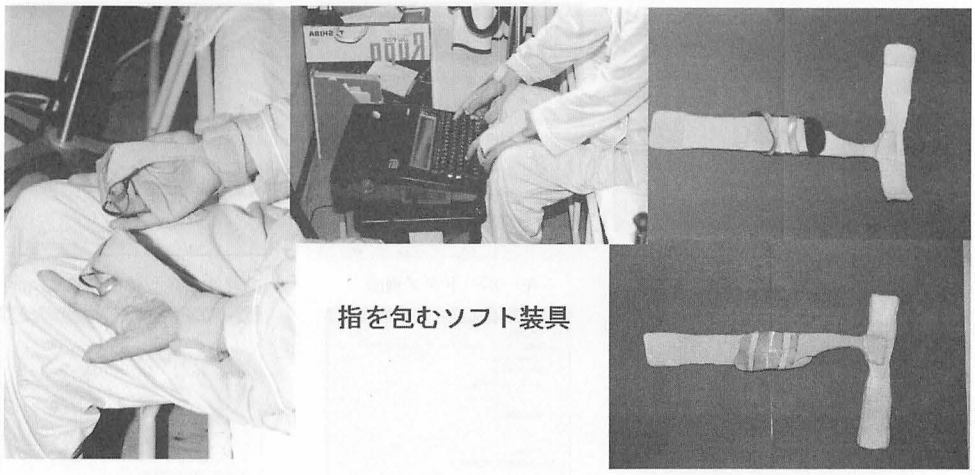
動作テスト画面

17

③ キーガードと指装具

18

③ 手装具



19

⑤ タブレット型入力装置

ＫＢマウス

20

⑥～⑦ オンスクリーンキーボード

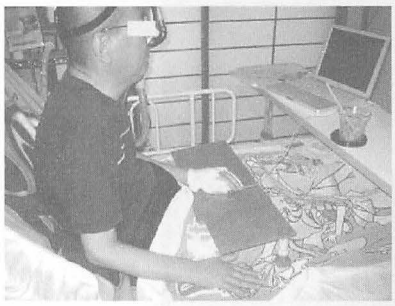
市販のワープロソフトに付属のオンスクリーンキーボード

ATOKクリックパレット

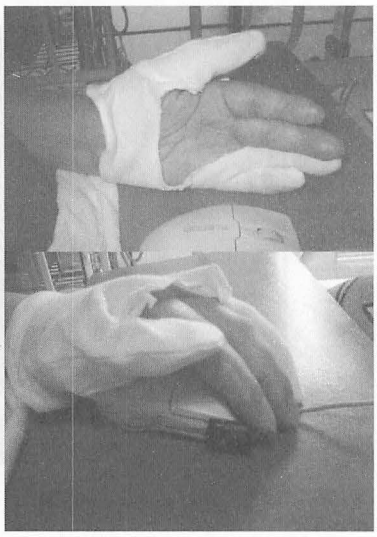
MS－IMEソフトキーボード

21

⑥ ポインティングディバイスとオンスクリーンキーボード



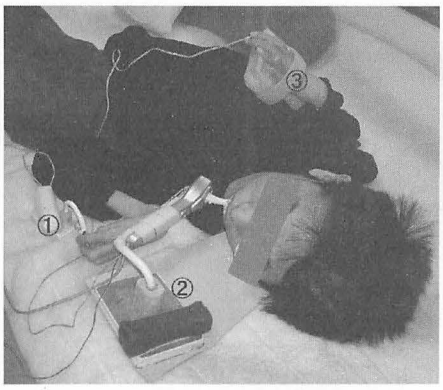
クリックボタンを改造したマウス



綿手袋を装着して汗を吸収している

22

⑦ ポインティングディバイスとオンスクリーンキーボード



ハンディマウス改造図

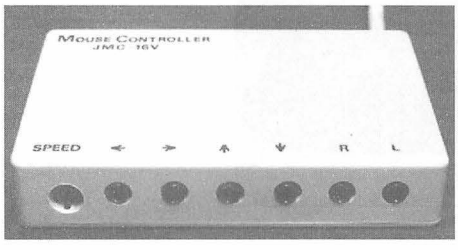
①左クリック：左母指の外転で左クリック操作ができるように、マイクロスイッチを自在に曲げられるカラーワイヤーの先端に取り付けている。

②ポインターコントローラー：下唇でコントローラーを操作できるように①と同様の固定具に取り付けている。また、常に同位置に台を設置できるようにガイドとして革を貼り付けている。

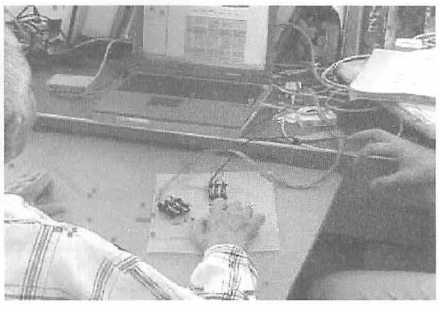
③右クリック：右手を乗せる台を硬質スポンジ材で作製し、右示指の屈曲で右クリック操作ができるようにマイクロスイッチを台に取り付けている。

23

⑦ ジョイスティックや5～6点スイッチとオンスクリーンキーボード



マウスコントローラー（JCM－16型）



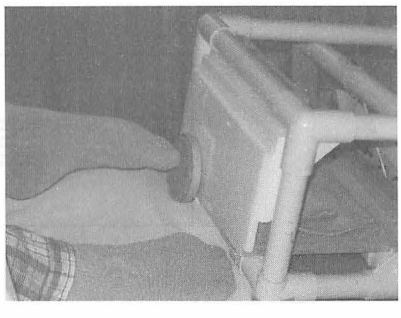
マウスコントローラー利用例
（6点スイッチ）

24

⑧ 入力支援ソフトと操作スイッチの利用

の操作等、Windowsパソコンの操作に

オペレートナビ



押しボタンスイッチを
左足先で押す

25

音声認識

Via Voice

26

事例

27

MSA　50代 男性

- OT期間：1999年～検査，合併症治療の入院時．
- 現症：気管切開．ADL全介助．介助歩行多少可能．会話は表情や身振り．トーキングエイド．
- 病前IT利用歴：なし
- 利用IT機器：キーガード付きパソコン，オペレートナビ（パソコン入力支援ソフト），トーキングエイド（携帯用会話装置）．
- IT機器操作用具：ハンディーマウス，らくらくマウスⅡ，

28

キーガードを取り付けたパソコン

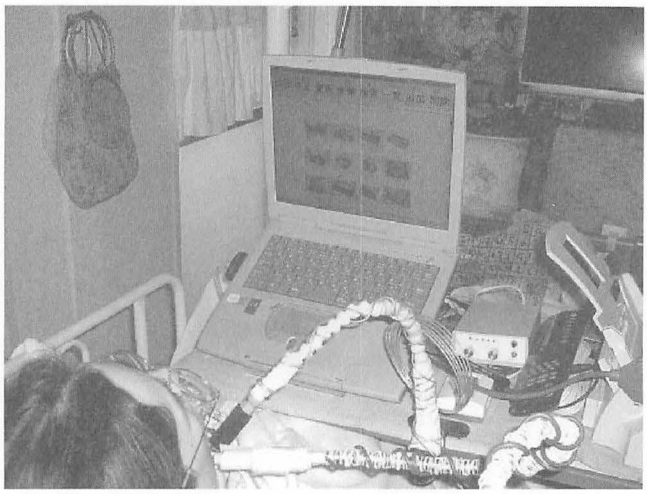
29

ALS 40代 女性

- OT期間:1998年～.
- 現症:人工呼吸常時装着. 常時臥床状態. 会話は文字盤(アイコンタクト).
- 病前IT利用歴:なし
- 利用:意思伝達装置「伝の心」
- IT機器操作用具:タッチセンサー

30

「伝の心」でネットショッピング



31

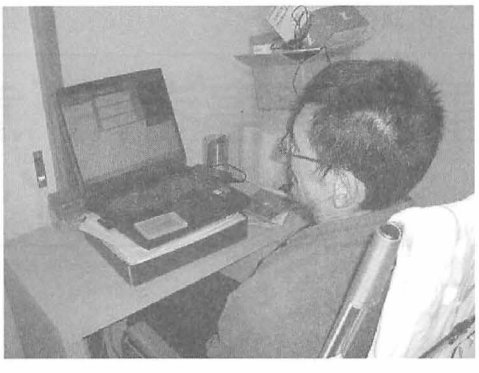
ALS　30代　男性

- OT期間：2004年～.
- 現症：車いす在位保持可能．会話は発声，表情による応答，文字盤（アイコンタクト）.
- 病前IT利用歴：パソコン
- 利用IT機器：パソコン入力支援ソフト（オペレートナビ）.
- IT機器操作用具：らくらくマウスⅡ.

32

在宅勤務（物品管理）

らくらくマウスⅡを右足で操作



無線LANでインターネット

33

活用できた要因

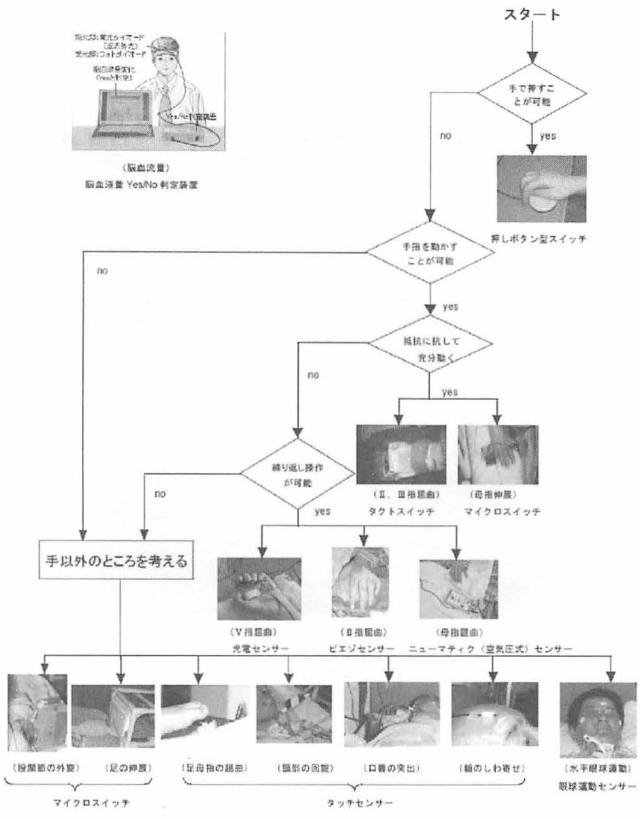
本人の資質や家族・介助者の協力に加え、以下のこと等が挙げられる.

- 主治医が病気の告知(十分な説明)をしており、本人も病気を受け入れる気持ちができていた.
- 在宅療養支援体制が整っており、介護に当たる家族・介助者も含め安心して在宅療養生活を送ることができた(必要に応じて入院も).
- 機器の不具合や身体機能の変化に対して、OTが迅速に対応した.

34

重度障害者用「意思伝達装置」の操作スイッチ選択 (ALSの例)

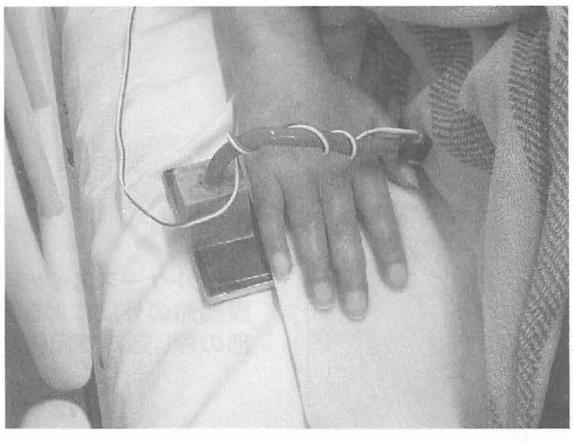
35



36

ＡＬＳの操作スイッチ選択フローチャート

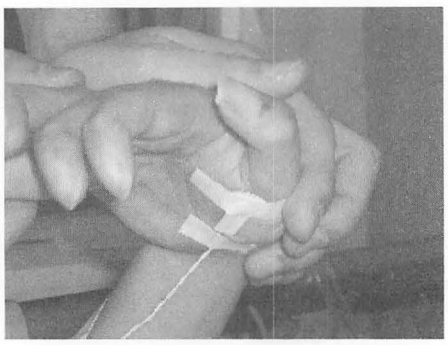
母指の伸展で操作する



カラーワイヤーの尖端にマイクロスイッチを取り付け、母指の伸展で操作する

37

母指球筋の収縮で操作する



ピエゾセンサー

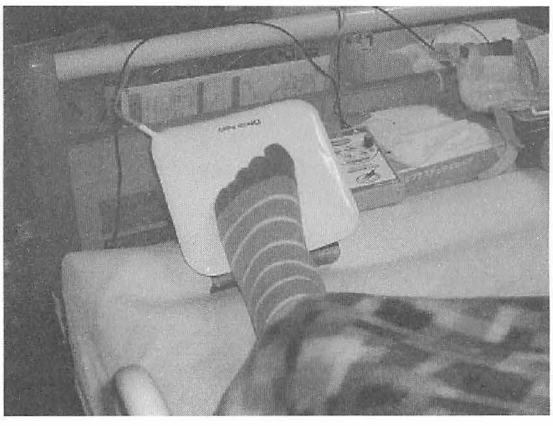
38

股関節の外旋で操作する

カセットケーススイッチ:
股関節の外旋による膝外側
部の押し込みで操作する

39

足関節の底屈で操作する



ニューマティックセンサースイッチ

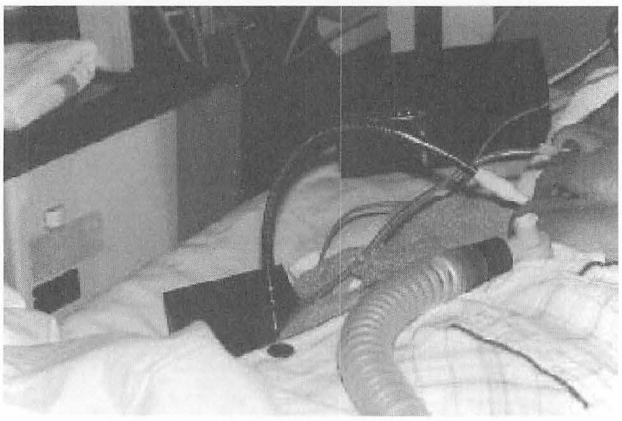
40

顎の接触で操作する

タッチセンサー

41

唇の接触で操作する



タッチセンサースイッチ

42

額のしわを寄せることで操作する

ピンタッチセンサースイッチ：額のしわを寄せることで、
タッチ板がセンサーに接触して作動する

43

眼球の水平方向の動きで操作する

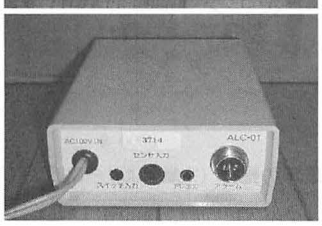
眼球運動センサースイッチ：額と頬に電極を貼り付けて、
眼球の水平方向の動きを拾い作動する

44

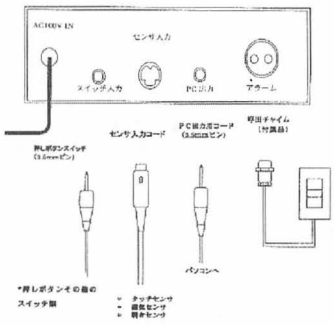
ナースコールへの接続

ーセンサーコントローラーの例ー

コミュニケーション・エイド操作用に開発された操作スイッチをナースコールに利用するための機器



(株)シースターコーポレーション



意思伝達装置「伝の心」付属のセンサーコントローラーであるが、単体でチャイムやナースコール接続可能である。

45

入院から在宅へ

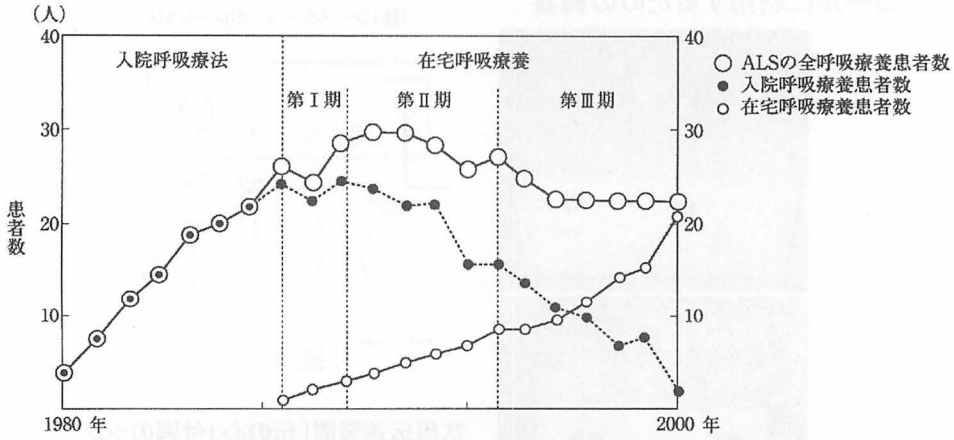


図 3　神経病院の ALS 呼吸療養患者数 20 年の推移（文献 4 より一部改変引用）

47

在宅診療　先天性ミオパチー 20代　女性

- OT期間：1983年～.
- 現症：人工呼吸常時装着．常時臥床状態．会話は文字盤（アイコンタクト）.
- 病前IT利用歴：なし
- 利用IT機器：,オペレートナビ，キネックス（パソコン入力支援ソフト ）．ダイナモ（携帯用会話装置）.
- IT機器操作用具：マイクロスイッチを手作り操作スイッチ

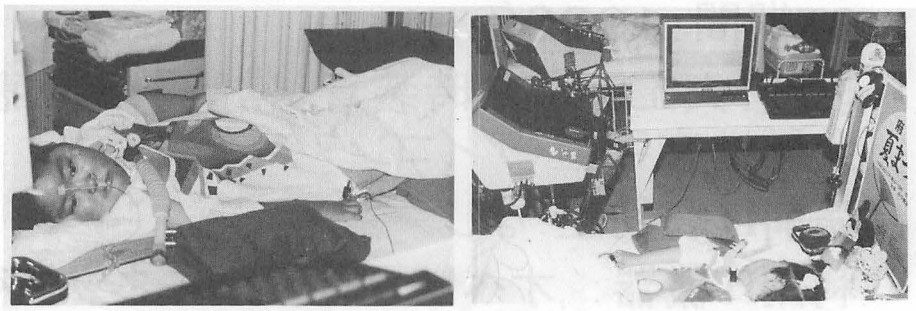
49

幼児期入院から在宅までフォロー

- 限られた生活空間の中で活動性の向上を図る。→パソコンを利用した学習指導。
- 長期の入院から、人工呼吸器利用で在宅生活開始。→ 訪問によるIT活用継続の支援（操作スイッチのメンテナンス，新製品のコミュニケーション機器紹介，パソコンのトラブルへの対応）など

50

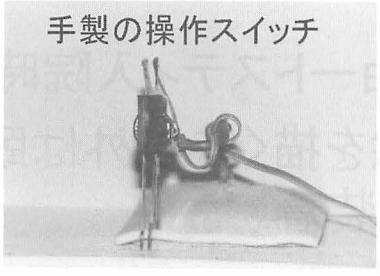
幼児期の取り組み



ベッドサイドで数を認識させる取り込みをパソコンで行っている場面.

51

自作のスイッチとソフト



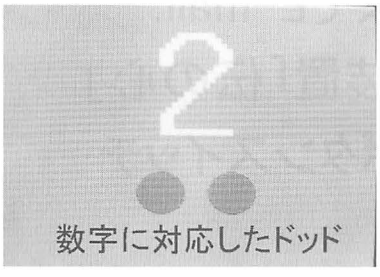
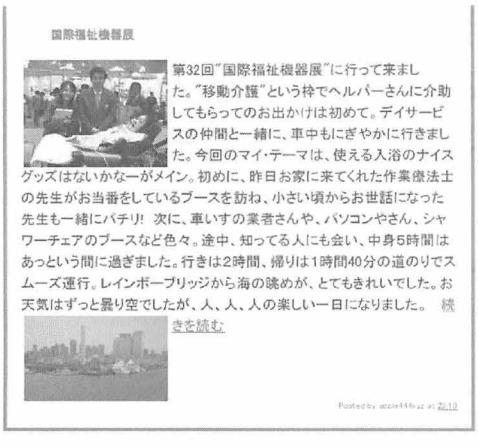


表 リスト1 メインプログラム

```
10 'ERI'S LEARING PROGRAM
20 KEY OFF:CLS:SCREEN 1
30 SET BEEP 1,4:ON KEY GOSUB 6000:KEY(1) ON
40 LOCATE 8,5:PRINT"ｽﾋﾟｰﾄﾞﾉｾｯﾃｲ"
50 LOCATE 8,7:INPUT"1ｶﾗ5ﾃｲﾚﾙ";SP
60 IF SP=1 THEN N=300
70 IF SP=2 THEN N=600
80 IF SP=3 THEN N=900
90 IF SP=4 THEN N=1200
100 IF SP=5 THEN N=1500
110 IF SP<6 XOR SP>=1 THEN 50
120 CLS
130 LOCATE 8,10:PRINT"1ｶﾗ5ﾃｲﾚﾙ="･
140 A$=INPUT$(1)
150 A=VAL(A$)
160 IF A<6 XOR A>=1 THEN 130
170 CLS:SCREEN 5
180 SET PAGE 0,1:CLS
190 ON A GOSUB 1000,2000,3000,4000,5000
200 X=0
210 FOR I=0 TO 300
220  IF STRIG(1)<>0 GOTO 240 ELSE 210
230 NEXT I
240 BEEP
250 IF STRIG(1)=0 THEN 260 ELSE 240
260 X=X+1
270 IF X=A GOTO 320 ELSE 280
280 FOR I=0 TO N
290  IF STRIG(1)<>0 GOTO 210
300 NEXT I
310 GOTO 450
320 FOR I=0 TO N
330  IF STRIG(1)<>0 GOTO 420
340 NEXT I
```

52

So-netブログ　今日のゲスト



デイサービス&私の日常

楽しいデイサービスと私を応援してくれる人たち

2005年09月27日

国際福祉機器展

第32回"国際福祉機器展"に行って来ました。"移動介護"という枠でヘルパーさんに介助してもらってのお出かけは初めて。デイサービスの仲間と一緒に、車中もにぎやかに行きました。今回のマイ・テーマは、使える入浴のナイスグッズはないかな―がメイン。初めに、昨日お家に来てくれた作業療法士の先生がお当番をしているブースを訪ね、小さい頃からお世話になった先生も一緒にパチリ! 次に、車いすの業者さんや、パソコンやさん、シャワーチェアのブースなど色々。途中、知ってる人にも会い、中身5時間はあっという間に過ぎました。行きは2時間、帰りは1時間40分の道のりでスムーズ運行。レインボーブリッジから海の眺めが、とてもきれいでした。お天気はずっと曇り空でしたが、人、人、人の楽しい一日になりました。 続きを読む

Posted by apple44kuz at 20:19

オペレートナビ見学　[医療関係]

入浴のあとの夕方は、私が赤ちゃんの時からお世話になっている作業療法の先生と、岩手から研修に来られている先生の訪問がありました。Windowsの手元操作= オペレートナビの見学です。私が"おはなし絵本クラブ"を開いて、一緒に見てもらいました。先生に久しぶりに会えて嬉しかったです。研修の先生は、「岩手ではマイナス14℃の時もあるよ。体験してみるー?」と。「ワーッ、寒そー!!」。その先生ともメールを交わすことになりました。(#^ .^#)

入浴は、ヘルパーさんと看護師さんとお父さんにやってもらいました。お母さんはベッドメイクです。お父さんはお休みだったので、ぶり大根と野菜の天ぷらを作ってくれました。あとで、ミキサーにしていただきまーす!)^o^(

2006-02-27 22:21 固定リンク nice!(0) 関連記事

共通テーマ: 日記/雑感

53

地域移行 ALS 60代 男性

- OT期間：2001年～ショートスティ入院時.
- 現症：PSBを利用して絵を描く時以外は臥床状態. 人工呼吸常時装着.
- 病前IT利用歴：Web端末でE-mail.
- 利用IT機器：意思伝達装置「伝の心」
- IT機器操作用具：押しボタンスイッチ

54

PSBと「伝の心」を活用

- ショートステー入院時、キーボードタイプのWeb端末操作方法の改善目的で処方される。→PSBとキーボード操作用のスティックとそのホルダー作製。在宅にPSB導入。退院時、訪問看護ステーションのヘルパー等にセッティン指導を行う。

55

「伝の心」で原稿書き

56

PSBを利用した絵画

57

外来　脳性麻痺　50代　女性

- OT期間：2001年～入院時.
- 現症：介助歩行可能，ADL全介助，装具利用の左手で絵を描く．発話可能.
- 病前IT利用歴：なし
- 利用IT機器：パソコン（Windowsユーザー補助設定）

58

頸椎症手術後運動機能が改善

- 足で絵を描くための絵筆ホルダーを作製するために入院。→OTでホルダー作製。信頼関係を構築する。
- その後頸椎症が悪化し呼吸苦を訴えるようになり、頸椎症手術適応評価で再入院。
  →手術への不安や悩みを聞き、安心感を与え解消を図る。

59

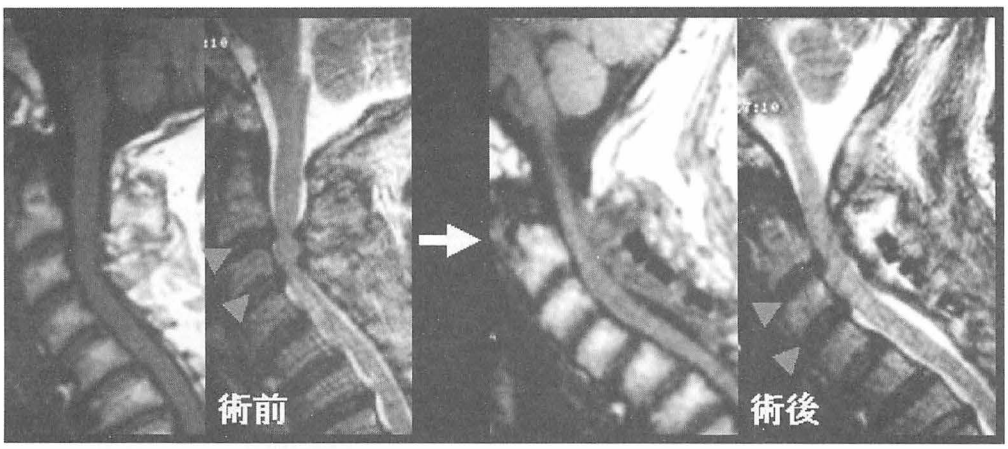
手が使えない！

60

脳神経外科で頸椎手術

—BOTOX併用—

2003. 6. 30

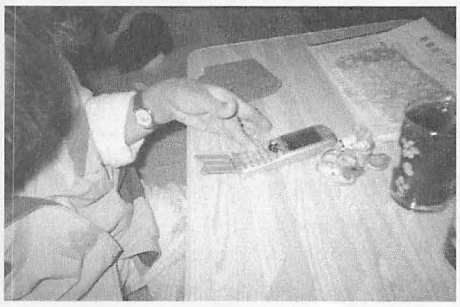


変形性頸椎症C2－C5増悪

61

手が使えるようになる！

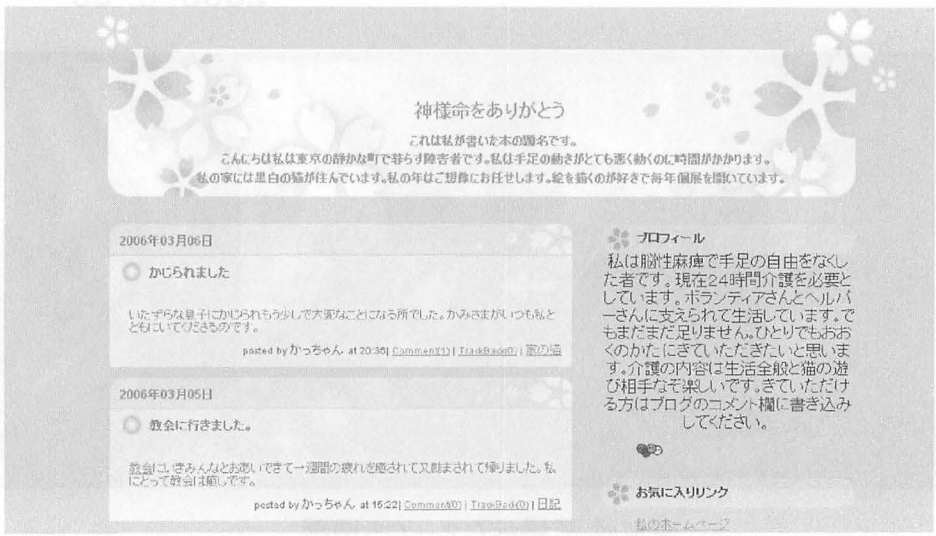
主治医、リハスタッフへの連絡にE-mail



携帯電話のボタンも押せた

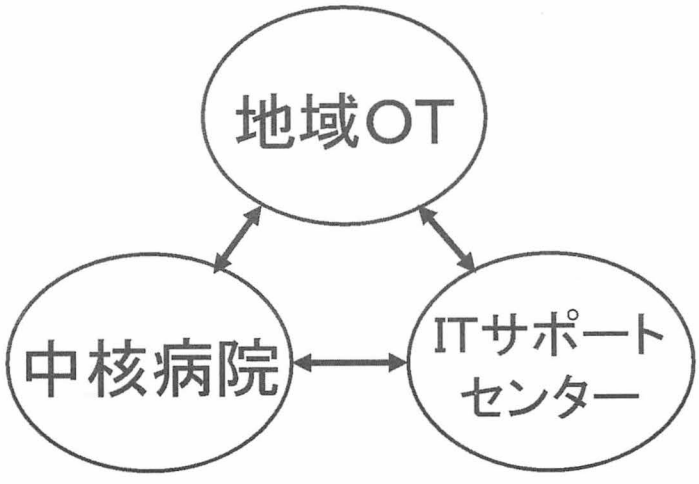
62

ホームページ公開



63

在宅でのIT支援の充実



訪問OTを中心にネットワーク作り

64

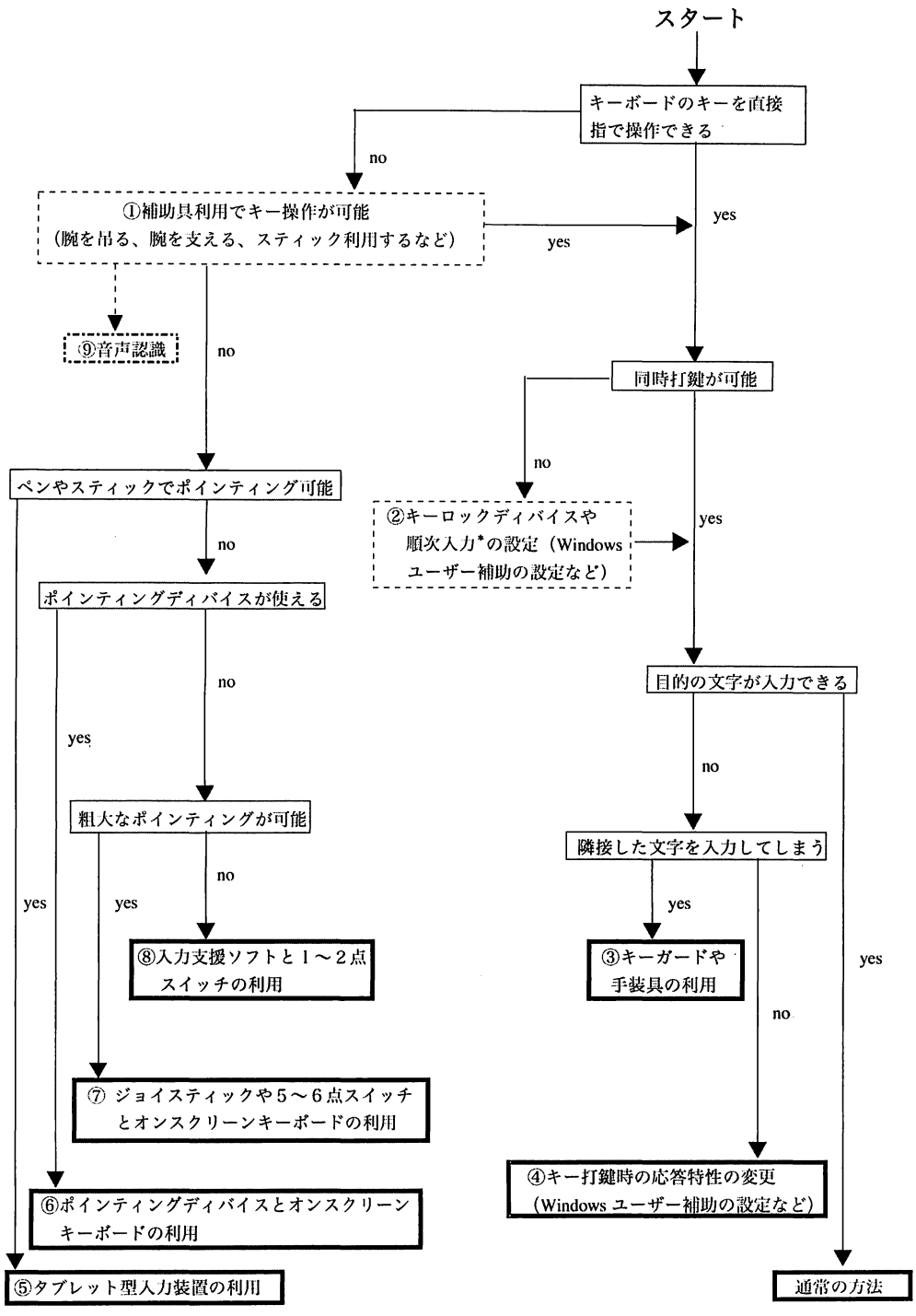
第2回 コミュニケーション用具支援ネットワーク研修会

2006年10月1日(日) 東京都障害者ITサポートセンター

65

資料

1. パソコン操作方法選択フローチャート
ワープロや電子メールを使う



＊順次入力：機能キー（SHIFT、CTRL、ALT 等のキー）、文字キーの順に一つずつキーを打鍵して文字を確定する方法

パソコン操作方法選択フローチャートの解説

パソコンを利用したワープロや電子メールの文字入力について、その操作を運動機能面から検討したものである。

キーボードのキーを直接操作できる→同時打鍵が可能→目的の文字が入力できるこれらが全て可能であれば通常の手段でよい。

キーボードのキーを直接操作できない場合は、腕を吊る，腕を支える、手にスティックを持たせるなど、①補助具利用でキー操作が可能であるかを見る。

次に同時打鍵が可能でない場合は、②キーロックディバイスやWindows パソコンのユーザー補助による順次入力設定で可能か否かを見る。

目的の文字が入力できない場合は、隣接した文字を入力してしまう(例えば、指が震えてしまう)か否かを見る。

隣接した文字を入力してしまう場合は、キーガードや指が必要としないキーに触れないように手指を包む装具などを選択する。

隣接した文字を入力することがないが目的の文字が入力できない場合は、④キー打鍵時の応答特性を変更(windows のユーザー補助設定するなどで、例えば、指が素早く離せずに同じ文字を繰り返し表示してしまうときのオートリピート機能解除の設定)する。

補助具利用でキー操作ができない場合は、ペンやスティックでポインティング可能か否かを見る。可能であれば、⑤タブレット型入力装置を選択する。

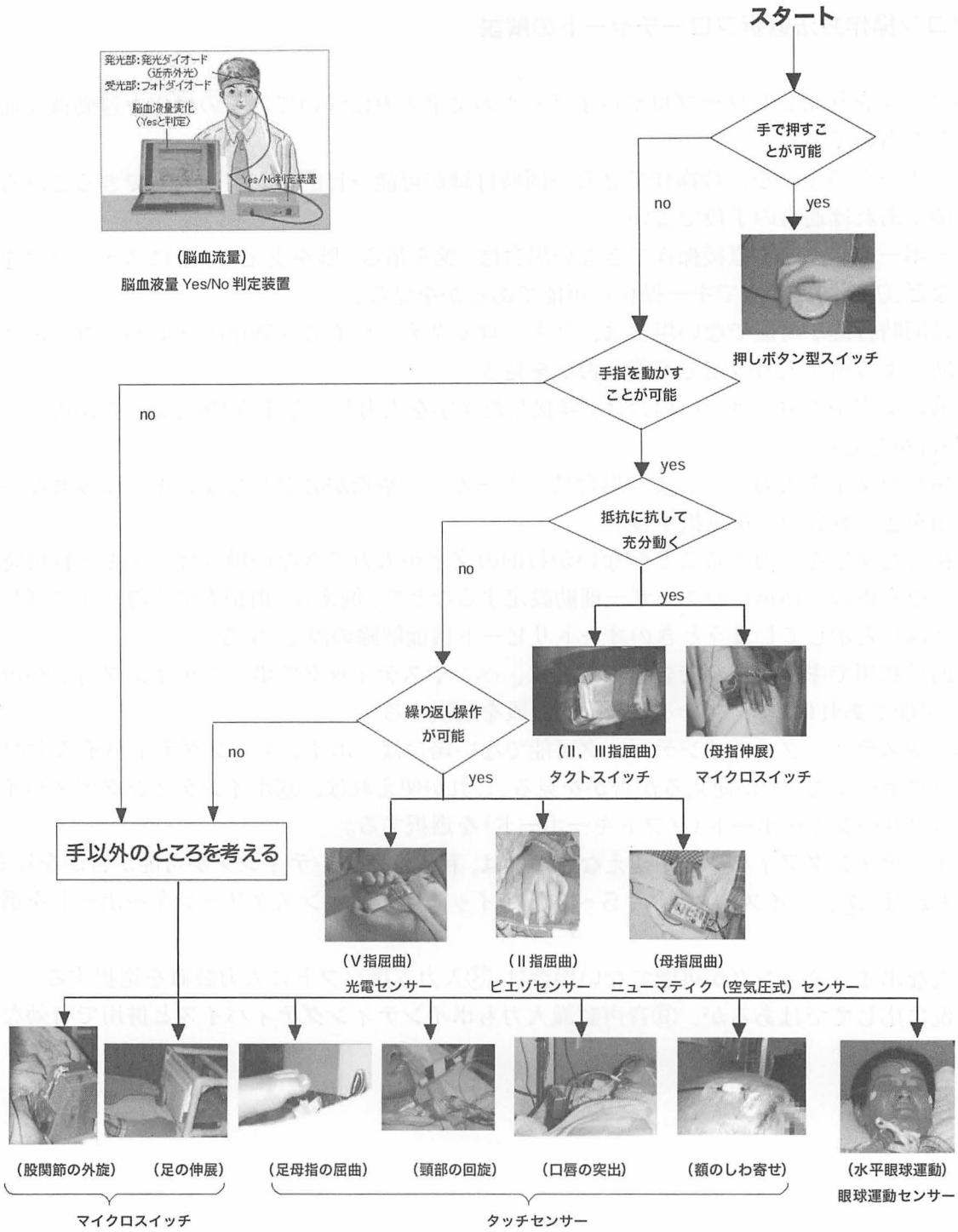
ペンやスティックでポインティング可能でない場合は、ポインティングディバイス(マウス、トラックボールなど)が使えるか否かを見る。これが使えれば、⑥ポインティングディバイスにオンスクリーンキーボード(ソフトキーボード)を選択する。

ポインティングディバイスが使えない場合は、粗大なポインティングが可能か否かを見る。可能であれば、⑦ジョイスティック、5～6点スイッチなどにオンスクリーンキーボードを選択する。

粗大なポインティングが可能でない場合は、⑧入力支援ソフトに入力装置を選択する。

状況に応じてではあるが、⑨音声認識入力もポインティングディバイスと併用で有効な手段となる。

2. ＡＬＳの操作スイッチ選択フローチャート



講演 2

「視覚障害者の視点から」

金沢　真里　東京都盲人福祉協会　中途失明者緊急生活訓練主任指導員

今ご紹介いただきました金沢真里といいます。すみません、資料は突然今日、先ほどご無理を言って作っていただきました。事前に用意すればよかったのですが、配るつもりではなかったのですけれども持ってきたものを、ご無理を言って作っていただいたものです。中身は、視覚障害に関わるウェブ等の紹介やスクリーンリーダー等の紹介をしてあります。以上、配ったものは、そういう内容のものです。

では、まず私の自己紹介から少しさせていただきたいと思います。

皆さんの中で、視覚に障害のある人たちの支援をされているという方たち、どのくらいおられますか？　私には誰もいないというふうに…

黙って手を挙げても見えない人には伝わりません。

…あ、そうなんですね、わかりました。では多くは視覚障害以外の支援を目指している、あるいは目指していらっしゃる方というふうに思います。

私自身も、中途の視覚障害者です。今どんな見え方かといいますと、正面を見ると、ボーッとちょっと上のほうが明るいかなという感じで、

あとはほとんど、レースのカーテンがかかっている、あるいはカルピスの中にドボーンと入って見ているという、そういうような見え方です。

私は進行性の目の病気で、網膜色素変性症という大事な目の病気で、少しずつ見えなくなりました。今正面はそういう見え方なのですが、では光はどうかというと、両サイドの残った視野のところで光を感じたり、あるいはコントラストがはっきりしたようなものが動いたりすると、わかることもあるという感じの見え方です。普段は白い杖をついて、単独で歩いています。

徐々に見えなくなっていったのですが、二十歳、大学生の前半くらいまでは、普通の文字を読んで、文庫なんかも読んだりしていました。現在の仕事は、東京都の補助事業で、視覚障害者の人たちの在宅支援ですね、訪問で出向いていって相談を受けたり、日常生活のことを一緒に考えながら行うというようなことをしています。

パソコンに関しては、本当にボランティアでちょっとだけ支援をしたり、というようなことはしていますけれども、そんなことで今日はちょっとお話をしていきたいと思います。

私のほうも３つ、畠山さんがすごく支援に対する心構えみたいなことをお話していただいたのですけれども、私もすごく重なる部分がありますので、ちょっとこれからお話をしていきます。

まず、視覚障害と言いましても、私が今言ったみたいに二十歳くらいのときには見えていたけれども、今はボーッとしか見えないという進行性の目の病気の人もいれば、あるいは突然大人になってから見えなくなる人もいれば、生まれつき見えない人もいれば、見え方もさまざまなんですね。

それから、生活してきた環境もさまざまなので、その人に、視覚障害の人にこうしたらいいというのではなく、今目の前にいる人がどうしたら、たとえばパソコンが使いやすくなるか、とい

うことを目の前の対象者の人に視点を合わせて考えていく、視覚障害だからどうだということではないということを是非覚えておいていただけるといいかな、と思います。

見え方なのですが、たとえばものを見たり書いたりするのは、主に目の中心を使います。それから、行動するときには主に周辺の視野を使うことになります。それから、視野がたとえば狭かったり、斑だったり、たとえば斑というのは私で言うと、これくらいの明るさだともう私はほとんど見えないのですけれども、たとえば今私は指を1本立てています。私の肩の上くらいのところに指を持っていっています。たとえば、このへん——肩のへんですね——は見えるけれども、だんだん鼻に近づいていくと、指が消えて、また指が見えて、また指が消えてというような見え方の人もいるわけですね。

だから、どういうことかというと、たとえばパソコンを拡大して使いたい、パソコンをやっぱり目で確認しながら見たいというふうになったときに、あまり視覚に障害のある人の見え方などわからないと、見えないのだったら大きくしてあげればいいだろうとか思って画面にがーんと大きく書くと、視野が狭いものなので、大きすぎて逆に見えなかったり、視野に入らないんですね。私の場合も、徐々に見えなくなったときに、たとえば「松」という字があって、デパートに行ったときに、お店を探すときに「松」という字を探したかったんですね。ぱっと見たときに、「木」というのが見えたんですね。「松」という字のお店を探したときに、「木」だけが目に入っているのですけれども、実はそれが「松」だったんですね。考えられますか、皆さん。私は自分でも信じられなかった。木偏ですよ、木偏に、すぐ隣に「公」という字があるのに、視線が「木」に行っちゃったら、「木」しかわからない。「木」はわかるけど、「公」がわからないんですね。「公」に目が行っちゃうと、「公」は読めるけど、目をちょっと動かせば「松」がわかるんだけど、こういうのってちょっと信じられないですよね。自分でもなかなか、そういう見え方って信じられなかったのですが、こういうことが起こります。なので、今目の前の人が画面を使いたいと言ったときには、どういう文字が適当なのか、これは、情報提供は皆さん支援者の役割で、これがいいと決めるのは我々対象者、利用者の役割です。

だから皆さんは、自分が見えないのだからこれでいいだろうと思うのではなくて、相手にどう、これはどう、どこが一番見やすい、ということをパソコンで変えていくことができる、ということが大切だというふうに思います。

そのように、見え方というのはさまざまなので、その人に合ったパソコンの使いやすさというものを情報提供していく、ということをしていただくといいかなと思います。

今日は、特に私が今まで関わったり、いろんな利用者さんから聞いて思うことがありますけれども、たとえばパソコンだと、支援する側はきっと、自分はパソコンのことが詳しい、あるいはスクリーンリーダーのこともすごくわかった、じゃあもうそれで、パソコンのことがわかれば視覚障害者に教えられるかというと、実はそれだけでは不十分なんですね。技術は努力すれば学ぶことができるのですけれども、意識をしないとなかなか視覚障害者に伝わりやすいコミュニケーションとか説明のしかたというのが難しい。見えないので、普通は自分が動作させているのを見てもらいながら、たとえば説明すればいいのだけれども、私たち見えない者にとっては、言葉での説明しかわからないことがあります。なので、そのへんをやはりどういうふうにしたらわかりやすいか、あるいはコミュニケーションをとれるかということも、すごく大切なので、皆さん今、次にお話するのはコミュニケーションのとり方ということでちょっと説明をしていきたいと思います。

今、画面に映り始めているのですが、これは今話していることを項目やコメントを付けているだけなので、見える方は見ていてもいいですけれども、見なくてもこれからしゃべっていきますので大丈夫です。

今、コミュニケーションのとり方ということを言いましたけれども、一番最初に私たち支援者と対象者、あるいは利用者と何が一番大切かというと、信頼関係だと思います。私たち見えない者にとると、この人、説明がわかるかな、とか、視覚障害者のことを理解してくれるな、というのを第一印象に持てると、すごくスムーズにいくし、それからパソコンや何かを学習するについても楽しくなります。

その信頼関係、視覚障害のことを理解してくれるなというふうに思ってもらえる最初のとっかかりが、挨拶のときに自分の名前を名乗ってほしいんですね。皆さん、それは一番最初に会ったときには自分の名前を言えると思います。私だったら「金沢です、畠山さんおはようございます」というふうに、たぶん最初は言えるのだけれども、私がいつも困るのは、廊下やなにかで「こんにちは」とかって言われても、笑顔で「こんにちは」って私もご挨拶しますけれども、「うーん、一体誰かな？」って思ったりするわけです。それが、先ほど学習支援をしてくれていた人だったりすると、「うーん、やっぱりもうちょっと視覚障害のことをわかったりして、名前を言ったりしてくれると嬉しいのにな」という気持ちになっていくと、パソコンのことよりも、その支援をしてくれる人との戦いみたいになってしまう可能性も出てきてしまいます。なので、この「自分の名前を名乗る」ということは、非常にとっかかりとしては大きい話なのですね。

そう言うと、挨拶とか自分の名前なんかは「わかった、見えない人の前に行ったら自分の名前を名乗ればいいのでしょう」、と皆さん思うかも知れないのだけれども、いざ会ってみると、普段からしていないとたぶんなかなか難しい。これはなぜなかなか難しいと言うかと言うと、私が見えなくなってきたときに、まだ見えない若葉マークの頃ですね、その頃にベテランさんたちにお会いしたときに、やはり自分の名前を名乗るというのがなかなかできなかったんですね、私も。今はそんなことはないのですけれど。ですから、普段からしていないとなかなかそういうことが伝わっていかないということになりますので、是非皆さん、そんなことは百も承知と思うかも知れないけれども、心がけていただけるとすごく嬉しいかな、というふうに思います。

技術だけではないというときに、私も経験があるのですが、一対一でたとえば隣同士でしゃべっていますと、私はたとえばパソコンに夢中になって真剣に操作しています。きっとその操作を見て、学習提供者、支援者の方は、今一生懸命やってるんだから、ちょっとトイレに行きたいけど声をかけたら悪いからそっと行きましょう、とたとえば思う人がけっこうおられます。それは好意で、よかれと思って。そうするとどうなるか。一所懸命夢中になっているから気配は感じませんね。だけど隣にいると思うから、「こうなっちゃったんだけどどうのこうの」と一所懸命しゃべっているのに返事がないということになりますね。これはやはり、視覚障害の人に対する支援では、やはりきちんと「ちょっと席を外すね」と言っていくというのが必要なことになります。

それから、「席を外すね」というのは言えても、戻ったというのを言わないという方がけっこういらっしゃるんですね。そうすると「席を外すね」と言われてずっと操作して、「まだ来ないのか」と言っているうちになんか咳をしたりして「え、戻ってたんですか？」というようなことって、本当にあるんです。本当にそれが、私たちにとっては大きな「あーあ」という、ため息になってしまうことになってしまいます。なので、それをたとえば一番最初にやったときに、そういう声のかけ方とかをうまくやってもらえると、言葉は悪いのですが、多少音声のことがわからない、どうするんだっけと言われても、ああ、視覚障害のことをきちんと理解して接してくれているんだというそっちの方のことも我々にとっては非常に大きいことになります。音声のことがなかなか、支援者も一所懸命努力してくれているけれども、わかりにくいというは私たちも、利用者

じゃ相手はないのは十分わかっていることなので、それよりはきちっと、私たちにとってわかりやすく、いかに説明してもらえるかというほうが、信頼関係を作るという上では大きな役割になっていくことになります。

「なんだそんなこと」と思っていらっしゃる方もいるかもしれませんが、我々見えない者、あるいは見えにくい者にとっては、そういうことが非常に、次に「やっぱりまたパソコンを習おう」とか「パソコンを教えてもらおう」という気持ちにつながっていきますので、是非そういうふうに、言葉のかけ方とかを普段からなさっていただけるといいかな、というふうに思います。

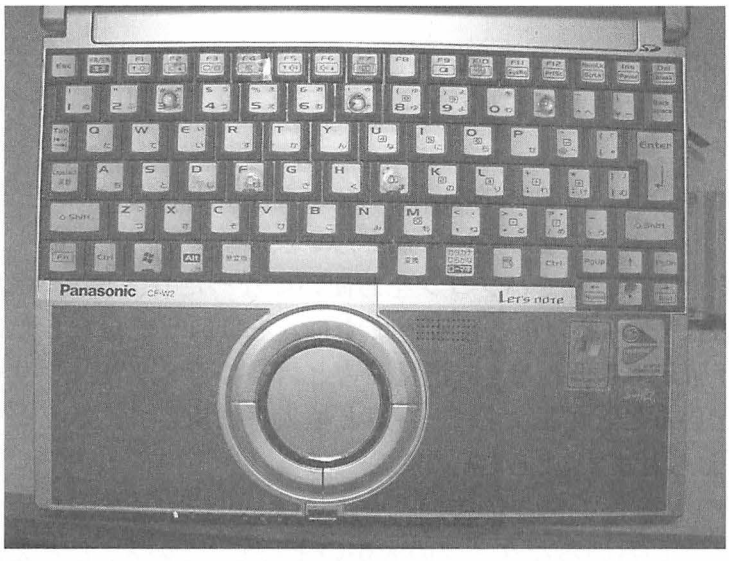
それから、よく皆さん方は、見える方たちはマウスで操作していきますよね。私たちは、多くの視覚障害の人は、キーボードだけで操作していきます。私たちがとまどっていると、「あ、ちょっとじゃあやっちゃうね」と言ってマウスで操作されるんですね。私もたくさん経験があります。そうすると、目的のところは行くのだけれども、じゃあ今度自分でやろうとしたときに、困っちゃうわけです。なので、やはりキーだけで操作する、あるいはその人が使ってその人のしやすい操作、普段使っている操作のしかたをきちんと説明するなり、本人にやはりやってもらう、時間がかかってもやってもらうということは、必要なことになります。よく、「ちょっと」ってやってもらったり、やってくれたりするんですね。それはそれで、時間の節約にはなりますけれども、相手が、我々が覚えていくということだとそれではやはり不十分で、マウスでやってしまうと、私たちが操作ができるようにはならないので、じゃあ今度はキーでやるにはどうしたらいいかというのをやはり一緒になってやっていく、ちゃんとやっていくということが必要なことになっていくなというふうに思います。

3番目なのですが、たとえば視覚障害の人がパソコンを操作しやすくする工夫という一つの提案ですけれども、ちょっとお見せしたいと思います。今私のパソコンは、キー操作だけでもちろんしているので、まったくキーって同じですよね。なので、たとえばノートだと、数字なんかは非常に困るわけです。スムーズに打っていくのに。どうするかというと、キーに印を貼っています。

たとえば、今画面で言うとたとえば [F6] のところにポッチが……。では数字で言います。私のところは数字の3と7と横棒のところに、バンボンドットという印なのですが、ぽこっとした印をつけています。そうすると私は3と7と横棒というので俄然打ちやすくなるんですね。あるいは、ミスタッチをするようなキーがあるとすると、同じようなところにミスタッチするようなキーがあるところに印を貼るとか、見えない人だとショートカットキーといって、短縮でキーを、コマンドというか設定なんかをするときにいくつかのキーを押して設定していくときに多く使うキーのところに印をつけるとかすると、俄然、操作しやすくなったりします。これは「つけたくない」という人もおられるので、利用者の方に「こうするとちょっと楽に打てるかもしれないんだけど、付けてみて、1回試してみて、よかったらずっとつけてみませんか」という形で提案していただけるといいかなと思います。

それから弱視の人、画面を見たいという人に対してはいろいろなソフトもありますけれども、パソコン自体でコントロールパネルの中から画面とかユーザー補助なんかで文字を大きくしたり、それから見え方によりますけれども中には画面が白っぽいとまぶしいから、白黒反転で画面を黒くしたほうが見やすいという方も結構おられるんですね。そういう設定というのが、簡単にできます。皆さんちょっと、見える方ごめんなさい、見える方は画面を見ていてください。ぱっ。変わりました？　画面。これは白黒反転の設定をしておくと、キーだけで切り替えができます。画面の白黒反転だけです。こうやってスクリーンに映し出すときは、普通のほうが見える方にとっては見やすいのでこういうふうにしますけれども、キーの操作、切り替えだけで白黒反転にす

ることもできるし、設定では画面を大きくしたりとか文字を大きくしたりとか、それからメニューバーだけの文字を大きくしたりとか、お好みに応じて画面を変えるということがWindows自体でできたりします。そういうことも情報提供していただけると、見ていただいて、もし見やすくなるのだったらそういう設定もして、見てもらって決めてもらえるといいかな、と思います。



最後に、たとえば視覚に障害のある人たちだと、言葉での説明というのが主流になると思います。見える方たちにはなかなか難しいと思うんですね、言葉だけというのは。支援者同士が、ちょっと一人アイマスクなり見えにくい状態にして、もう一人は言葉だけで、たとえばガイド——F、Jのところに手が行くように説明するとか、たとえば数字の電話番号を打つときに090というところを言葉だけでスムーズに090が打てるように説明できるかどうかというようなことを、支援者同士でちょっとやってみるとかというのも、一つ実際の目の前にいる支援者の人にわかりやすい説明をするためにそういうことをやってもいいのかなと思ったりします。

では、時間がちょうど30分ちょっと過ぎましたので、私の話はこのへんにさせていただきます。ありがとうございました。

司会： ありがとうございました。
たどなたかご質問があればお受けす。

会場： DOSの頃から視覚障害者の人に教えている、私自身も視覚障害者なのですけれども、所属は埼玉県にありますベーチェット協会の江南施設というところで非常勤でも指導員をしています。

最近、視覚障害者でも糖尿病による視覚障害者であるとか、あるいは半身不随を持った視覚障害者の人がちょくちょくいまして、最初の、肢体不自由の方に聞いたほうがいいのか、金沢さんに聞いたほうがいいのかわからなかったのですが、スクリーンリーダーを使いながらキーボードの操作を援助するといいますか、援助する、そういうものというのは使えるのかどうか、またそういった情報はどこで得られるのか、もしわかったら教えてもらいたいのですけれども。

金沢： 肢体不自由プラス視覚障害ということですか？ たぶん私よりも畠山さんとか前の方のほうがわかりますでしょうか。

畠山：　肢体不自由でなおかつ視覚障害ということですけれども、肢体不自由にもさまざまありますので、もう少し具体的に、どこでご不便をお感じになっているかというのを個別の問題としてとらえないと、ちょっと一般的な話には私はあまりお答えができないのですけれど。金沢さん、もう一度戻します。

金沢：　はい。そうなんですよね、具体的に、さっきもいいましたけれども、今目の前にいる人がどういうふうに困っていて、どういうふうにその人が使いたいかというのを、個別に対応するしかないんですね。

もし私のところに相談がきたら、やはりこういう具体的な話で、たとえば畠山さんとかと相談しながらやるとか、具体的にやはりそういうふうになっていくかと思います。

それで、肢体不自由の方で、実際に視覚障害の方でパソコンをお使いになったり、あるいは片手だけでパソコンをやってらっしゃるという方はいらっしゃいますし、そういう支援をしたこともあります。それから、ちょっと付け加えますけれども、視覚障害と言ってもスクリーンリーダー、音声を出しながら画面も見たいということで拡大して、音声と拡大を併用しているというロービジョンの方がけっこうたくさんおられます。よろしいでしょうか。

会場：　実は、一人とか二人ではなくていろいろなタイプの人がいまして、この人、たとえば両手が使えるのだったらいいのですけれども片手しか使えないという人は片手だけで入力できるようなソフトがありますのでそういうのを利用すればいいというのはあるのですが、感覚的な障害がある場合には、うまくキーに手が行かないとかズレてしまうとか、長押ししてしまうとか、同時に押せないとか、いろいろなタイプの人がいますので、その都度その都度、こういう人にはどういうことということをやはり、どなたかに相談した方がよろしいのでしょうかね。どういうところに相談したら。

金沢：　私もそうなのですが、視覚障害のことはある程度わかりますけれども、それ以外というと、そういう肢体不自由のほうの支援をしている人たちと相談しながら、今のお話だと、先ほど、お話していただいた田中さんなどがキーガードとか、手の震える人にキーガードが有効だとか、いろいろお話をされていましたけれども、そういうものをスクリーンリーダーと併用すればうまくいく可能性というのはたぶんあるかなと思いますけれど、地域で他の、視覚障害以外の支援、パソコン支援をされている人と相談するというのがいいかなというふうに思います。

会場：　わかりました。どうもありがとうございました。

司会：　それでは、どうしてもお話になりたいということでしたらお受けいたします。

会場：　質問ではないのですが、ただいまのご質問をいただいた方は、埼玉県の方というふうに聞こえたのですけれども、私は埼玉県ITサポートセンターの責任者をしておりまして、個別に今言ったようなお話は、具体的に支援の方法は後でご相談させていただけると思いますので、できたら後でお話させていただきます。

金沢：　素晴らしい。こうやって連携できていくというのが、もう何よりだと。今日は私、皆様の前に立った甲斐があったなと、今の一言で思いました。

司会：　ネットワークが広がりましたね。どうもありがとうございました。

資料

視覚障害やパソコンに関するweb・MLなどの一部紹介

ここでご紹介しているものは，ごくごく一部です。まだまだ山ほど便利なサイトやツール，メーリングリストなどあります。皆様も探してみてはいかがでしょうか？

＜視覚障害に関わるWEBやメーリングリストなど＞

●視覚障害者のWINDOWS活用のメーリングリスト
視覚障害者がWINDOWSを利用するにあたって，困ったり，分からないことを解決できる書き込みがたくさん！
http://j7p.net/ml/windows/

視覚障害者に利用可能と思われるWINDOWSソフトウエア一覧など
http://j7p.net/mm/event/

●「画面を見ないでWindowsパソコン」
視覚障害者自身がソフトを音声利用で可能かどうか検証し報告しているサイト。フリーのソフトがおもなので，利用し易い。
http://www.lares.dti.ne.jp/~tomof/

●VIRN　視覚障害リソースネットワーク
http://www.twcu.ac.jp/~k-oda/VIRN/index.htm

●視覚障害に関わる情報提供のメーリングリスト
(日本の中でおそらく一番会員数が多い)JARVIと言うメーリングリスト
http://www.twcu.ac.jp/~k-oda/VIRN/JARVI/MLregist.htm

●アイリンク：視覚障害者による視覚障害者のための情報検索サイト
細かな情報がたくさん！
http://www.eyelink.jp/index.php

＜視覚障害に限らず，福祉・障害に関するWEBやメーリングリストなど＞

●こころWEB
生活の手助けとなる製品の紹介
http://www.kokoroweb.org/

●こころリソースブック
パソコンを利用する技術やツールの紹介
http://www.kokoroweb.org/main.html

●こころWEBメーリングリスト
支援技術の開発と利用についての情報交換のメーリングリスト
http://www.kokoroweb.org/ml/index.html

● WAM NET(ワムネット)
福祉保険医療関連の情報を提供する総合的な情報ネットワークシステム
http://www.wam.go.jp/

<弱視者用フリーのソフト>

●「でかポインタ」
マウスポインタを大きくするフリーソフト
http://www.cs.k.tsukuba-tech.ac.jp/labo/koba/software/dpointer.html

●「見やすいかも知れないマウスポインタ」
http://www.lares.dti.ne.jp/~tomof/download/cursors.htm

●「アンダーマウスくん」
http://www.cs.k.tsukuba-tech.ac.jp/labo/koba/software/umous.html

<その他>

●「ニュース to スピーチ」
視覚障害者がWEBの様々なニュースや情報を上下左右キーで簡単に閲覧できるバリアフリーソフト。たくさんのモジュールも公開されていてとても便利です。お勧めNO1 !
http://www.geocities.jp/katsuragi_nori/news2speech/

●「サーチエイド」
国語辞典や英和辞典など検索サイトにアクセスする辞書ブラウザで，ニュース to speechと同じように簡単に検索できます。サイト数も増え，有料になり取り込みやアップデートがとても簡単になりました。体験2ヶ月。それ以降は有料。
http://homepage2.nifty.com/oss/

<おもなスクリーンリーダー>

● PCトーカー:高知システム開発
http://www.aok-net.com/

● VDM300:アクセステクノロジー
http://accesstechnology.co.jp/

● 95リーダー(XPリーダー):株式会社システムソルーションセンターとちぎ(SSCT)
http://www.ssct.co.jp/barrierfree/95reader/

● JAWS:エクストラ
http://www.extra.co.jp/

● WinVoice
http://www.nbs.co.jp/winvoice.htm

● MM-Talker
http://www.am-corp2.com/mm-talker/index.html

● FocusTalk：スカイフィッシュ
http://www.skyfish.co.jp/focustalk/index.html

ぞくぞく自然な音声のスクリンリーダーが登場！
● xpNavo：(株)ナレッジクリエーション
http://www.knowlec.com/
xpNavo のページ
http://www.knowlec.com/xpnavo/index.html

● Catwalk：Kazusoft
http://www.kazusoft.com/simple_catwalk.html

＜主な WEB を音声読み上げるブラウザ＞
●「ホームページリーダー 3.04」日本アイ・ビー・エム
http://www.ibm.com/jp/accessibility/soft/hpr_news050705.html

●「ボイスサーフィン」視覚障害者向け音声読み上げと読書機のアメディア
http://www.amedia.co.jp/

※特別なブラウザを使わなくても，スクリンリーダー「PC トーカー /VDM300」「JAWS」のみの利用でもホームページを音声で利用することは可能です。

＜画面拡大ソフト＞
● ZoomText(ズームテキスト) 9.0 Magnifier(マグニファイアー)
今回より X フォントを使用し，なめらかな輪郭が実現。拡大も３６倍まで。
http://121ware.com/software/zoomtext/

● MAGic for Windows(マジック　フォー　ウインドウズ) Version 9.5 日本語版
画面の拡大や見やすい色など多彩な機能を，直感的なわかりやすいインターフェイスで初めての人でも安心。
http://www.extra.co.jp/magic.html

＜メールマガジン＞
●「視覚障碍者への IT 支援方法」メールマガジン
晴眼者の立場から見た音声パソコンのサポートについて
http://www.mag2.com/m/0000175933.html

＜バリアフリーキーボード・マウス＞
● Microsoft Wireless Laser Desktop 6000
バリアフリーのインテリキーボード！ワンタッチでソフトの立ち上げを簡単にカスタマーできるキーボードとマウス。拡大鏡が立ち上がるキーや IE のページの移動キーがすでに着いてもいます。通常はいくつかのキー操作をして一つのコマンドになったりソフトを立ち上げたりしていきますが，操作が簡略化することができるキーボード・マウスです。
http://www.microsoft.com/japan/hardware/laser/wi_laser_desk6000.mspx

（文責：金沢　真理）

講演３

「聴覚障害者のための遠隔情報保障」
－支援の現状とボランティアとの連携－

内藤　一郎　筑波技術大学産業技術学部産業情報学科　教授

筑波技術大学の内藤です。よろしくお願いします。

我々は、インターネットを使った遠隔地からの手話通訳とか要約筆記の支援の研究をしています。本日はその現状と、特にこういう場ですので、ボランティアとの連携に絡んだ話に絞らせていただきます。

内容の関係で、ちょっと写真とか映像が多いので、視覚障害の方には非常に申し訳ないなと思いますが、できるだけ説明するようにしますので、よろしくお願いします。

最初に、うちの大学を紹介しておこうと思います。うちの大学は聴覚障害者と視覚障害者だけを受け入れている国立大学です。こういう大学は日本で我々のところしかないのですが、昨年の10月、三年制の短期大学から四年制大学に変わりました。ですので、四年制大学の学生は今１年生だけです。短大の学生と四年制大学の学生が今一緒に学んでいる状況です。

学生総数は、視覚・聴覚を合わせて総勢約400名に満たない、本当に小さな大学です。授業によりますが、１クラスだいたい10人から15人しかいません。私はこんなふうにたくさんの人の前で話すことはあまりないので、ちょっとこれはたいへんだなと思っているのです。

そんな小さな大学なのですが、実はキャンパスが２つに分かれています。私が担当しています聴覚関係、産業技術学部というのはちょうど皆さんから見て上の写真、天久保キャンパスです。一方、1kmくらい離れたところに春日キャンパスというのがありまして、それが視覚障害関係の保健科学部です。両キャンパスに障害者高等教育研究支援センターというのも併設されております。こういった大学ですので、聴覚・視覚障害に関する教育方法や情報保障等の研究を活発に実施しています。ですから、今日皆さんにご紹介するのは、そうした中の一つです。

次に、我々のシステムについてご説明しようと思います。

うちの大学に情報保障スタジオというのを今作ってもらってあります。皆さんから見て左側、向こう側の写真ですが、手話通訳、要約筆記がそこにおります。一方、支援先の大学の講義室、あるいは学会やイベント会場等とインターネットで結んで、講義室や学会の会場から音声、映像を大学のスタジオに送りまして、そうした情報を見ながら手話通訳を行ったり要約筆記を入力してもらい、その結果を会場に返すという方法をとっています。

我々の大学ができたのはまだ20年弱前なのですが、そのころは、聴覚障害者はまだまだいろいろな大学に入学していない状況でした。今は本当に大学全入時代に入ってたくさんの聴覚障害者が進学するようになりました。そういう関係ですので、他大学で学ぶ聴覚障害者が増えてきました。また、進学することによって研究者になっていくような聴覚障害者も増えてきました。ですので、そういった方々を支援していくということを目的としています。ただ、活動をそれだけに限っているわけではないので、できる範囲でいろいろな支援もさせていただいています。

さて、遠隔情報、こういったシステムの特徴を説明します。まず最初に支援を受ける側、会場側の特徴ですが、状況に合わせて情報保障の画面を表示することができます。たとえば、こういう

広い会場の中に1名とか2名しか聴覚障害者がいないのであれば、皆さんから見て左側の写真ですが、その方の前にテレビモニターを置いてそこに出すこともできます。あるいは、広い会場の中に何人も聴覚障害者がいる場合には、今日もここのスクリーンに要約筆記の画面が出ていますが、こういうふうに手話通訳、要約筆記を大きなスクリーンに出すこともできます。特に広い会場になりますと、手話通訳者の身長を大きくするわけにいきませんから、こうして大きなスクリーンで出すことによって後ろまで手話通訳が見やすいという状況を作ることができます。

また、支援を受ける方の希望や企画をする側の希望に合わせて、手話と字幕を合成して出すこともできます。ちょうど写真の左側がそうですが、手話通訳の映像と字幕を会場で合成して出しています。あるいは、スクリーンを2つ立てて別々に出すこともできます。

それぞれ、いい面と悪い面があります。たとえば合成して出しますと、一つの視野の中にすべての情報を見ることができます。これは非常にいい面なのですが、悪い面としては字幕の行数が3行くらいに限られてしまうことです。ですから、字幕の情報量としては減ります。一方、別々のスクリーンに出して何行も表示しますと、たとえば自分がちょっとメモを書いて見上げても、前の情報が残っている。ですから自分が視線を外したときの情報も得られるという利点があります。どちらがいいかというのはケースバイケースですので、その時々の要望に合わせて出すことができます。

後でお見せしますが、大学の授業とか学会になると難しい専門用語がいっぱい出てきます。あるいは今日みたいにこうやってパワーポイントを使った説明も多くなります。こうしたものも、画面の中に合成して一緒に出すことができます。

またインターネットへの接続が可能であれば、全国どこでも利用可能です。我々は今まで支援とか接続をいろいろやっていますが、北は仙台、南は鹿児島県の奄美大島まで接続したことがあります。特に屋久島等で学会を開いたときには、屋久島には手話通訳、要約筆記者はいないということでしたので、そういった地域へもネットワークさえつながっていればサービスをすることができます。

さて、今度は支援者側、すなわちスタジオ側の特徴を説明します。遠隔情報保障では、手話通訳者あるいは要約筆記者の前方や手元に、さまざまな情報を提示できます。実は今日、手話通訳者がいなくなってしまったので残念ですが、手話通訳というのは非常に特殊でして、実は皆さんに向かって通訳をしなければなりません。通常、音声通訳の場合ですと、資料を手に持ちながら、私を見て、あるいはスクリーンを見ながら通訳できますが、手話通訳者はスクリーンとか話者を背中にして通訳しなければなりません。しかも手を使っていますので、資料を見ながらの通訳もできません。ですが遠隔手話通訳の場合は、実はカメラに映らなければ何でも出すことができます。自分の前方にいろいろな資料を出すことができます。それを確認しながら通訳ができます。

あるいは、大きな会場で普通に通訳をやっていると、通訳者と待機中の通訳者の距離が離れてしまいますが、スタジオ内ですとカメラに映らなければすぐ近くに行ってアドバイスすることもできます。

専門用語、固有名詞を我々はできるだけ出すようにしています。というのは、手話通訳の方も要約筆記の方も決してその分野の専門家ではありませんので、難しい言葉がわからない。これではちゃんとした情報保障ができないということで、そういう情報も出しています。

実は先ほど言いましたように、画面の中にキーワード等を合成することができますので、合成したキーワード等を指さしながら通訳することができます。専門用語とか、たとえば外国の学

者の名前などは手話がありませんから、どうしても指文字になります。指文字というのは実は、我々がちょうどカタカナで全部本を読んでいるようなもので、非常に読み取りにくい。通訳者もやりにくい。それを画面に合成して出すことによって指さして示す。それによって通訳はしやすくなるし、授業を受けている学生にとっても内容を理解しやすくなると考えています。

では、支援の事例をちょっと見てもらおうと思います。これは筑波大学の実際の講義室、ちょうど100人から200人くらい入るような部屋なのですが、ここで実際に支援したときの様子を見てもらおうと思います。一番前に座っている学生の中央、3人座っていますが3人の中央が聴覚障害者です。両脇に座っている学生が実は学生ボランティアで、要約筆記をやってくれています。先ほど皆さんに見せましたように我々ですべて、手話通訳と字幕を出すこともできるのですが、学生ボランティアが活動しているとき我々はそれをやらないことにしています。というのは、我々が支援をやめてしまうと、その大学で支援がなくなってしまうというのは決していいことではありません。ですから、このように大学内でやられている支援があるなら、そうした取り組みと連携しながらやるようにしています。そして、互いに我々も彼らも、刺激し合いながらやっていけたらなと思っているのです。ちょっと様子をビデオで見ていただこうと思います。

今ちょっと映像を流しました。聴覚障害者1名に対して2名の学生のボランティアがいたのですが、彼らが打っている文字情報を講義室内で合成しまして、手話通訳映像の中に3行ほど字幕を入れて提示しています。そういう形で支援した事例です。一緒に出すと要約筆記の人は頑張ってできるだけ速く打とうとしますが、それでも多少遅れます。ただ、支援を受けた学生に聞くと、指文字などが出て読めなかったときにちょっと下を見ると、遅れて文字が出てくる。それが却ってよかったということもありました。

次の支援事例は、福岡のビジネススクールでのパソコン実習を支援したときのものです。これはビジネススクールなのですが、実は福岡県の障害者の職業能力開発校かなにかの就労事業の一環としてやられたものです。このとき、我々のスタジオ側に手話通訳者と要約筆記者を用意していますが、現地の福岡県の会場にも要約筆記に来ていただきまして、筑波側と福岡側で要約筆記の連携をやってもらいました。何を目的としているかというと、たとえば地方などでやったときに、会場で要約筆記者の数が確保できない、こういったときに多地点間で協力し合うことによって支援できないかという実験をしました。福岡側で組んでもらって、筑波側で組んでもらって、交代で打ってもらうというスタイルと、福岡と筑波で一緒に組んでもらって一緒に打ってもらうというスタイルをやりました。これも映像があるので見てもらおうと思います。

非常に狭い実習室なのですが、約10名くらいの聴覚障害、20代から50代くらいまでの人でハローワークに来ていた方、申し込んだ方を対象に行われたものです。狭いので通訳の映像とその下に字幕を縦方向に配置しています。こんなふうにして支援しました。地域間で連携して打ってもらったのですが、要約筆記と一言に言っても、地域とかグループによっていろいろやり方とかルールが違ったりします。こうした支援の結果として、そういう問題点もわかってきました。ただし、基本的には事前に密に打ち合わせをすると遠隔地間の連携も可能だということがわかってきました。ですので、先ほど言った地方などでやるとき、あるいはいろいろなところで要約筆記者が足りないような状況では、こういったシステム整備を進めることで連携し合いながらやっていくことができるのではないかなと考えています。

この後ここで紹介するのは、今現在我々が支援している最新のシステムです。手話通訳者、先ほどの映像にもありましたが、専門用語等が出たときには合成したキーワードを指さしながら、

指文字を使わずに通訳してもらうという方法をとっていますが、もう一つ課題だったのが、パワーポイント等のスクリーンを指さすというのがなかなか難しいということです。というのは、画面に向かって、画面につられて指を出す、手を出すと映像として逆側になるということが起きてしまいます。ついつい熱中してくるとつられやすいという問題があります。それともう一つは、現場にいるとスクリーンに対して上のほう、下のほうという指し方ができるのですが、遠隔でやるとそれがなかなか難しいということがありました。

だったら、画面の中に合成してしまいましょう。ちょうど天気予報とか手話ニュースみたいに画面の中に全部入れちゃいましょうという方法をとりました。実際にはタッチペン式のPCを使って、重要な部分、あるいは先生がしゃべってパワーポイントにないような部分も、書き込んでしまうという方法をとっています。

ではちょっと、この様子をまたビデオで見てもらおうと思います。

今見てもらいましたように、画面の中のパワーポイントに適宜書き込んでもらって、あるいは重要な部分には線をひいてもらって、それをうまく指さしながら通訳してもらう、こんな方法を現在採り入れております。

では、実際の現場での、その通訳を受けている講義室側の映像を見てもらおうと思います。実はこの授業、だいたい500名くらい入る大教室で、500人近い学生が受けているそうです。聴覚障害者が3名受講しているのですが、ちょうどこの写真で見ると一番前に3人座ってもらっています。モニターが4つくらい並んでいるのですが、先ほど見た手話通訳の映像が2つのモニターに出ています。間に挟むように1個1個モニターがあるのですが、これは現場の学生ボランティア、ノートテイクの学生のノートテイクの映像を出しています。ですから、聴覚障害の学生は授業を受けながら、手話通訳の映像を見たり、あるいはノートテイクの映像を見たりしながら、自分で適宜選びながら授業を受けています。

あと先生に向かって1つモニターがあるのに気づくと思います。我々はこういう情報保障をするときに、先生にも手話通訳の映像を出しています。というのは、人間、私もそうなのですが、通訳がつく、要約筆記がつくというと非常に安心します。どうなるかというと非常に話が速くなります。たとえば外国に行って、英語はろくにしゃべれないのだけれども、通訳がついたと思った瞬間にとても安心してぺらぺらぺらぺらしゃべたります。そうなると通訳がついてこられなくなりますので、先生にも示して、「先生、ときどき確認してください」とお願いしています。

今日最後にまとめで改めて言おうと思っているのでが、よい授業というのはシステムだけでは絶対にできません。支援する人間、あるいは受ける学生、授業をする先生、みんながお互いに問題や意識を共有し合わなければできないということがあります。ですので、先生にも示しています。これもちょっと映像を見ていただこうと思います。

今見てもらいましたが、画面の右隅にあった白い画面がノートテイクの画面で、ビデオを合成するときにちょっとホワイトバランスの関係で真っ白になっちゃっています。でも、実際にはちゃんと読めるようになっています。

あといくつか紹介させていただきます。これはボランティア養成の支援をしたものです。今年の9月に、PEPNet-Japanという日本財団や我々の大学が中心になってやっていますが、聴覚障害者の高等教育を支援する組織があります。そこが各大学のノートテイカーの指導員を養成する講座を開きました。東京会場で開いたのですが、うちのスタジオから東京会場のノートテイカー指導員養成講座を支援しました。それと同時に、せっかく開くのだから全国の希望する大学

には配信しようということで、情報保障画面と講義の内容を筑波から金沢大学、愛媛大学、同志社大学にも配信しました。こんな取り組みもやっています。

また、我々こういうのをやっていく中で、実際の場面でも我々の研究が応用できないかということを検討しています。たとえば皆さんから見て左側ですが、学会会場などです。今日ですと要約筆記者は一列に並んで見やすい状況ですが、向き合うように座る場合もあります。そうするとやはり要約筆記もスクリーンを背にしたりします。ですので、要約筆記者の前にモニターを立てて、パワーポイントの画面、キーワード等を映したりします。あるいは手話通訳者の前方にもモニターを1台置いて出すことによって、後ろで出ている情報が何なのかというのがわかるようになります。特に通訳の人は後ろが見えないのに講演者が「これは大事なんですよ」と言ったら「これ」が何だかよくわからないということが起きますので、そういうのもわかるように。

こういうことをしていると、内藤先生のグループは手話通訳者、要約筆記者ばかり支援しているのではないですかと言われます。ですが、支援を受けた学生たちにアンケートをとって聞きますと、要約筆記とか手話通訳がしやすい環境で行われた時の情報保障は、良いということを言います。ですから、要約筆記者や手話通訳者が支援しやすい環境を作ることが、最終的には内容のある情報保障を実現すると考えています。

我々はシステムデモンストレーションなどの取り組みもしています。声がかかればどこへでも行ってシステムのデモンストレーション等を実施します。学会から声がかかれば行きますし、それこそ手話サークルなどから声がかかっても行ったりします。ネットワークがつながれば、ネットワークをつないで筑波からデモンストレーションをすることもできますが、ネットワークがつながらないような、利用できないような環境であっても、それこそその場でネットワークを作って、現地の臨時のスタジオから支援したりします。たとえばこの写真は、今年の11月に北九州でやった日本福祉機器展なのですが、ここでは臨時のスタジオを作りました。ちょうど皆さんから見て右側の写真がデモンストレーションしているところですが、この衝立の向こう側にもう一つモニターが見えると思います。衝立の向こう側に臨時スタジオを立てました。衝立のこっち側と向こう側にネットワークをはりまして、北九州市の手話通訳者に来ていただいて、実際に我々のシステムを体験してもらったりしました。ですので、皆さんから声がかかれば、いつでも僕たちは自分たちの研究費や日程の都合がつく限り出かけていって、実際に見てもらったり体験してもらったりしています。

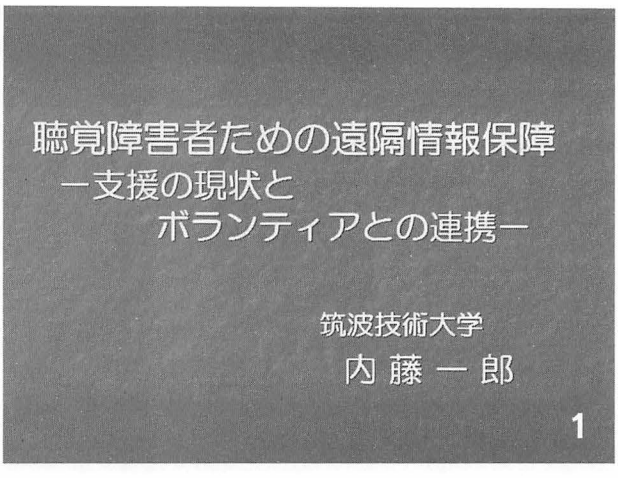
ボランティアとの連携なのですが、情報保障というのは互いの信頼が基本です。先ほどちょっと簡単に言いましたが、どんなにいいシステムを作ってもそれだけでは問題は解決しません。ですから我々は、たとえば授業支援をするのであったら、先生と支援者と我々と、そして学生とともに、できるだけ時間を作って意見交換をするようにしています。あるいは学生たちにアンケートに答えてもらって、翌週の支援にもし改善できるものがあったらどんどん採り入れるようにしています。またお互いの信頼がありませんと、どうしてもお世辞に「いいですね、いいですね」で終わってしまうのですが、やはりお互いに信頼をもって手話通訳や要約筆記の人たちから率直な意見が聞けることが、本当にいいシステムを作る基本だと考えています。

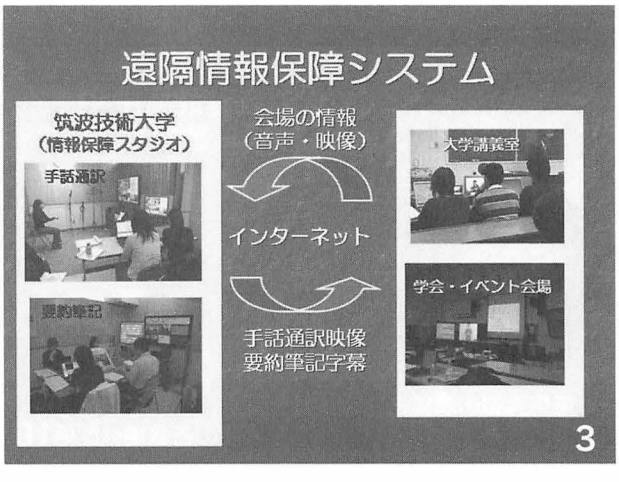
いくつかビデオを見てもらいましたが、現場のボランティア団体があればそういうところとも連携できるように、柔軟なシステム作りをしています。ですから、我々だけで閉じているだけではなくて、互いに刺激し合うことがよりよい情報保障、あるいは社会環境を築いていくものだと考えています。

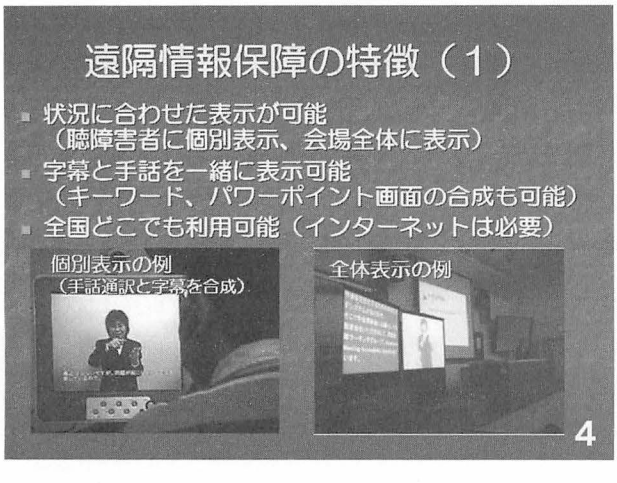
最後に、先ほどちょっとシステムデモンストレーションの話をしましたが、声がかかればどこへでも出ていきます。我々は今のところ学会や授業の支援を中心にしていますが、そういったシステムデモンストレーション等を通していろいろな連携が深まっていく中で、さらに新しい連携活動の可能性があれば良いなと考えていますので、もしよろしければいつでも遠慮なくご連絡ください。今日、パンフレットを入れてあると思いますので、私のもとへ連絡をいただければ、できる限りのことをさせていただきます。

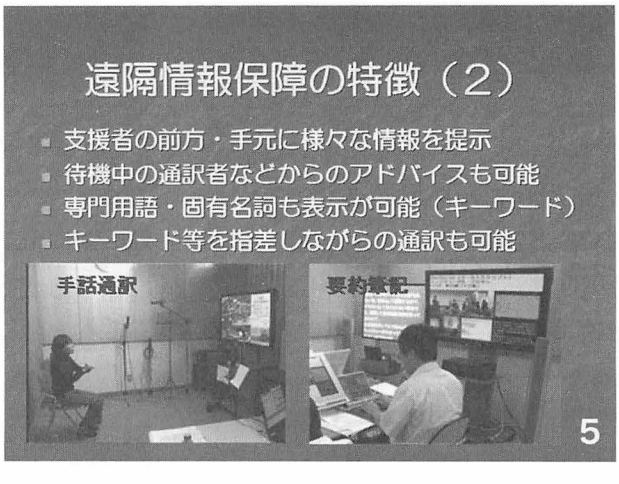
ただ、いつも最後に付け加えますが、私も授業などがあったりします。一番私が優先するのは自分の授業なものですから、自分が担当している聴覚障害者を自習にしてまで支援はしないので、それはご理解ください。以上です。

資料スライド

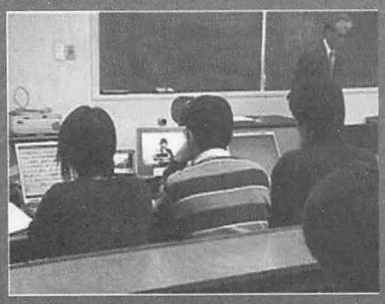








支援事例（大学講義支援）
－学生ボランティア（要約筆記）との連携－

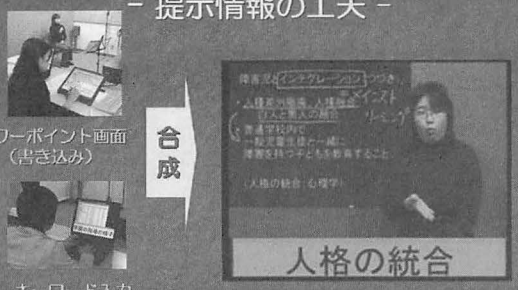


現場のボランティアとも協力・連携して支援 6

支援事例（ビジネススクール支援）
－遠隔地間での要約筆記の連携－

つくばと福岡の間で要約筆記の連携を実現！ 7

最新のシステムの概要
－提示情報の工夫－

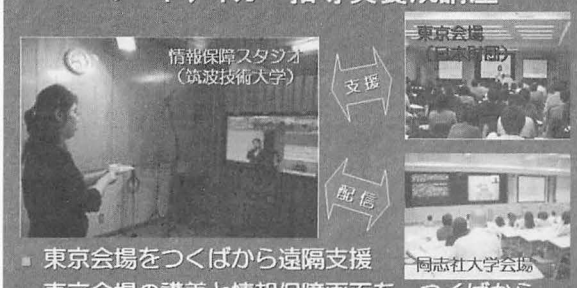


提示している映像 8

支援事例（大学講義支援）
－最新のシステムを用いた事例－

現場の学生ボランティア（ノートテイク）とも連携 9

ボランティア養成の支援
－ノートテイカー指導員養成講座－



- 東京会場をつくばから遠隔支援
- 東京会場の講義と情報保障画面を、つくばから金沢大学・愛媛大学・同志社大学の各会場へ配信 10

通常の情報保障場面への応用

学会支援場面（要約筆記）　講演支援場面（手話通訳）

- パワーポイント画面、キーワード、講演者映像などを支援者の手元・前方に提示
- 支援しやすい環境が充実した情報保障を実現 11

システム・デモンストレーション

- システム・デモンストレーションの実施
  - 筑波技術大学からのデモンストレーション（ネットワークが利用可能な場合）
  - 現場の臨時スタジオでのデモンストレーション（ネットワークが利用できない場合）

12

ボランティアとの連携

- 互いの信頼が情報保障の基本
  - システムだけでは問題は解決はしない
  - 率直な意見交換が充実した情報保障を築く
  - 手話通訳者・要約筆記者養成講座に大学を開放
- 現場のボランティアとも連携できる柔軟なシステム作り
  - 互いに刺激し合うことが、より良い情報保障、社会環境を築く
- より広い連携の模索
  - システム・デモなどを通した連携の広がり
  - 新しい連携活動の可能性

13

意見交換

コーディネーター:
望月　優　株式会社アメディア　代表取締役

話題提供者:
三崎　吉剛　東京都立中央ろう学校　主幹
「『情報保障』というICTボランティア」
河村　宏　国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所　障害福祉研究部長
「自立と参加を支えるITとは」
寺島　彰　浦和大学総合福祉学部　教授
「障害者支援におけるパソコンボランティアへの期待」

コメンテーター:
加納　尚明　札幌チャレンジド　理事・事務局長
湯汲　英史　社団法人精神発達障害指導教育協会　常務理事

望月:　皆さん、こんにちは。望月です。後半の意見交換の司会をやらせていただきます。

今ご紹介いただいたように、私はアメディアの会社を経営していますけれども、今日はIT支援セミナーということで、全障害者を対象にしていますので、そういう角度から言うと私は東京中小企業家同友会の障害者委員会の委員長という立場にあります。全部の障害者を対象にしていますので、そちらの心得をもって司会をしたいと思います。

今日、最初にこの意見交換会では3名の方に話題提供としてお話をしていただきます。3名とも、錚々たるメンバーです。一人目は三崎吉剛先生。養護学校、盲学校、聾学校って全部障害者の学校を経験されている、先生の大ベテランです。二人目が河村宏さん。国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所の部長さんですけれども、説明すると長くなるので、とにかくすごい方なんです。私もいろいろお世話になっていてですね、説明するときりがないんですよ。とにかく、視覚障害者の読書環境の恩人です。三人目が寺島彰さん。この方は現在は浦和大学の教授ですけれども、この方もものすごい方で、私は個人的にたいへんお世話になっています。アメディアが始まるときの本当の大恩人ですし、この方は元厚生省の優良官僚でしたからね、要するに政治のことも全部わかっている方なので、こういう3名の方に順次お話をうかがいますので、よろしくお願いします。

それではまず、三崎先生、よろしくお願いします。

話題提供１:「『情報保障』というICTボランティア」

三崎　吉剛　東京都立中央ろう学校　主幹

今紹介していただきました都立中央ろう学校の三崎といいます。先ほど、筑波技術大学のことが、紹介されていました。この大学は昨年の10月に短期大学から四年制大学に変わりました。都立のろう学校では都立中央ろう学校が４月から生徒を迎えて動いています。大阪では「だいせん高等聾学校」という新しい聾学校ができています。このように、聴覚障害教育は大激動の中に入っておりまして、私は今その激動の嵐の中にいるような感じがしております。

まず、中央ろう学校の紹介をして、どんなふうに生徒が勉強しているかという様子をご紹介したいと考えています。先ほど「内発的動機付けということを畠山さんが言われていました。「やる気を起こさせるようにするにはどうしたらいいか」という話で、これは我々教育者にとっては一番大事な課題だと思います。私は数学を教えていますが、数学の勉強でもどうしたら興味・関心を持ってもらうかということが第一のことと考えています。障害者のIT支援をするときに、障害のある方がコミュニケーションに対して強い関心を持って動機付けられて行くためにはどうしたらいいかということで関係すると思いますので、ちょっとそれをお話させていただきます。

教師は内発的動機付けのためには、いろいろな教材での提示の仕方を用意しなければならない。中学生に図形の勉強を教えているのですが、中学３年生は「平行線の性質」があって、「中点連結定理」というのがあります。中点連結定理を「証明をする」という方法で学習させるように教科書は書いてあります。教科書というのは、障害を持っていない方のための一斉授業のために書かれたもので、このままやると障害のある生徒はのってこられない場合があります。また、一般の学校で学力の低い方にとってはちょっと辛いものがある。これは、問題の配列が優しいものから難しいものになっていて、うっかりするとその時間の最後が一番難しい問題をすることになってしまうことなどです。

さて、「証明」というものは、定規とコンパスによる作図という操作を言語化したものであるということがわかれば、作図でそれを置き換えることができます。ただし、作図することによって時間がかかりますから精選する必要はありますが、代替的手段で目標に到達することができる。

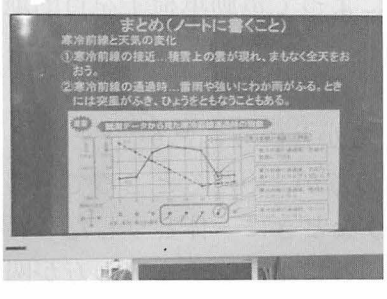
もう一つは、定規とコンパスによる作図というのは、実は折り紙と同じなんですね。折り紙をやれば作図ができて、証明ができるということです。たとえば、さっき聞きながらいじったのですが、ここに三角形があります。これは私のレジュメなんですが、自分で三角形に折りました。この三角形を、一番上の頂点を底辺に持ってくるように折るんです。次に、後で見えない方にはお渡ししますので触ってください。各、２つの頂点、他の頂点を底辺のところで半分に折って、長方形の形に変えるんですね。そうすると、これはよく見ると、この小さい左側の三角形の底辺というのは半分になっていて、右側のほうの三角形の底辺も半分になっていて、大きな三角形の底辺とそれから上にある線分とが1:2の関係になっていることが一目瞭然なんですね。これが中点連結定理です。これで子どもたちはわかっちゃうわけですよね。なんでこんなところで数学の話をするのかというと、要するにいろいろな方法を持っているということが大事であることを知っていただきたかったからです。生徒が思いもよらないような方法で提示する。あるいは、畠

山さんも言われていましたけれど、その方の生活に密着するような課題とくっつけてやるというようなことをすると、生徒はのってきます。この論理は、おそらく障害者のIT支援でも同じだろうと思います。

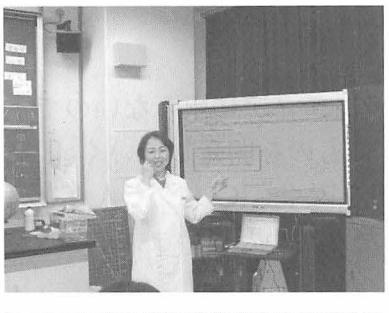
さて、ろう学校では、昔は生徒が手話を使うと先生に怒られたらしいんですけど、今はもう手話はどんどん使っていますし、しゃべるし、すごくうるさいんですよ。手話にしろ口形を読むにしろ、人間が人間に対して直接コミュニケーションする方法ですから、一斉に情報を伝えるということがろう学校ではできなかった。つまり、一般の学校の校内放送のようなことができない。私はろう教育にきて非常に疑問に思ったのは、コミュニケーションのことを非常に問題にしていながら、こういった一般の学校にあるような校内放送についてまったく検討されてこなかったということはどういうことなのだろうかなと思いました。筑波技術大学には「見える校内放送」があるんですよね。今回それを中央ろう学校ではつけましたのでご覧に入れます。

大きなプラズマディスプレイが各教室にありこれがLANで結ばれています。ご覧になっているのは、2時間目の授業が終わったことを知らせているものですね。

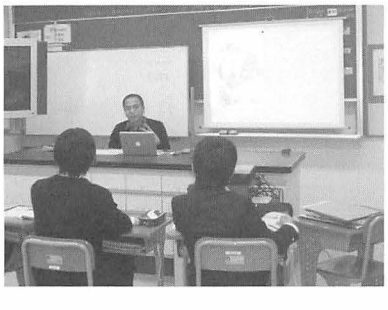
これは、授業のチャイムの代わりをします。また、お昼休みにはいろんなスポーツ大会の写真をここに出して、クラス全員とか学年全員が一つの話題で食事をすることができるようになります。



次は授業での電子黒板としての活用です。寒冷前線と天気の変化と書いてあるパワーポイントの表示ですね。



授業中の様子です。理科の先生が、手話を使って声を出して、指を差して授業をしているところですね。



こちらの写真は社会の先生で、この先生はプラズマディスプレイではなくてプロジェクターでやっています。

黒板の前の右側にプロジェクターのスクリーンがあって、ここに社会の地図かなにかが出ています。左側にはプラズマディスプレイがあります。正面にはホワイトボードが置いてあります。生徒はその前に４人くらいいるのですが、馬蹄形というかＵ字型に生徒がすわっていまして、お互いの口形や手話が読み取れるように並んでいます。ろう学校の中学部の定員は、１クラス６名になります。

ろう学校ではこういうふうに「聞こえない」ということのために情報保障をしています。私はすべての障害というのはコミュニケーションの障害というふうにとらえる視点が必要かなと思っています。つまり、聞こえないということ、それから肢体不自由者であれば書けないということ。あるいはページがめくれなくて本が読めないということ。見えないということ。見づらいということ。それから言語障害があるということ。これはみんなコミュニケーションの障害で、すべての障害をこの視点に立って、支援を考える。

これを、人の力で支援するということはもちろん大事なのだけれど、おそらく人だけでは足りない。そこにICTの活用の道がある。さらに、人が助けてはいけない場面だってある。つまり、自立して自分から情報をとるような環境を作るということが生徒にとって、あるいは人々にとっていいわけですから、そういう環境を作るために人間が介在しないようなコミュニケーションの手段を作り出していかなければならないというふうに考えています。

さて、全国各地でやられていて、今銀座で東京都がやっているのですが、小さなICチップを町中いたるところに埋め込んで障害者を助けようという国土交通省の企画があります。小さな携帯電話のようなコミュニケーターに手話を出したり文字を出したり音声を出したりして、障害のある方を支援する。お店で何を売っているかとか、ここがどこであるかということをガイドしようという試みです。点字ブロックの中に埋め込まれたICチップによって電動車椅子を目的地まで安全に運転するということも実験されています。

先日これをやっている方と話したのですが、何をどのように伝えるかということが、まったくわからないという話をしていました。つまり、聴覚障害や視覚障害の方が、いたるところで情報を得られるということは今までなかったわけなので、こういうふうなときに一体どうしたらいいのだろうか、ということが起こってきています。是非こういうところにボランティアの方が関わっていただけたらいいなと思っています。

最後ですが、ちょっと大風呂敷になりますけれども、パソコンボランティアに限らないのですが、技術開発の出発点に障害者の利用を置く。障害者が使えるようにものを開発していく。最終的には、子どもも老人も外国人も使えるような、すべての人の利用を置く。ICタグで人々を導こうというのはこういう視点なので、是非このことに関わっていただきたいと思います。

以上です、終わります。

話題提供２:「障害者支援におけるパソコンボランティアへの期待」

河村　宏　国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所　障害福祉研究部長

最初に、ITによる支援というときには、そもそも障害のある方たちの自立と社会参加を支援するときに、私は４つの視点というのを自分自身にいつも課しているというふうに整理をしております。

１つは、本人の能力をどうやって発展させるのか。既に皆さんは能力をお持ちなので、それをどうやって一緒に見つけるか、ということだと思います。そのご自身の持っている能力から発しないことには何も始まらないと思います。

２番目には、場を作る、あるいは環境を整備するということだと思います。その方がどんなにいろいろなことができても、なにかやろうとすると環境が整っていなければそれを発揮できない。その環境を身近なところでどう作るのか、あるいは場をどう作るのか。

３番目は、そういうご本人と向かい合い、周辺の環境を整備していくということが、特定の個人に最も適した方法をとるということが大前提なのですけれども、であるからこそ、それが他の障害をお持ちの方もそれぞれそのようにしていく。あるいは、高齢の方、社会一般の人たちがそれぞれ最適というものがあるとすれば、最終的にそれらが調和し合って、いわゆる「共に生きる社会」につながっていく、その展望をはっきり持たないと、個別の改善というものが最終的にはバッティングしかねないというふうに思います。具体例を挙げますと、この部分が非常に難しいことなのですけれども、たとえば今視覚障害の方がだんだん高齢になられますと、聴覚にも障害が出てくる可能性がある。さらには、肢体不自由になる可能性もありますし、あるいは認知症等ですね、さまざまな加齢に伴う障害というものがあるわけです。これは長生きすればどうしても出てくるものですね。それは長生きしたことの、ある意味ではそれを受け入れながらの、やはりまだ楽しい、豊かな、みんなと一緒に暮らしていく楽しさがそこになければ、長生きする甲斐がないわけですね。ですから私たちは健康とか社会参加とかいろいろなことを活動していきますけれども、最終的にはみんなが長生きして楽しめる老後というものを、自由な時間を思いっきり楽しんでいく、そういった老後を目指したことを、最後に考えながら、今それぞれの分野でチャレンジをしている障害のある人たちと一緒に、そういう社会を作っていくんだという展望を持つことが、非常に大事なのではないかと考えるわけです。従いまして３番目の視点として、共生社会ということは欠かせないというふうに思っております。

そして４番目ですが、これは実は、あらゆるレベルにおいてご本人の積極的な参加というものがないことには、何も始まらないわけです。つまり、それぞれの場面において、まずご自分の能力を見つけ発展させるというところは、本当にご本人が動かないことには何もできません。環境を作る。これは誰かがやってくれるのを待っているだけでは、環境はできないんですね。一緒に何らかの形で、自分はここに不自由をしている、ここが不便だ、これをなんとかしたい、ということを一緒に考えていただいて、それを表していただかないと、何も始まりません。３番目の共生社会というのは、今障害をお持ちの方がここが不便である、ということを明らかにする。それを解決していく。その解決を連結させることによって社会そのものを発展させるデザイナーになっていただく。つまり、言葉の上で「参加」というのは簡単ですけれども、本当の参加というのは積極的に社会をより暮らしやすくしていく、より充実した人生をそこで展望していく、積極的な働

き手の一人として参加していただく。そうしなければ本当の共生社会もできないと思います。つまり、あらゆる場面で本人が積極的に参加していくということが重要だと思います。

ITというキーワードの会ですので、ではITはそこで何をするのか、ということになるかと思います。

先ほど、三崎先生が言われましたように、コミュニケーションを保障していく。これはITの最も重要な役割の一つだと思います。私はそれにもう一つ、知識と文化を共有していくというふうに一つ付け加えさせていただきたいと思います。何故かといいますと、やはり記録されたもの、あるいは、これは自分の頭の外に記憶されたもの、自分の頭の中に記憶されたもの、あるいは身体で覚えているもの、あらゆるものを通して、記録された知識、あるいは記録された文化、それを最大限に活用するということが、先ほどの積極的な、自ら一緒にいろんなことにチャレンジしていく、そして社会参加していくということに不可欠だからです。ですから、その意味で、記録をしていき、必要なときにその記録された知識・文化が取り出せて、一緒に楽しめる。これが非常に重要だと思います。

そのようにITというのはコミュニケーションと記録において決定的な役割を果たします。そういうふうに考えますと、先ほどの畠山先生が的確に日常の生活から社会参加までということでまとめてくださったのですが、その全体を通じてITはコミュニケーションと知識、および文化の共有において決定的な役割を果たさなければいけないだろう。そういう形でIT支援というのが個別の一人一人と向かい合うところから始まって、視座をともにしながら共感を持って、一緒にものを見ていく。そしてちょっと距離を置いて、先ほども畠山先生がおっしゃったように、観察し、客観的に分析をして必要な助言、あるいはそこから得られた知見を得ていく。そして最終的には一人一人が自分自身に対する、障害をお持ちの方のイメージをどんどんよくしていく。つまり自分はこれができるんだ、あれも一緒にできるんだ、ということで世界を一緒に広げていく。そういう活動の中でITが活用されるということがITによる支援というものの一番重要な点ではないかと思います。

ちょっと抽象的なことになってしまいましたけれど、さらに具体的なことを一言だけ申し上げます。

盲聾者という言葉と、聾盲者という言葉がございます。医学的にみると何も違いません。見えなくて聞こえない方のことです。ところが、聾ベースの聾盲者と呼ばれる方たちは、手話、目で見る手話から始まって、目が見えなくなったときには指で触る手話、触手話というものに主として依存してコミュニケーションすると言われています。逆に盲聾者と呼ばれる方たちは、聴覚に依存し、あるいは点字に依存するということで、暮らしてこられて、そこで聴覚を失われたときには最後に点字が残る、ということになります。ともに触覚が残るわけです。

この点字による触覚のコミュニケーションと、指、触手話によるコミュニケーションの間には、やはりまだ深い断絶があります。同じ医学的な障害でありながら、まったく違う文化、違うコミュニケーションに生きるというのが、盲聾者と聾盲者の壁ということになります。私たちは、こういった問題をどうやったら解決できるのかということを考えて日常のIT支援を深めていくということが必要だと思います。

つまり、ビジョンが必要なのだと思います。そのビジョンというのは、最終的にはいろいろな形があります。点字、書かれた文字によるコミュニケーションを触手話に変換するということは、技術的には可能です。ですから、技術的には可能なのですけれども、隠れた文字体系による概

念把握と、もともと手話という同時に多チャンネルで視覚的な情報が出てくる概念把握とでは、かなりそこに違いがあるというふうに言われております。ではどうやったら解決できるのか。おそらくマルチメディアを、初期の段階から活用していく。まだ２つくらいの、触覚プラス聴覚、あるいは触覚プラス視覚、この両方が使えるときに、マルチメディアとしての概念形成を、あるいはサポートを充実させていく。これを特に就学以前の言語獲得段階くらいから併用していくということに将来があるのではないか、ということを漠然と考えておりますけども、そのあたり、これから皆さんと一緒に、いろんな現実に障害をお持ちの方たちとともに歩みながら、最終的にはともに暮らす社会づくりに歩んでいきたいと考えているところであります。

話題提供３:「障害者支援におけるパソコンボランティアへの期待」

寺島　彰　浦和大学総合福祉学部　教授

ご紹介ありがとうございました、寺島です。

今ご紹介いただきましたように、私は浦和大学というところで教員をやっているのですけれども、研究テーマが２つありまして、１つは障害者福祉政策で、もう１つは福祉機器を活用したソーシャルワークというのを研究しております。この後者に関係あることなのですけれども、先ほどご紹介いただきましたように、自分で視覚障害者用のワープロのNRCD-Penというのを作りましたが、技術者の方に障害者のことを伝えるというのはなかなか大変だというのがわかりまして、時間をかけてもなかなか伝わらないくらいなら自分で開発してしまったほうが早いと思いまして作成しました。それ以来この業界に関わらせてもらっています。それというのも、いったん何かを開発しますとそのサポートがずっと続くんです。そのお蔭でずっとボランティアをさせていただいております。ボランティアで企業に土曜日に行って、誰もいない中で利用者と２人でカチカチカチカチとイントラネットにいかに接続するかみたいなそういうボランティアをやっていたりして、なかなか面白い経験をさせていただいております。

本日は障害者のICT支援の今後についてお話したいと思います。私が勤め始めたころは、視覚障害者の方は盲人カナタイプでしか文字を打てなかったんです。要はカナしか書けなかった。しかも読み返すことができませんでした。しかし、今は音声ワープロを使って事務もばりばりこなせるようになっています。そういうICTの有効性は、もう既にここにおられる方は十分ご理解いただいていると思うのですが、有効であるにも関わらず、支援者が不足しているという状況にあります。たとえば、金沢さんが先ほど言われていましたように、完全にブラインドタッチでパソコンを操作できる晴眼の指導者は、たぶん日本には１人か２人くらいしかいないと思うのですけれども、でもそれができないと本当は十分教えられないはずですよね。そういった支援者の不足というのがあります。

一方でボランティア活動は活発なんです。日本障害者リハビリテーション協会でパソコンボランティアの指導者養成等やっているわけですけれども、全国にすごく活動的なボランティアのグループがたくさんあります。今日発表していただきます札幌チャレンジドの方などのように自前の貸し出し用の機器を用意されているというすごいボランティアがあったりするわけです。

一方で、公的機関の不十分な支援体制があります。ICTの指導などは、本来公的機関でやるべきであると思いますが、予算削減のためとてもやれるような状況にはない。そのためできるだけ市場化をしようとしているわけです。しかし、非常に長く訓練を必要とする、たとえば今河村先生が言われておりました盲ろう者の方ですと、パソコンを指導するのにたぶん２年くらいは軽くかかるんじゃないかと思いますが、そのような指導まで市場で提供できるかといと、きっとできないと思うんですね。そういった部分はやはりある程度ボランティアの方たちが支援してあげないとしょうがないのではないかと思います。

ニーズに合えばボランティアとして若干行政機関を補完するような役割を果たしてもいいのではないかと考えることもできます。ボランティアに対するいろいろな期待があるのではないかと思います。

今後のボランティアへの期待についていえば、現状を見ますと全国的な広がりが十分ではないとうことがあります。札幌、東京、福岡、北九州など、大都市にはすごくいいボランティア団体

がある。そもそもこのセミナーなどは、研究の一環として実施しているわけですけれども、日本障害者リハビリテーション協会が実施している研究により全国に非常に多くのボランティアの方が活動されているのがわかりました。でも地方都市は十分やれていないわけです。病院は出たけれどどうしていいかわからない。ずっと自宅にいるという障害のある方もやはりおられました。そういうことを考えると、全国的な広がりがいるのではないかと思います。

もう一つは一定の質の確保がいるのではないかということです。ボランティアですので質は問わないかというとそうでもなくて、やはり先ほどお話の中に出ていましたように、医療的な知識などがないとボランティアをやって怪我をさせてしまうとか、病気を重くしてしまうということもあります。やはり一定の質の確保をする必要があろうと思います。

また高度なボランティアもあってもいいのではないかと思います。私たちが非常にほしいと思っているのは、必要に応じてハードとかソフトをすぐ作ってくれるような人がいないだろうかということです。これを市場に求めるのはたぶん無理だと思うんですね。なぜかと言いますと、そんなことができる人ならきっと一般の企業でばりばり働けるんだと思います。そういう人を雇うとすると、たとえば年間2,000万円とか3,000万円とか必要になると思うんですね。そうすると、そういう方でも余暇を生かしてボランティアとして活躍いただける可能性もあるのではないかと思います。

それから、これは職業センターなどと共同で支援していただきたいと思うのですが、職業的な支援を可能にする技術や要員を提供できるシステムがないのです。私がボランティアとして企業に行って土曜日に利用者の技術支援をしているような状態は異常でして、そういったことはやはり職業センターで、もっと高度なジョブコーチを作ればどうかと思います。

それから信頼性の高い支援を提供できるシステムが必要です。そういうものもボランティアであっても構わないのではないかと思います。

あとは継続的に支援できるシステムも必要なのではないかと思います。

最後に、地域での連携が一番大切ではないかと思います。多様なボランティアの方がボランティアをしたいと思っているのに、それを受け入れるシステムが十分にない。企業、公的機関であるとか、ボランティアが連携をとってその地域の障害のある方々の支援をできないのだろうか。たとえば、病院から切れてしまわないように、病院にいるときからボランティアの人が参加するとか、それを公的機関が支援するとか、さらに、必要に応じて企業が採算に乗る部分を負担するとか、そういうふうな連携ができないのだろうかと考えております。

時間がないので端折ってしまいますけれども、こういった役割分担等を地域で行えないかというふうなことを考えております。

以上で終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

望月：　ありがとうございました。
この会はもちろんIT支援、ITによる障害者の支援なのですけれども、元来ね、ボランティアというところにフォーカスしたい会なんですよね。そこで最後に寺島さんがそのボランティアの視点からいろいろ発表してくれました。
さて、この時間は意見交換の時間です。今の3名の話題提供をいただいて、ちょっと会場から、質問でなくてもいいんです。ご意見でも質問でも構いませんので、どなたか発言したい方はいらっしゃいますでしょうか。

会場：　川崎市の視力障害者福祉協会の志子田と申します。視力障害者なので視力障害者関係のことでお尋ねしたいのですが、私も現在パソコンを使っているのですが、特に中途で高齢になって視覚障害になられた方で、やはりパソコンを使うのがなかなか厳しいというケースが多いような印象を受けています。
その原因というか、その理由の一つに、フルキーを使うことに対する抵抗といいましょうか、たとえばフルキーを覚えなくてはならないということと、以前はですね、いや現在も多少はあるのですが、六点、点字の入力ができるパソコンもあるのですが、それがだんだんもうなくなってきているという現実があるのですけれど、やはり私が思うには、多くの視覚障害者、特に中途で高齢で視覚障害になった方が今後いろいろな情報を自分に得るためには、やはりインターネットの活用というのはどうしても必要なのではないかなと思うのですが、そのときにやはり、点字というのはいわゆる6つの点の組み合わせなのでフルキーを覚えるよりは簡単なのかなと思うのですが、そういう、視覚障害者のパソコン利用の中で、点字の入力ということでどのようなことをお考えなのかお聞かせください。すみません、長くなりました。

望月：　わかりました。かなり専門的な話なのであまり突っ込むと、他の視覚障害以外の人には何も面白くない話題になってしまうので、ただ一応基礎知識としてお知らせしますけれど、パソコンのキーボードの上のある点を点字のキータイプライターのように見立てて、パソコンのキーで点字入力というのができるソフトがあります。さっきの寺島さんが作ったソフトもできます。それで点字方式で入力するのが今、志子田さんがおっしゃった入力方式です。それと、フルキーというのは普通に入力する方式。この2つの方法が視覚障害者にはもちろんできるわけですけれども、それで志子田さんは点字のほうが楽なんじゃないかというご意見のようだったのですが、ちょっといくつか話題提供班の中からこのことについて発言してください。

三崎：　三崎です。私が関わった事例で、視覚障害者のためのパソコン教室を開いたときに、いらした方がほとんど高齢者ばかりでした。中に80歳くらいの方がいらしていて、女の方で、今まで俳句を自分で投稿していたのだけれども、目が見えなくなったのでできなくなった。それをもう1回取り戻したいということを言われて、やはりキーボードを覚えていないのですよね。何かうまい方法を教えろとずっと言われてきて。私はこんなに元気そうだけど実はいつ死んでもおかしくないから、ちゃんと教えないともういなくなっちゃうぞということを言われて、私もいろいろ考えていたのですけれども、点字入力という方法は、基本的に6つのキーしか使わないんですね。ですから非常に覚えやすいんです。ところが、先ほど質問者の方が言われていたように、そういう方法を受け付けないようなキーボードが増えてきているということがあって、そのときはなんとかなったのかな。なんとか工夫して点字入力をできるようにしたんです。それは、点字入力専門というか、点字ワープロを練習してもらってその場をしのいだんですね。それは漢字になりませんからちょっと困ったなと思っていたのですが、そのIT教室が終わった後で、盲学校の生徒が全盲の生徒の支援に行って、1か月くらいでフルキーボードを打てるようになってしま

ったということがあります。これは、なにかとっかかりさえあればなんとかなるかもわからないという話です。

もう一つは、これは高齢の方の例ではありませんけれども、盲学校でやった件なのですが、肢体不自由の支援で使うキーボードに、携帯電話と同じデザインのKeiboardというのがあります。ご存じですかね、Keiboardを知っている方、いらっしゃいます？　このKeiboardは、スクリーンリーダーにも乗るとされていまして、これを使うと、携帯電話のキーボードが打てない方はたぶんいないと思うので、これで入力ができるようになります。
もう一つは、知的な片麻痺の全盲の方に少し適用してみたのですが、市販の五十音配列のキーボードがあります、小型の。これであれば、五十音の配列が頭に入っていれば打てますので、あとは音声で読んでくれれば自分が何を押したのかがわかるので、わかりやすいのではないかと思います。
ここで重要な視点は、視覚障害者の入力とかいろいろな支援を、その枠の中で考えないで、もう少しいろんな方と交流すると、使えるものが他の障害のところにあるぞ、という話だと思います。

望月：　ありがとうございました。
他の質問がある方はいらっしゃいますか？

会場：問題提起といいますか悩みといいますか、埼玉県障害者ITサポートセンターの増田と申します。日頃、寺島先生にはたいへんお世話になっておりまして、それからアメディアのメーリングリストなんかもいつも拝見して勉強させていただいて、ありがとうございます。
先ほどの、寺島先生の話とか河村先生の話の中にも出てきた問題との共通的な部分があるのですけれども、私どもがサポートさせていただいている中で、高齢者で非常に熱心に依頼をされている方が多くなってきているのですけれども、その中でも弱視から視覚障害がきつくなってきている、一方で肢体障害が併発というか重複障害といいますか、そういう方にサポートをやってもらうところはあるかというような話はあったのですが、そういう例が非常に多くなってきております。私どもがサポートをさせてもらうのに、最近の例では20回くらいやってもなかなか進歩がない。本人は非常に意欲がある。その方の例ですと、弱視なものですから画面を拡大しながら、それだけでは心もとないので、音声ソフトを併用して、かつ左手が使えないものですからちょっと特殊なマウス、マウスといいますかトラックボールですね、大きめのトラックボールを左手で使うというようなことで、文字入力から最近は年賀状を教えてほしいというようなことで、20回やってもなかなか年賀状まで行かないということで、ボランティアもちょっと疲れてきてしまってですね、いったいいつまでやったらいいのだろうという、そうかといって本人は最終的にはメールからインターネットもやりたい。一方、住まわれている環境はダイヤルアップしかできないというような環境の中で、これからどうしていったらいいのだろう、と。そういう方の依頼がこれから増えつつあるというような感じがありまして、日夜悩んでといいますか、悩ましい状況なのですけれども、なにかのヒントといいますか、示唆をいただけたらありがたいな、と。すみません、長くなりまして。ありがとうございます。

望月：　ありがとうございます。今の方の問題提起につきまして、なにかご意見、ご示唆をいただける方はいますか？
この後、コメンテーターというのがまだいましてですね。コメンテーターのコメントをお願いすることになっているのですが、そのお一人に札幌チャレンジドの加納さんという方がいらっし

ゃいます。今のようなケースは、きっと加納さんもたくさん出くわしていらっしゃるのではないかと思うので、コメントも含めて、このことに対するご意見と、ご自分のコメントを一緒にお願いしてしまっていいですか。

加納：　初めまして。札幌からまいりましたNPO法人札幌チャレンジドの事務局長をしております加納と申します。よろしくお願いします。
まず、最初に今の方のご質問だったのですけれども、やはり一人一人違いますよね。5回でできることができる人もいれば、それが10回かかる人もいるし、とにかく一人一人と、その人に合ったというか、その人のペースであったりその人の能力であったり、そこにとにかくその人と向き合うということしかないのかな、と思うんですね。ただ、やり方によって理解力とか身につくものが変わることはあるかもしれないので、こういうふうなやり方をやっているんだけどなかなかうまくいかないんだよねというときに一人で悩まないで、たとえば札幌チャレンジドのボランティアさんがそういう立場だったとしたら、私たちに相談してもらって、僕たちで「じゃあ、今度はこういうふうにやってみたら」とか、そういうアドバイスをしてあげるということかなと思います。

今日私はコメンテーターという立場なので札幌チャレンジドの話は、お手元に後から配らせていただきましたが、札幌チャレンジドというのは障害のある方にパソコンとかインターネットをお教えして、障害者の方の社会参加とか就労を支援しているNPOです。できて今7年目です。7年前、できたときは何にもないんですね。とにかくあるのは、皆さんもそうだったと思うのですが、やる気のある人がいるだけ。最初は、月に1回、大学のパソコン教室を借りて、そこに障害のある方に来ていただいてパソコンをお教えするというところからスタートしました。1年目は年間でも延べ100人くらいの人にお教えしたのですが、それからどんどんどんどん受講したい方が増えていって、今は、2年くらい前からは年間延べ2,000人の方が学んでおられて、毎日午前午後、常設のパソコン講習会場を自分たちで運営して、そこでパソコンをお教えしています。
私はいわゆるパソコンボランティア団体の運営者という立場からちょっとコメントをさせていただきますと、今日基調講演ですとか話題提供者の方のお話を聞いていて、自分なりに3つのキーワードを考えてみたのですが、まず1つ目はコミュニティ、2つ目が連携、3つ目ができること、これについて簡単にコメントさせてもらうと、生活支援だとか人と人とのお付き合いという話がいろいろ出ていたのですが、本当にそうだなと思っていて、自分たちがこの団体を運営してきて、たまたま7年間でこれだけある意味大きくなって、いろいろな人に喜んでいただけた、一番、敢えて一つ、何がよかったか、何ができたからかということを考えてみたら、コミュニティを作れた。コミュニティというのは、雰囲気ですとか、心の触れ合う場とか、においとか、そういう言葉で置き換えられると思うのですね。もうちょっと言葉を正しく使うと、ユニバーサルなコミュニティ。決して障害のある人だけが集まってそこで障害のある人同士が場を作るのではなくて、ボランティアさんやいろんな方が一緒に集まって、そこでまさにユニバーサル、障害の有る無しに関係なく、そこのコミュニティが、そして楽しかった。楽しい場がそこにあった。確かにパソコンを教えているのですが、私たちのパソコン教室に来ることが、楽しいんですね。だから、パソコンの理解がなかなか覚束ない人も、また習いにくるわけですよ。その積み重ねが、今やっている延べ2,000人になっているのだろう。

河村先生のペーパーを見ていて非常に今日嬉しかったというか感動していたのですが、「共生社会」という、私が普段考えているキーワードが河村先生の今日のお話の中にいくつかあったの

でちょっとかぶせて話をしていきますと、「こんなコミュニティを作ろう」ということがまず一つと、「連携」ということが、このセミナー自身のテーマの説明の中にも書いてありますし、よりよい支援を実現していくためにこの連携というのはすごく重要で、正しく説明していくと、私たち団体、ボランティア団体がやっていることって、「公共」だと思いません？　皆さん。決して公共は行政だけがやる時代ではなくて、今、世の中には行政ができない公共、手の届かない公共、企業も手の届かない公共というのがいっぱいあって、市民活動というのはそもそも、それを市民が自発的にやっているわけですね。言い方を変えれば、公共を担っているのだからこそ行政との連携というのがまずとても実は重要です。
札幌チャレンジドは札幌市障害者ITサポートセンターというのを3年くらい前からやらせていただいています。
話すと長くなるので一つ、行政との連携の考え方で最近いつも人前で私が言うのは、入口は行政事業、出口は民間事業。こういう考え方で、行政がやる公共と、民間がやる公共を、いかに一緒くちゃにしちゃうか、ガラガラポンするかということが重要で、行政はこれをやっています、NPOはこれをやっています、縦割り、つながっていないで、全然それでは社会サービスとして成り立たないですね。社会サービスなんです、両方合わせて。そういうことをちょっと考えてやっていければいいかなと。

あと、連携についてはもう一つ、最近重度障害者の支援も特に一所懸命今やろうとしている中で、作業療法士さんとの連携というのがすごく切実に必要だと思っていまして、今病院回りなんかも徐々に始めているのですが、そういったところの連携というものを、この後のディスカッションの中でも具体的にどうやったらその連携が進むのかということを入れていただきたいなと思っています。
それと最後に、就労支援も一所懸命やっています。その中で特に思うのは、障害者の方のできることにいかに目を向けるか。仕事とか、なにか働くということに、それができるかできないか、向いているか向いていないかというのはやってみないとわからないですよね。これは別に障害のある方に限らず、みんな人だったら同じじゃないですか。そのときに、僕たちが今一番この就労支援の中で考えているのは、いかに選択肢を増やすか。だって、札幌チャレンジドのやっている仕事はこれとこれしかありませんと言ったら、それができなかったら私たちはもうその人の就労は支援できないんですよね。いろいろなことを僕たちがメニューとして就労支援をやっていれば、これをやってもらった、これはちょっと性格的に合わなかったね、じゃあこっちをやってごらんよ。合うかもしれない。お手元に渡したペーパーにも就労支援として細かくは一つ一つ言いませんが、いろいろなことをやっていますし、私は、もっととにかく一つ一つ積み重ねて、どれだけたくさんの働くチャンス、機会を作るかということが重要だと思うんです。
それさえ作れば、きっと一人一人、合うものが出てくるはずなのだと思っているので、ボランティア団体としてはそんなことを考えながらやっています。
とりあえず、最初の挨拶はこのあたりで。
ありがとうございます。

望月：　ありがとうございました。
すみません、質問に答えていただいた流れで一気にやっていただきましたけど。
それではもう一人、コメンテーターをお願いしております。
湯汲さんですね、精神発達障害指導教育協会の常務理事の湯汲さんにお願いします。

湯汲：　ただいまご紹介にあずかりました、発達協会の常務理事で言語聴覚士の湯汲と申しま

す。知的障害を持つ子たちと付き合って31年経ちます。知的障害の分野とITとあまり関係がないように思われるかも知れませんけれど、いくつかのエピソードを話ながら僕たちの期待をお話します。

金曜日に僕がクリニックで担当したお子さん、中学校1年生です。IQは36です。医学的に言うと重度障害者です。この子が言っていることは、本当に3歳にもならない、3歳初めくらいの会話能力ですけれども、インターネットでゲームを探し出す。インターネットで世界の果てまで見にいく。僕たちが考えている知能、あるいはその障害というので、IQという知能指数を計る道具は、もう合わない状況になってきています。人間の脳って、知能って何なんだろうというのを考えさせられます。IQ値で計れない能力が彼の中にはあって、言語能力でもよくわからない。でもどうしてか。お父さんともお母さんとも話してみて、「すごいですね」で終わるのではなくて、なんでこの子はわかるんだろうと考えましたら、学習のしかたが違うんです。そういう話をしています。ちなみにこのお子さんは4人兄弟なんですけれども、2番目のお兄ちゃんなのですけれども、4人の中で最も詳しいそうです。

こういう現象は、6～7年前にはありませんでした。知的障害を持つ人がインターネットの世界に入ってどんどん自分のほしい知識を吸収するという姿は、この革命的な情報機器の発展によって、発達によってなされていると思います。人類が初めて見る光景だと思うんですね。
30年前に、たとえばレストランに行きます。文字で書かれたメニューしかなかった。フランス語で書いてあったりしました。ホテルでも英語で書いてあったりして、何がなんだかわからないというのがある。ところが、もう10年くらい前から、絵で、写真でメニューが出されるようになった。現在知的障害を持つ青年たち、大人の方たち、居酒屋へ行って、カラオケ屋へ行って、歌ったりお酒を飲んだりしています。これは全部メニューのお蔭です。情報伝達の方法が変わったことによって、活動や参加の幅が大きく広がってきているのは確かです。こういうふうに「見える化」していくことがとても重要なポイントになっていくのだろうと思います。

来週、3歳5か月の男の子が訓練にやってきます。この子はちょうど2歳代の後半の発達レベルです。ここでお話してもなかなかわかりづらいと思いますけれど、2歳と3歳は大きく違いまして、3歳はたとえば順番が待てるとか、見えないルールは理解できるようになります。あと、2とか3がわかります。2とか3というのは存在しません。リンゴとか人を数えるときに初めて出てくるもので、非常に抽象的な概念です。子どもはこの時期に、クルマ、自動車から乗り物という概念を獲得します。3歳です。乗り物というのはありません。自動車とか自転車とか三輪車とかそういうものの総称、ひっくるめて分類するために作られた言葉です。乗り物、食べ物、果物、飲料、こういうのも全部抽象語です。
先ほど言いました3歳5か月の男の子は、この手前にいます。この見えないものが見えるようになるかどうかが、知的障害になるかどうかの大きな境目になります。見えないものが見えるようにできたならば、わかるようになったらば、知的障害が発生しない可能性は非常に高い。3歳5か月の男の子、僕たちが今までいろいろと研究してきましたら、丸が描けると、マウスが操作できる。丸が描けるとマウスが操作できて、さまざまな教材のソフトが利用できる。ただ、現在その利用できるソフトそのものが発達そのものを理解して作られているものではありませんのでまだ十分ではありませんけれども、だんだん淘汰されてきていまして、エンターテインメントという言葉でCD-ROMで出ていますけれども、だんだん淘汰されてきていて少しずつ現場で使えていくようなソフトになりつつあります。

最後になりますけれども、現在知的障害を伴わない発達障害の人たちの問題が種々言われています。毎日のようにテレビとか新聞、雑誌に取り上げられています。知的障害を伴わない発達障害の人は、一説では6%、あるいは7%いるとされています。知的障害を持つ人が1%です。合わせると7%、8%、この人たちが何らかの発達障害を持ちつつあります。現在日本では60万から70万人のNEETと呼ばれる人たちがいるとされています。仕事にも就こうとしない、勉強もしたくない、引きこもってしまう、そういう人たちです。そういう人たちが60万から70万人。このうちの4分の1が、何らかの発達障害があるとされています。
先ほども言いましたけれど、発達していくということは、あらかじめ決められています。歩き始めは1歳3か月。みんなといっしょにジャンケンポンがわかるのは4歳半ばくらい。数、文字に興味を示してわかるようになって書けたりするのは5歳から6歳というふうに、発達はちゃんと順序性が決まっています。ところが、発達障害、知的障害の子たち、あるいは人たちは、どうもどこかで止まってしまって、そこから先へ進めない。なぜ進めないのか。

人間の脳は、時間とともに変わっていくようになってくる。ニューソフトにどんどんバージョンアップしていくようになっているわけですね。ところが、どうもそこがうまく働かない。今までいろいろな形で特殊教育、いろいろなものが行われてきましたけれど、ひょっとしたらこのITが、人間の脳の成熟、成長を助けるための意外な道具になる可能性があるかと思います。また併せて、先ほど金沢さんの方からありました、目の見えないという人たちの、非常に一人一人違う個別性の問題ですね、今やっと人間の知能の個別性という問題がクローズアップされつつあると思います。

最後になりましたけれど、この知的障害を持つ子どものお母さんたちは、お父さんたちは、とっても大変な思いをしています。日本はとても親に対して冷たい。お母さんたちに対して冷たくて、どうやって育てていったらいいかをちゃんと教えない国です。先進諸国の中では極めて稀な国です。お母さんになった途端に、もう100%の母親を要求されます。今、女子高校生のうち、7割近くは18歳まで、おむつもお風呂もおっぱいもミルクも、子ども、赤ちゃんにあげた経験がないとされます。突然子どもが生まれたら、それもなおかつ障害があって、100%の母親になれっていうのが日本で、ぜひともこのITを使って育児支援、このことが虐待防止にも非常につながっていくと思います。こういうところにもぜひとも視点を広げていただいて、皆さんの発達障害、知的障害の子ども本人、それから家族の役に立つような情報をお伝えいただければと思います。以上です。

望月：　ありがとうございました。すごく勉強になりました、ありがとうございます。
今、湯汲さんから知的障害関係のお話をうかがいましたけれども、さて、もう時間が僅かなのですが、ほんの少し皆さんとまた意見交換を行いたいのですが、なにせちょっと話題の幅が広すぎて。一つだけ、加納さんから問題提起のあった、作業療法士と加納さんはおっしゃって、これはもっとちょっと広く考えて医療関係者ととらえてもいいですか？
この中に、医療関係の方はいらっしゃいますか。医療関係の方、いない。このこと自体が問題なんだな。連携できていない、情報が伝わっていない。
我々、基本的には福祉関係ですよね、多くがね。福祉関係の人間と、もちろん当事者もいますが、医療関係の人たちとの連携について何か示唆をいただけるような考えを持っている方はいらっしゃるでしょうか。

田中：　先ほどしゃべらせてもらった、唯一作業療法士でここに参加している田中です。そうい

うことで、今言われたように、こういうところにも医療関係の人間が本当は出ないといけないと思うんですね。それは作業療法士協会で少し考えていかなくちゃ、というのが今始まったところなんですね。先ほども僕のスライドの中でも入れましたけれど、ITサポートセンターとかそういうところと、我々地域に出ている作業療法士、あるいは病院との関係を高めていって、それで在宅でおられる障害をお持ちの方のIT支援を考えていかなくちゃ、ということを始めたところなんですね。OT協会の組織の中でもやっとできたばかりで、これからどんどん高めたいと思っています。僕が最後に説明したスライドの中で、コミュニケーション支援、用具のネットワークは、お医者さんも、リハビリテーションも入っています。リハビリテーションの医者、僕ら、業者さんも入っているそういう研究会も作っていますので、これからだと思いますが、よろしくお願いします。

寺島：　地方のほうの動きというのはどうなんですか。東京だけですか、それとも全国的に部会が波及しているのでしょうか。

田中：ITサポート委員会というのがありまして、それは一応僕がリーダーになっていて、あっちこっちスタッフを入れています。地方でも入れていますので、これからどんどん広がっていくかと思います。

望月：　田中先生、ありがとうございました。
実は今、加納さんがそういう作業療法士との連携ということをおっしゃって、たまたま、たまたまというか、田中先生みたいな作業療法士の方を最初のシンポジストに選んでいたのだから素晴らしいのですけれども、今、田中先生は作業療法士として発言されたので、「もっと出なければ」とおっしゃったけど、逆に言うと我々、こういうセミナーを主催する側からは、なんで作業療法士にもっと声をかけなかったのだということにもなりますよね。つまりプロモーションの問題というか。私はビジネスをやっていますから、ビジネスは集客、お客さんを集めるのは戦略上というか、最初からそれをどのくらい意識していたかによるんですよね。ちゃんと声をかければたぶん大勢、それなりに大勢来たはずだと思うので、むしろ我々が今度こういうセミナーとかなんかをやるときにどんどんどんどんアプローチしていけばいいのかな、というふうに今思いました。
さて、では他の話題で何かちょっと発言されたい方、いらっしゃったら、どうぞ。

会場：　私、岩手県立視聴覚障害者情報センターの佐々木昌広と申します。
医療関係者のほうなんですが、やっとうちのほうでもですね、実はその前に岩手県立社会福祉協議会のふれあいランド岩手のほうで、岩手県身体障害者パソコンサポーター養成派遣事業、今もやっているのですが、その養成講座の中で平成15年10月1日に始まって、今年度になってやっと作業療法士の先生を養成講座に迎えることができたというようなことになっております。
先に10月に札幌で行われたほうにも、岩手県のほうから参加されたと思いますけれども、実はその成果をいただいて11月に養成講座をやってもらいましたので、ちょっとそのことは一言付け加えておきます。

岩手県のほうでも、これからお話するのはですね、地域の連携というか、こちらのほうの持っている問題自体があるのですが、先ほどボランティアという専門性のほうでいろいろ付け加えていいのだというお話がありましたが、うちのほうでも平成15年から始めて百数名のボランティアさんがいるのですが、実働は30～40名、いろいろと家庭的な都合もありますけれども。

実は一つ問題がありまして、サポートを依頼する方とサポーターの方の間のデジタルデバイドが出てきてしまった。特に視覚障害者支援のほうですと、岩手県のほうですと MS-Basic のほうから、これは望月さん、いろいろとご存じのかたはいると思いますけれども、そういったところからやっていますので、もう自分らでもサポート体制を実は作っていたというところがあります。そういった関係で、自分らのできることということでこちらのほうのボランティア活動に参加しますが、最初のうちは来てくれますけれども、だんだんサポートをやっていくうちに、依頼者のほうのレベルにだんだんサポートする側がついていけなくなった。ですから、こちらのほうでそれを、公的機関ですけれどもそういったところの差をなくするにはどのようにするかというのを、ちょっと今悩んでおります。

そういったことが実は出てき始めて、あと岩手県のほうだけの問題かもしれませんけれども、ボランティアというのはたとえばパソコンの設定とか、いろいろとありますけれども、それだと「地域の電気屋さんさ頼んだらいいべ」と。「おらもうここまでしかやらね」と。ちょっと方言入れましたけれども、そういったようなのがちょっとやっぱり出てきています。「もうこれ以上は電気屋さんに任せるべ」と。それで結局は地域の電気屋さんはやってくれるのかというと、先ほどの視覚障害者の方の例もありますけれども、やってくれないから結局はもう自分らでやる。こちらのほうで対応できなければ、今どうなっているかというと、Skype を使って、特に視覚障害者の方のほうはそうですが、県外へ越えちゃってるんですね。だから通常のパソコンサポーターは岩手県の場合ですと、実は京都の人でした、とかですね。こちらのほうも、茨城県のある方と Skype を通じていろいろ情報交換をしていますけれども、やはり地方のほうではなかなかちょっと都会のほうとはまた違うような面があるよ、ということをちょっと言いたいと思います。以上です。

望月：　ありがとうございました。
でもね、利用者がそんなに成長しているのだったら素晴らしいじゃないですか。成功例ですよね。ちょっと今、岩手の実例も聞かせていただいて、何かこれに関連してこちらで発言する方はいらっしゃいますか。

寺島：　岩手大学とか、工学部とかあるはずなんですけれども、そのへんへのアプローチなんかはどうなんでしょう。

会場：　先ほど言いましたように、養成講座の先生は、ご存じの方も多いと思いますが、岩手県立大学の社会福祉学部の米本清先生にやってもらっています。ところがですね、先ほどの岩手大学のは、実は今年新潟のほうの自立生活支援プラザの方がきて、岩手大学にやったけれども、そんな先生はいませんねと言われました。社会福祉工学科はあります。だけれども、そういった IT 関係のとか、それは専門ではないというようなことで、結局は県立大学の先生を呼ぶような形になっています。ですから今、岩手県のほうで、大学でやっているといったら先ほど言った県立大学の社会福祉学部の米本清先生しかいない。あと小川先生もいらっしゃいます。今そういった状況です。

寺島：　東京に限らないと思うのですが、私が養護学校にいたころは、高校生や卒業した大学生がずいぶん地域の支援をやっていました。サークルを作って、視覚障害者の方のところへ行ったりとか、あるいは集まっているところへ行って教えるというのをやっていましたね。
だから、盲学校の、若い人たちは非常に得意ですから、そういう人に支援を手伝ってもらうとい

うのもありかなと思いますが、そういうことはないですか。
それから、力をつけた方は、ある程度自分で教える側にもまわってもらうという発想はありますよね。

会場：　最初授業を始めたときは、視覚障害者もけっこう入ったんですね。でもなかなか依頼を出さないんですね。後で聞いてみたら、視覚障害者福祉協会に聞いてみたら、「佐々木さん、それについてはみんな教えてらんだ」と言われました。ですから、サポーターに回ってもらっています。

望月：　いいですね。はい、ありがとうございました。
そういったいろんな事例がありますけれども、その他にこう、支援、IT による支援の関係で面白い事例とか、あるいは何かご意見等ございますでしょうか。

会場：　一言だけ提案をさせていただきます。
私は NPO の夢のマネージメント社ということで、今、オレオレ詐欺の対応をしていますが、「もしもし、私息子で事故を起こしました」というと、心が真っ白になるという状況があります。この心の世界という概念が、今もずっと聞いていましたが、この概念がはっきりすると、障害を持っていようが目が見えようが、みんな誰もが心の世界というものを持っていて、その中でいろいろコミュニケーションがあったりするわけです。この心の世界という概念のベースを確立すると、このコミュニケーションの話というのはうまくいくかなと思っております。今寸劇で、この心の世界にお仲間が入る。コミュニケーションする、信頼のおける顔の見える仲間が入ると助かりますよという寸劇で、仲間ですがね、人間の持っている群のプログラムを生かすというところで、心の世界という概念を定着させようと思っていますので、そんなことをちょっとご紹介を。

望月：　ありがとうございました。
確かに、ちょっとここの中ではなかなか話し合いにくいのですけれど、実際にはたとえば畠山先生のお話なんかは本当はそういう要素をすごく含んでいて。そういう角度から話してほしいと言ったらたぶんお話できるのではないかなと思いながら聞いていましたけどね。本当に我々はコミュニケーションをとるときには、相手の心、自分の心もそうですね、自分の心がいらつくと相手にいらつきのインパクトを与えちゃいますからね。だから本当に、自分の心と相手の心、これをやっぱりうまく追究できるといいのですけれど。なかなかちょっと違う角度の話になっちゃいますので。これについて何か、いいですか。

三崎：　よく心の教育という言葉がありますけれども、私はその言葉を聞くとヘンだなと思うんですよ。心以外になにを教育するんですか、という話がありますよね。そういう意味では、非常にあたりまえの話で大切な話だと思います。

河村：　河村ですけれども、今私のほうでは、災害のときにみんな頭が真っ白になってうまく対応できないということと、特に自閉症の方と精神障害の方が、事前に相当の準備をすれば、災害のときにもきちんと、いわゆるパニックなしに対応できるし、そのためにはかなり、私どもとしてはマルチメディアを使うのですけれども、IT の支援は有効であるという前提で今取り組みを進めています。
具体的には北海道の「べてるの家」という精神障害の方たちのグループがありまして、浦河町というところで津波の防災の取り組みを IT を使ってやって、ある程度成功しているだろうという

ふうに評価しています。また、重度の自閉症の方の場合にも、この、いろんなコンテンツの作り方があるのですけれども、ご自身で自閉症の研究者の方にも入っていただいて、どういうふうにするとわかりやすいのかという原理的なところを一緒に、ITを使って今研究開発をして、実際に試してみているところです。

そういう意味で、人がものを認識する、あるいは地震の直後に津波から逃げ出さなきゃいけないということで、本当に短い間に安全なところへ避難する、そのときに道をきちんと理解して退避するというような行動を考えたときに、先ほどおっしゃったような心の問題というのが非常に重要で、やはりそこまで踏み込んでまちづくりをしていくというときに、ITはまた有効な支援ができるというふうに考えられると思います。

望月：　河村さんから非常にまとまったいいお話をうかがったところで、そろそろ時間になりました。最後に、前に出ている話題提供者の3名と、コメンテーターの2名の方に、本当に短く、約1分くらいで最後のコメントをお願いしたいと思います。では一番遠いほうからお願いしようかな。

湯汲：　今日は、とても勉強させていただきました。個別性の問題性とかですね、わかりやすい情報、あるいは道具をステップ台にして障害のある人たちを広い世界へ持ち込んで行こうというお話、非常に感動いたしました。ぜひとも、発達障害、あるいは発達障害の子どもたちや青年たちの家族に向けての何らかの支援をぜひともお願いしたいし、また本人のための生活支援ツールとしてのホームページ等もご検討いただきたいし、一緒に作っていけないかな、と思っています。

加納：　ありがとうございます。私もたいへん勉強になりました。
最後に一つ、こういう運営団体として最近さらにやっていることがあって、今講師はほとんどすべて障害のある方が講師になっています。具体的に8名の講師陣がいるのですが、従来は私たち事務局側が「Aさん、WORDの基礎やって」「Bさん、EXCELの応用やって」とか言って、講師を一人一人に、こっちでカリキュラムを決めてお願いしてずっとやっていたのですが、もう一歩踏み込もうということで、今は講師会議という会議体を作って、その会議でまさにチャレンジド8人が集まって、今どういうものが受講者として求められているのか、どういう講習をやろうか。そして講師同士の研修会を自ら自分たちで今、それぞれの講師が持っているやはり情報共有であったり知識共有みたいなことをやるということで、いかに市民活動というのは指示待ちではなくて主体的に参加できる運営をしていくか、そういう場を作っていくかということが重要であるということを私たちは今思っています。
そんなことを最後にご紹介して、どうもありがとうございました。

河村：　河村ですが、今日のお話をうかがっても非常に勉強になりまして、最後に頭に残っているのはデザインということです。デザインというのは多様なニーズに合わせて具体的に場、モノ、サービス、情報を提供していくということだと思います。一人一人の多様性ということの中に、やはり価値があるということが、だんだんとさまざまな、先ほどの発達障害について非常に重要なお話がありましたけれども、精神障害の方たちも認知の様式の中にも、やはりそれぞれのやり方がある、それぞれの特徴がある。その上で、社会生活をより生きやすくしていくための方法を一緒に考えていく。そのデザインというものが、やはり共生社会に本当に必要なのだなということを感じます。

そういう意味でも、ITの活用ということを皆さんと一緒にこれからも進めていきたいというふうに思いました。

寺島：　寺島です。やはり発達障害の方のお話をお聞きして非常に勉強になりまして、そろそろICT、ITも次のステップにかかってきたのかなと思いました。
これまでは、障害を補うというような観点からICT等があったのだろうと思いますけれども、今後は新たな文化を形成していくという、そういうふうなステップに入ってきたのかなという気がしました。そのときにやはり一番大切な忘れてはならないことというのは、やはり人権哲学といいますか、この間12月13日に権利条約が、国連の総会で認められましたけれども、そういう人権哲学なしにどんどん進んでいくと間違った方向に行く可能性もありますので、そういった人権哲学に基づく新しい文化の創造みたいなものがこれから必要なのではないかな、というふうに思いました。以上です。

三崎：　今のお話はすごく大きな話で、河村さんと続いて、新しい文化の創造といったような話につながってくるので、私は感銘を受けました。
ICTを活用することで、たとえば視覚障害者の方は視覚障害者同士でまとまっていろいろ支援し合うとやりやすいということがありますけれども、でも他の、ICTを使っての障害を越えたコミュニケーションが今始まっていて、たとえば今席の前のほうに電動車椅子に乗った方が2人いらっしゃって、一人の車椅子には携帯電話がついていて、もしかしたらFOMAかなと思うのですが、テレビ携帯電話、これを使うと全盲の人が町の中で歩いていて、自動販売機かなんかでどこにお茶があるかということを、今の電動車椅子に乗っている方がそれを見て、音声でしゃべって伝えることができるという支援が今進んでいますけれど、そういうことが可能になってきています。
我々支援する側も、障害にこだわらないというか、たとえば点字を、目が見えないから点字を使っている人はもちろん本当なのだけれども、点字を使っている人、あるいは音声が必要なユーザーという視点も持っていく。それから、障害のある方たちも、お互いの障害を越えて支援し合うというアイデアを、これからやっていくということがいいのではないかと思います。

望月：　皆さん、ありがとうございました。非常に、なかなか奥深いセミナーになったと思います。もともと私は自分自身が視覚障害なので、視覚障害者の文化ということはずいぶん前から自己主張していましたけれども、あまり視覚障害者の文化文化と言って自分で一般の人たちと壁を作っちゃいけないなというのは最近は思っていたのですが。ただ、お互いがお互いの文化を認め合って、それぞれの文化を発展させていくという姿が、一番本当はいい形なのではないかなと。今、本当に今日は私も湯汲さんの話から勉強させてもらって、発達障害の方々の文化の創造というものがITでできるのかも、新たにできあがっていくのかもしれないなというのを本当に思いました。
でも今日もいろいろな話があったので、1部から通算するといろいろな角度からの話がありました。ですから、ここに来場された皆さんは、それぞれ皆さん違う観点でいろいろ感じるところもあったり、いや違うのではないのかなと思うところがあったり、いろいろあると思います。でも、皆さんがそれぞれの方の心の中でとらえた新たな視点とか、あるいは一歩進んだ考え方、これから自分はこう生きるぞということがあれば、このセミナーは大成功かなとも思います。本当に皆さん、ありがとうございました。

当事者が考えるIT支援について

「精神障がい者へのIT支援」

伊藤　知之　浦河べてるの家

精神障害の方々はIT支援へのニーズはあるか？

精神障害を持つと物事を把握・判断する「認知」の機能に障がいを持つため、ある物事をしようとしたり、就労や家庭を築こうと思っても、幻聴・幻覚や「お客さん(疲れているときなどに頭の中に入ってくるマイナスの思考)」が邪魔をして、感情が爆発したり、被害妄想に襲われたりして、再発・入院になる場合もある。そういったものの補正の役割をIT機器・ソフトは担うと思うので精神障がい者にもITでの支援のニーズは十分にあるし、これから開拓されて欲しい分野である。

ITが精神障害の方々にどのように有効なのか。

IT(特にインターネットやDAISY)は映像・音などの複数の感覚から私達に情報として入って来る。認知の面でもより正確に情報として伝達されるので、私達精神障がい者にとっても非常に有益であると考える。

精神障害の方々はITをどのように活用しているか。

私の住む浦河ではDAISYを用い、津波警報が来たときの避難マニュアルを作成した。また、2月18日に行われたDAISYセミナーで、私は自分の病気・悩み・生きにくさを仲間や支援者も入って研究する試み「当事者研究」を映像と音声ナレーションの双方を用いて作成し発表した。このように複数の感覚に訴えることで、私達精神障がい者にありがちな認知のゆがみを少なくして他の人に伝えることができると考える。

IT支援者に心がけてほしいこと。

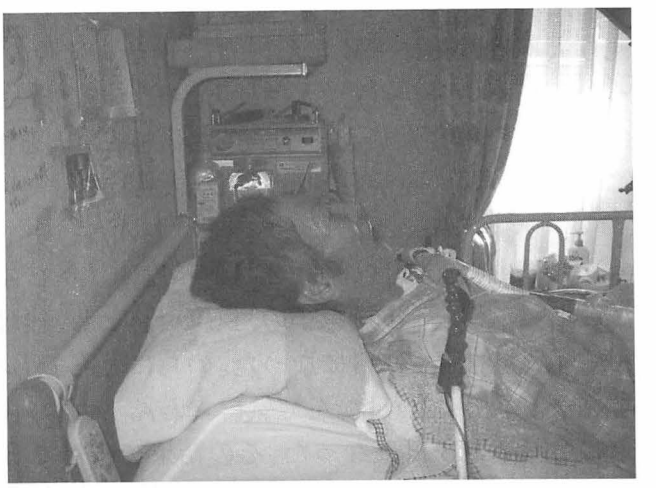
浦河ではよく「助けすぎない助け方」ということが言われる。援助が過剰になるとその人自身が持つ自分を助ける力を発揮する機会を奪ってしまうからである。よって、IT支援に限った事ではないのだが、私達精神障がい者に対しては、最初の取っ掛かりの基礎的な使用法だけを伝えてもらえれば、後は興味を持てば勝手に活用してくれて、思わぬ使い道が見つかったりする可能性も見つかるのではと思う。

2006年10月、大塚誠一氏を訪ねてお話を伺った。
大塚氏は平成8年10月、ALS（筋萎縮性側索硬化症）を発病。平成10年より都立神経病院リハビリテーション科の作業療法士、看護師の助言と協力を得て、パソコンを使うようになる。ボランティアがインターネットの接続等を支援。
平成１１年、寝たきりになる。現在は「伝の心」を利用し、あごを動かすことによりセンザーが感知して入力を行っている。大塚さんはパソコンを使って小説を書いたり、メールのやりとりを楽しんでいる。パソコンを使う前は生きる希望がなかったという大塚さんだが、現在はライフワークとして執筆活動にいそしんでいる。今回この事業の報告書作成のために、「パソコンと私」というテーマで執筆をお願いした。

「パソコンと私」

大塚　誠一

私は瞼が閉じにくくなった。文字盤では長い会話は難しいのでパソコンが活躍することなる。私共寝たきりの難病患者にとって「伝の心」は心強いものである。しかし、最近は目力（いわゆる眼力とは違う。）がなくなって長い時間パソコンを行うのは難しいです。以前は10時間位は出来たけど、今は３時間位が限度だ。パソコンは正午過ぎからやり始め、終わったら瞼を閉じている。好きなテレビ番組もあるがテレビは見ずに聴いている。それに私共寝たきりの難病患者にとって「伝の心」は大変便利だが、いかせん遅い。都立神経病院の某看護婦さんに「陽が暮れてしまう。」と皮肉られた。しかし、めげずに亀のようにゆっくりパソコンを行うしかなかった。又、メールも楽しいものです。私からメールを送信された人には迷惑をおかけしているのではないかとおもっています。「ちっ、大塚のじっちゃんからメールが来たよ。返信するのめんどうくさいなぁ。」私共にとってメールは外部との大事な通信手段です。私はホームページができません。それが出来れば幅も広がるとおもいます。ホームページは簡単だと聞いています。



最近初めて都立神経病院以外の私立の神経内科病院に入院しました。徹底した合理化、分業化にはびっくりしました。経官栄養を配る人、水分を配る人、吸引をする人、水切りをする人、その他等に分かれています。三週間程入院させて頂きましたが体を悪くして一度だけ風呂に入れてもらいました。風呂はストレッチャーの上で頭や体を洗った後「大塚さん、湯船に入ろう。」といわれ温まれるという期待感があった。トンネルみたいなところに入れられ上から、いくつかシャワーが出てきて一丁上がり。「自動車の洗車じゃあるまいし。」私はおもった。歯磨きもカテキン効果といって布かペーパータオルをペットボトルのお茶に浸し、口内を拭くだけ。持ち込み禁止。持ち込んでいいものは電池式ラジオとそれに付随するヘッドホーンと電池式髭剃り。いずれの電池式も持っていないので買った。おむつも持ち込み禁止。病院から買う。市町村から無償で供与を受けている者にとってはもったいない事だなぁ。国公立と違って私立は自ら稼がなくなければならない。狭いべっどが

食堂であり、居間であり、トイレでもあります。しかも他人にやってもらわなければならない。痒いところがあっても自らは掻けない。介護者に社交辞令をついつい口にしまうのはやもえないか？それも自分自身が生きていくのが精一杯なので今はやっていない。私の場合ベッドを離れるのは風呂に入るか、入退院の時です。難病患者本人とその家族が希望すれば何時までも入院できる公立の病院か施設を造って欲しい。それ等の建物はコスト（坪単価）が高い。そこに勤務する医師や看護師やリハビリや事務、その他の人々も必要になってくる。お金のかかることです。財源として新しく福祉目的税を設ける。購買力がなくなって景気が悪くなるという人もいるだろう。しかし、北欧のいくつかの国々は消費税は２５％を超えている。それ等の国が景気が悪いわけではない。でも選挙のことを考えるとどの政党も公約しないだろう。

私は自分が寝たきりの難病患者であるという事を忘れている時期があった。楽しかった。しかし、それは一年位しか続かなかった。その事はメルヘンの世界の話になってしまった。万が一、この病気（ALS）が直ったら私が住んでいる仙川の街を散策してみたい。随分変わったらしい。入退院の時、車から垣間見る事はできる。次が渋谷。私が若者だから！？私が元気な時は、まだ森ビルが六本木再開発地域として工事を行っていた現・六本木ヒルズも行ってみたい。私の好きな景色はレンボーブリッジから見下ろす景観です。初めて見た時はここはアメリカかとおもった。西新宿の高層ビル街も自動車で走ってみたい。高等学校（旧府立第三高等女学校：なんでこんな事を書くのかって？）の国語の授業で教科書に夏木立という字が目にはいった。先生が「夏木立から何を連想する？」とおしゃられたので私は大きな木を連想した。この夏木立が似合う大きな敷地を持つ家に住みたいとおもった。どれもこれも夢また夢。他の人は狭いベッドの上で何を考えているのだろう。私はとんでもないことを考えている。もし、私が地球上の絶対的な独裁者ならこんな事を行うという事を書いてみたい。読者の皆様は今暫くの我慢を。

まず、日本語以外を禁止する。英語で大分悩んだから。次に民族をなくす。人々を混血にする。抵抗もあるだろう。アラブとイスラエルは何千年争っているのだろう。青年同士の結婚となると舌を噛み切る若者もいるだろう。それでも私は民族を無くしたい。それと国境。人々は誰も好きなところに住める。その代わり、全ての人に背番号制をひく。大和民族も混血である。日本人の祖先の多くは北方からやって来た。バイカル湖辺りの人々が獲物のマンモスを求めて東へ東へと進んだ。当時ユーラシヤ大陸と樺太（サハリン）と北海道は地続きであった。氷河期に津軽海峡は凍り人々は本州に上陸した。一方、南からは今のインドネシアやフィリピンも大陸と地続きであったが島々に分かれた。人々は人が乗れるように丸太を削り（今のカヤックみたいなもの）、黒潮に乗って日本に着いた。明らかに南方系の人と解る人が入る。祖先が南方から来た人だろう。朝鮮半島や中国大陸からやって来た人もいた。

次に暦も変える。以前は２月が年度末（今でも韓国はそうだ。）だった。年度始めの３月を大の月（31 日）として４月を小の月（30 日）とし、後は大の月と小の月を順番に並べていき、年度末の２月は調整して 29 日になった。のちにとんでもない大王（名前は忘れた。）が出てきて「俺様の生まれた８月が小の月なんて気に食わん！大の月にしろ。」というわけで８月が３１日になり年度末の２月は 28 日になった。その結果一ヶ月で３日も違うという現象がおきた。私は大の月と小の月を適当に並べ年度末の２月も 30 日とする。御存知ように一年は地球の一公転だが、４年毎に閏年を設けて２月を 29 日として調整している。100 年か 400 年か忘れたが閏年であっても１日増やさず２月を 28 日として再調整している。余談だが月は一回の公転で一回自転している。したがって、私等地球人はいつも、月の同じ面を見ていることになるので常に、兎が餅をついている絵をみていることになる。旧暦（太陰暦）では 1、2、3 月が春で 4、5、6 月が夏で 7、8、

9月が秋、10、11、12月が冬である事は御存知の通りです。中秋の名月とは旧暦、秋の真ん中8月15日です。いわゆる十五夜です。これは暦上の真ん中であって必ずしも満月とは限らない。が、満月には近い。ちなみに十三夜は旧暦9月13日であることは御存知の通りです。偉そうな事を書きましたが、私は「方丈記」と「平家物語」をゴチャにする位なのです。次に数字の位取りを変える。日本語以外禁止なのだから日本語のゴロにあわせる。例えば、174,693,852,317,638今はこう書く。これを174,6938,5231,7638と書くようにする。これなら、頭から174兆6938億5231万7638と読める。何々、コンピュウターがあらゆる部門に入り込んでいる現在、難しいことだって？なにしろ、私は絶対的独裁者なのだ。というより私のたわごと。それから学制を改革する。6.3制はどうも気に食わない。学識経験者等の答申を待つが、私の出す条件は現在の中学二年生から高校二年生までの四年間を一つの学校とし、名称は小学校次第だが、中等学校か高等学校になる。女性徒のみの学校は中等女学校か高等女学校とする。大学院を現在の四年制と二年制を一つにして三年制として卒業生には修士号を与える。それ以外は小学校を何年制にするか何歳で入学しようが、又、大学を何年制にするかは又、短期大学をどうするかはどうでもよい。新しい寸法をつくる。

私共、寝たきりの人間は誰でもそうであるように誰かの助けが必要だ。私のパソコンは主に家内との二人三脚。毎回セットしてもらう。又、センサーが度々離れる。その度に直してもらう。「パソコンと私」を書くにあたり、文章が二回消えた。一回目が3,000字が消えた。二回目は2,500字が消えた。三回目からはフロッピーを入れるようにした。したがって三回目は突貫工事よろしく急いだ。元来、作文は苦手です。その上、時間がある程度過ぎると字がかすみ、感で打っていた。少子化、温暖化が問題になっている。温暖化については北極、南極の氷が豪快に溶け、海面があがり白熊、アザラシ、オットセイ、セイウチ、トドやペンギン等の生活がおびやかされている。都市においては自動車の排気ガス、商業ビル、住居からエアコンの熱風の排出、コンクリートジャングルでヒートアイランド現象を起こしている。アメリカのアル・ゴア氏が来日して温暖化について熱心に講演を行ったが、歴史にたらればはないがもし、彼が勝っていたらと考えてしまう。大接戦で最後に票が開くフロリダまでもちこされ、やはり接戦のすえジョージ・ブッシュ氏が勝った。しかし、日米関係を考えると民主党より共和党政権時代の方が日本とはうまくいっている。少子化については皆さんがおもっているように、若い夫婦が赤ちゃんを生める環境を整える事が必要だ。具体的には多くの保育所を造る。女性でも夜遅く子供を迎えに行かなければならない人もいるだろう。夜遅くまで営業している保育所が必要になってくる。ここでも財源は福祉目的税。保険の問題がなければ、私は日本の人口は2,000万位が良いとおもっている。日本は山又、山の山国で平野部が少ない。森林面積の国土面積に対する割合はカナダより多い。人口密度が高く、大都市に集中している。森の中に都市があるというのがいいなぁ。小鳥のさえずりで目が覚め、雨戸を開けると花の匂いが鼻を擽る。以前はカラスが制空権を握り、電線の上に一列横隊なんてことは毎日だった。今はカラスの鳴かない日もある。都でカラスを駆除しているのだろう。最近は小鳥のさえずりも戻って来た。

「パソコンと私」から随分話が離れてしまった。話を戻そう。今年(2007年)の9月で寝たきり8年になる。体は自由にならず、頭ばかり回転している。新聞や本を読まないので知識はふくらまず、逃げていくばかりで理屈を言うようになった。ホームページが出来るといいなぁ。パソコンの立ち上げに毎日協力してくれ、二人三脚で頑張ってくれた大プライマリーには感謝しています。パソコンがなかったら、私は毎日ウジウジしていたかもしれない。パソコン万歳！伝の心万歳！完

障害者 IT 支援に関する連携に向けて

神奈川県総合リハビリテーションセンター
「パソコンボランティアとリハビリテーション関係機関とのネットワーク」

松本　琢磨　神奈川県総合リハビリテーションセンター　作業療法士

1.はじめに

パソコンボランティアとリハビリテーション関係機関は、どのような協働作業ができるでしょうか。IT(Information Technology)に精通しているパソコンボランティア(以下、パソボラ)は、障害当事者(以下、対象者)の不自由さをハードウエアやソフトウエアなどの改善や工夫で対応することが得意でしょう。リハビリテーション関連スタッフ(以下、リハスタッフ)は、対象者の不自由さを身体機能や姿勢動作から治療介入することを専門としています。この両者が、対象者を中心に協力して支援できるとしたら、どんなに素晴らしいことでしょうか。このような理想を目指して、現在神奈川県で私たちが取り組んでいることを紹介したいと思います。またパソボラが私たちリハスタッフを理解して頂くために、リハの立場から大切にしていることをいくつか述べたいと思います。お互いの理解を深め、より良いネットワークが構築できる契機(きっかけ)にしたいと思います。

2.神奈川県でのITサポートの現状

神奈川県では、神奈川県社会福祉協議会「かながわともしびセンター」と神奈川県総合リハビリテーション事業団「神奈川県リハビリテーション支援センター」の2つの相談機関がITサポートの中心となっています。かながわともしびセンター内の障害者等ＩＴサロンでは、対象者やパソボラ個人、パソボラ団体に対して、(1)IT機器の展示と支援ソフトの体験、(2)アドバイスと情報提供、(3)IT機器等の貸出、(4)パソボラ団体の登録と派遣、(5)IT支援者研修の実施、(6)IT研修コーナーの提供　等を行っています。私たち神奈川県リハビリテーション支援センターでは、地域の医療・保健・福祉スタッフに対して、在宅重度障害者の生活支援機器の活用、住環境整備、福祉制度、社会資源の活用など、身近な地域機関では対応できない専門的な相談を協働で支援しています。この両機関が協力して、対象者のIT支援の実施、パソボラの派遣要請、IT支援問題を啓発する冊子「二次障害発生を予防するために」の発行、二次障害予防学習会の開催　等をおこなっています。

また障害者自立支援法施行に伴う補装具(重度障害者用意思伝達装置)支給に関して、判定機関である更生相談所(神奈川県総合療育相談センター)から神奈川県総合リハビリテーション事業団に判定協力を委託されています。これらの県機関と在宅重度障害者がより良いコミュニケーションがとれて適切なIT機器の支給に結びつくよう援助していきたいと思っています。

3.リハスタッフが出来ること

私たちリハスタッフは、患者自身が自分らしく生活するために「衣・食・住」すべての日常活動の獲得を目指して、治療訓練をおこなっています。例えば、食事や衣服の着替え、ベッドと車いすの乗り移りなど、患者が「こうやればできるんだ」と自信を持って安心した生活できるように、最大限の治療技術を提供しています。しかし、どうしても困難であったり危険がある場合には、代償的な方法として人的なサポートを受けたり、機器を利用するなど支援技術の利用をおこなっています。このような日常生活の全ての活動を支援している視点から、IT操作などのコミュニケーション活動を支援しています。私たちリハスタッフが対応できる具体的な内容を挙げたいと思います。

a. IT 機器を操作する身体部位が決まらない場合

私たちは対象者の身体に触れて一緒に動くことで、どれくらい動きがあるのか、どの方向が得意であるか、対象者の潜在能力がわかります。また顔や指先がわずかな動きを観察したり、筋肉の収縮を触診することができます。機器を操作する対象者の身体に支援者の手を添える技術（誘導）で、IT 操作をする身体部位の運動機能を高めたり、操作する入力装置を提案することができます。

b. 操作姿勢に問題があり、疲れてしまう場合

対象者の操作姿勢に無理や過剰な緊張が見られる場合、全身のアンバランスが生じて痛みや変形などの二次障害を発生させることがあります。対象者の適切な姿勢をみつけるとともに、車いすやベッドなど姿勢保持具や枕やテーブルなどの補助具の選定を提案することができます。

c. 道具が合わず、無理をしてしまう場合

対象者の身体機能に操作する道具があってない場合も、無理に頑張ることで二次障害が発生してしまいます。操作の可否だけで問うのではなく、長時間続けるとどうなるか「活動の質」を判断しながら、対象者の適切な道具の選定を提案することができます。

以上のように、姿勢からコミュニケーション活動を支援することは大切です。コミュニケーション活動は姿勢との関連が深いため、安定した姿勢がとれて対象者の潜在能力が発揮できるように支援することが大切です。姿勢が上手に保てる時は活動がうまくいき、活動がうまくいくときは姿勢が上手に保たれています。そのため姿勢と活動を同時に支援する必要があります。適切な活動環境が提供できて、適切な支援者としての介在ができるように心がけることが大切と思います

4. リハスタッフに相談したい場合

現在 IT 支援を実践している、業務として対応できるリハスタッフは非常に少ない状況です。そういったなかで、お互いが協働する機会を作るのさえも困難な状況といえます。そんな状況を打破すべく、日本作業療法士協会では「IT 利活用支援のあり方に関する研究会」を設置したり、「コミュニケーション支援技術講習会」などを開催して、IT 支援の重要性や役割をリハスタッフへ伝えていくことが数年前から始まっています。またパソボラの中には、「目の前にいる対象者を何とかしたい！」「IT 操作や姿勢に悩んでいる！」など、対象者の医学的問題に直面している方もいると思います。リハスタッフに相談したい場合に、どんな手段があるでしょうか。

a. 対象者を担当している（担当していた）リハスタッフへ相談する

対象者の担当リハスタッフがいる場合は、対象者の承諾のもとに姿勢や動作について相談に乗ってくれやすいと思います。IT 支援に精通していない場合でも具体的な操作姿勢や動作を見てもらうことができると思います。業務外での対応となれば、あくまでもボランティアとなりますので、担当リハスタッフの承諾が必要となります。

b. 知り合いのリハスタッフへ相談する

セミナーや講習会などで、IT 支援を実践していたり、興味を持っているリハスタッフと知り合いになれたら、相談相手に引き込むことができるでしょう。リハスタッフには定期的な姿勢動作のチェックをしてもらい、パソボラは日常的な支援を実施するなど、IT 支援の役割を分担しながら協働でおこなうことが理想と考えています。

c. 地域リハサービスの窓口へ相談する

障害を持つ方や高齢者が寝たきりになることを予防し、住み慣れた地域でその人らしく生活できるよう、在宅でのリハビリテーションが適切にうけられる支援体制ができています。前述した各都道府県および地域のリハビリテーション支援センターの設置が進んでいますので、窓口に相談してみてはいかがでしょうか。

d. 外来リハビリに受診した結果を聞く

医療機関の中には、IT 支援サービスや姿勢動作のチェックに対応できる外来リハビリもあります。対象者や家族が医療機関に相談のうえ、外来受診をしてみてはいかがでしょうか。その際、IT 支援でパソボラが関わっていることをリハスタッフに伝えてもらい、問題への対応策やコメントを聞いてもらうのはいかがでしょうか。今後、支援ネットワークに発展していくことを期待します。

5. リハビリテーション機関の限界とパソボラへの期待

医療制度の改革で入院日数の短縮が医療政策課題となり、患者は数ヶ月から半年で退院するようになりました。現実を受け入れる十分な時間はとれないため、自宅で自閉的になる患者が急増していると聞きます。コミュニケーションは人間が社会のなかで「住まうこと」に関わる大切なことと思いますが、短い入院期間では身体機能の向上と自立した日常動作の獲得を余儀なくされて退院します。そのため在宅でのコミュニケーションを支援する人材（パソボラ）が重要であり、できる限り協力関係を築いていきたいと思います。私たちリハビリスタッフは、対象者の生活クオリティを高めることが最終目標です。そのため社会参加を促す IT 活用をはじめとするコミュニケーション活動に注目しています。

6. おわりに

IT 支援での成功は、実に複雑な仕組みによって成り立っていると感じます。自分の支援方法が「自由」で自発的な「思いつき」であったのか、それとも機械的かつ潜在的に記憶との連想が生じたのか、分からないこともあります。これらの発想は、日頃の支援経験における試行錯誤の賜物です。自分がおこなった支援の選択が良かったかどうかは対象者が教えてくれます。支援の成功をともに喜び、支援の失敗に真摯に反省していくことが大切です。対象者に関わる支援者各々の専門性を高めることと、対象者に必要な支援のネットワークが拡がることが、対象者の確実なコミュニケーション手段の獲得とセカンド・ステップに役立つものと考えています。今後ともよろしく御願いいたします。

NPO 法人札幌チャレンジド「行政との協働の実践」

この記事は 2006 年 10 月、NPO 法人札幌チャレンジドに聞き取り調査を実施し、理事・事務局長の加納尚明氏に伺ったお話をまとめたもとです。

協働のプロセス

札幌チャレンジドは 2000 年より障害のある方々へのＩＴ支援による社会参加と就労支援を目的として活動を開始した。その頃札幌市も障害者への IT 支援の実施について模索しており、札幌チャレンジドに講師派遣依頼を行い、IT 講習会を実施した。この段階ではまだ「協働」とよべる取り組みではなかったと理事･事務局長の加納尚明氏は振り返る。

2003 年 10 月、札幌チャレンジドは「障がい者 IT サポートセンター」を札幌市から受託したが、実現に至るまでの札幌市との断続的な交渉により真の「協働」が生まれた。

前年の 2002 年５月、札幌チャレンジドは厚生労働省が 2003 年度予算で、「障害者 IT サポートセンター」を概算要求したという情報をキャッチし、これをぜひ札幌チャレンジドで実施したいと願った。そこで、「北海道に求められる障害者 IT サポートのグランドデザイン」という資料を１週間でまとめあげ、自ら道庁の保健福祉障害者担当部局と IT 部局、札幌市の障害部局と IT 部局に、それぞれ同じものを持っていき、北海道で必要な障害者 IT サポートセンターについての提案をした。この提案書は、「障害者にとっての IT とは」、「障害者の IT 利用実態」、「現状把握」、「IT サポートに対する協働のデザイン」、「札幌チャレンジドの願い」等などを数字や図表を使ってまとめ、それをもとに経験をふまえた説得力のある提案を行った。「障害のあるかたが IT を活用するとこんなに素晴らしく QOL が上がるんだよ。そして、IT サポートセンターは、決して行政だけとか民だけでやるのではなくて、協働でやるべきでこういう部分はこういうふうに協働でやりましょう、と具体的に提案しました」と加納氏は語る。

札幌チャレンジドの提案は受け入れられ、「次年度予算」策定の中に載り、翌年 10 月から、「札幌市障がい者 IT サポートセンター」という事業が始まった。

関係はフィフティ･フィフティ

札幌チャレンジドが考える協働のポイントは、５つである。

- 一に提案！、二に提案！！（職員の知恵袋になれ！）
- 地道な活動実績作り
- 人脈作り
- 受託収入に屈しない信念と他の収入源確保
- オンリーワン要素を創れ！

「NPO 側が行政に提案をするということが、とにかくスタートですよ。待っていても何も来ないし、行政が考えたことというのは完全に行政の下請け的にならざるを得ない。こちらから考えたものは、向こうもできるだけ行政の中で設計していくから、わりとちゃんとしたものができるんです。」と加納氏は語る。しかし、NPO が行政を納得させるような地道な活動をしていることが大前提だと釘をさす。その上で、行政側との人脈作りを少しずつ作っていく。「いくら偉そうなことを言っていても『あんたたち、何、やったの』と問われたときに、実績のない団体には絶対に契約を結んでくれない。それは当たり前と言えば当たり前。行政は税金を預かっているわけだ

から、やっぱりちゃんとした所に発注しないと、説明責任を果たせないので」

また、役割分担に関しては、「NPOの役割分担、領域設定をきちんとすること。障害者のITサポートはいろいろ幅広いので、重度障害者の方の支援は、基本的にはやはり行政が積極的にやるべき。その対極にあるのが就労支援で、これは本来民間が頑張って、障害者の雇用を増やしていくべき。そのあいだには、行政と民間がフィフティ・フィフティで協力してやるべきことがあり、この領域についてお互いが共通認識を持つということが必要である。」と語る。

そして、NPO側にオンリーワンの要素があるかが、キーポイントと札幌チャレンジドは考える。「行政というのは公平性の原則がありますから、札幌チャレンジドと同じことをやっている団体が例えば市内に３つあったら、常に天秤に掛けられます。そうすると値段競争とかになり得るから、やはり自分自身が、いかにオンリーワンを作り出していって、これを社会の中でできるのはあなただけよね、というNPOになっていかないと、なかなか協働をより推し進めるということは難しくなってくる」札幌チャレンジドは常に障がいのある方にとって有益でユニークな活動を展開しようと心がけている。

札幌チャレンジドが考える「協働」とは、対等な立場で議論して両者が納得する結論を導き合いながら進めること。交渉の際、妥協できない問題が発生したときには、とことん話し合い、それでも行政の要求が札幌チャレンジドの信念からかけ離れていれば場合によっては、事業受託を断念するという覚悟も必要。そこで重要なのが、「受託収入に屈しない信念と他の収入源の確保」だ。収入がないと結局は断れないので、対等な立場で話し合うためには独自の財源を持つということが重要になってくる。

小さなことから始めよう

札幌チャレンジドはもはや押しも押されもしないNPOに成長した。これからIT支援をやってみたい、また様々な悩みを抱え、行政の支援を受けたいと思っているボランティア団体やグループへのアドバイスを伺った。「今でこそ札チャレは組織も大きくなったし、しっかりしてきたけど、何もないところから始まったんです。みんなと同じですよ。だから、ちゃんと一つ一つ積み重ねていけば、だれだってこうなれるんですよ。もし場所がなければ、最初から大きな行政に訴えるのではなく、自分たちの住む地域にアプローチをしてみる。こういう活動を、何とか地域密接で自主的にやりたいんだけれども場所がないんだよ、場所だけ貸してよと。全くそういうのがなかったら、小学校とか中学校に僕ならアプローチする。コンピュータ室があるから、何とかそういう所を土曜日だけ貸してもらえませんかとか。何か問題があったとき、考えればいっぱいあるはずなんです。一人で考えないで、ブレーンストーミングする。『パソコンを教えたい、じゃあ、パソコンはどこにある？』『ああ、じゃあ、企業にパソコンあるよね』とか。『ノートパソコンがどこかから借りられれば、割とどこでもできるよね』。『ノートパソコンは持ち寄ることにして、場所だけ。パソコンがあるんだったら、場所だけで本当に良ければ、もっとこういう場所の選択肢あるよね』とかいうことを、やっぱりちゃんとブレーンストーミングしていく。その中で本当に行政が必要な分は『ここの部分だけ行政お願い』とやればいいんだから。」

大事なことは、まずは訴える前に、自分たちでできることを考えることだという。ゼロからスタートし、問題があってもみんなで知恵を出し合い、工夫を重ね、揺らぐことのない信念を持ち続け果敢に挑戦してきた札幌チャレンジドの実践は、障害分野に関わらず多くのボランティアグループやこれからやってみようと思っている人たちにとって何よりも励みになると取材を終えて実感した。

NPO 法人札幌チャレンジド
札幌市中央区北 5 条西 6 丁目札通ビル 8F
TEL:011-261-0074FAX:011-219-1811
URL:http://www.s-challenged.jp/
E メール:challenged@s-challenged.jp

・札幌チャレンジドの活動内容については以下平成 17 年度の聞き取り調査によるまとめを参照して下さい。
「平成 17 年度　地域におけるインターネット・パソコンを利用した障害者情報支援に関する調査研究事業報告書」(p22 ～ p 24)
(財団法人日本障害者リハビリテーション協会　平成 18 年 3 月発行)
http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/conf/it2005/kikitori1.html

「より良いIT支援に向けて」

加納　尚明　ＮＰＯ法人札幌チャレンジド　理事・事務局長

何も無い、あるのはヤル気だけ！

2000年、札幌チャレンジドの始まりは、一冊の本からでした。社会福祉法人プロップ・ステーションの竹中ナミさんが書いた「プロップ・ステーションの挑戦」です。この本を読んだ一人の女性が、『札幌でも竹中さんのようにパソコンやインターネットを活用して、障害のある人（チャレンジド）の自立のお手伝いをしたい！』と思いました。

パソコンも無い、講習会を行う会場も無い、何も無いけど、ヤル気だけはたくさんあるという状態からスタートしました。仲間を募り、パソコンのある場所を探し、月に一回程度、大学のパソコン教室に、チャレンジドに集まってもらって、具体的な活動が始まりました。

それから７年が経ちました。今では、毎日、チャレンジドを対象とするパソコン講習会を開催し、年間、延べ約２，０００人が受講しています。最初は、受講者だったチャレンジドが、今では、人気講師になっています。ほとんど全ての講習を、７名のチャレンジドが教えています。

札幌チャレンジドという組織も、できてから二年間は、事務所も無く、専従の職員も無く、ボランティアのスタッフが札チャレ用の携帯電話を持ち歩いていました。三年目に初めて、別のNPOの事務所に机一つ置かせてもらって、専従職員が一人、つきました。今では、約８０坪の事務所に５人の事務局員が勤務し、講習会場も三つを備えるようになりました。

みなさんのお陰です！

なぜ札幌チャレンジドが、ここまで活動を拡げることができたのか？一言で言い表すならば、『みなさんのお陰です！』。札幌チャレンジドは、たくさんのボランティアさん、企業の方、行政の方、マスコミの方などのご協力によって、今日を迎えています。活動を進めていくには、必ず、いろいろな課題が出てきます。運営者だけの力では、それらの課題は解決できません。多くの方の力があってこそ、その課題が解決できるのです。

パソコン講習では、受講者全員に目配りしながら、講師をサポートしてくれるのが、ボランティアさんです。受講者に講習に関するアンケートを記入してもらっていますが、ボランティアさんがついてくれるので、ちょっと分からないときに、教えてもらえる。テキストのページをめくってもらえる。など、ボランティアさんが居てくれることをみなさんとても感謝しています。講習の休憩時間などにボランティアさんとお話しするのが楽しいという声もよく耳にします。ボランティアさんは、講習には欠かせない存在です。

また、札幌チャレンジドは、パソコン講習以外でもボランティアさんに支えられています。まだ、常設の講習会場が無かった頃は、ノートパソコンを都度、借りる講習会場まで運んでいただくボランティアさんがいました。今は、月に一回、札チャレ通信という会報誌の発行作業をボランティアさんが２０人くらい集まって、実に手際よくやっていただいています。約１，４００部の封入封緘、宛名ラベル貼りなどを３時間ほどで終わらせます。黙々と作業をするのではなく、手と口を動かしながら、楽しそうに作業をされています。月に一回、この発送作業をみなさん、とても楽しみにしています。

私たちは市民活動です！

私は、講師の人たちに研修会で話すことがあります。『札幌チャレンジドのパソコン講習が、ここまで受講者に喜んでもらえて拡がった最大の理由は何でしょうか？』

答えは、『私たちは、市民活動としてパソコンを教えているからです。』心から、受講者にパソコンのスキルを身に付けてもらいたいと思って教えているからです。それは、単にパソコンのスキルを身に付けることが目的ではなく、パソコンのスキルを身に付けることが、チャレンジドの社会参加や就労に役に立つからという想いが全ての講師のベースにあるからです。

すなわち、目的は、パソコンのスキルを身に付けることにあるのではなく、チャレンジドの社会参加や就労などの自立のお手伝いをすることにあるのです。これが、札チャレがたくさんの方々に愛されている理由です。この心を持ち続ける限り、時代の進展とともに教える内容やスキルのレベルが変わっても、札チャレのパソコン講習を受けたいと思う人は、なくならないと思います。

また、講師には、こんな話しもします。『講師の皆さんは、受講者がとても熱心だから、自分が元気をもらって、一生懸命教えることができる。と言われますが、その受講者の熱心さの源は、講師の熱意ですよ。最初にあるのは、講師の熱意です。講師が一生懸命、理解して欲しい、見に付けてほしいという想いを持って教えているから、受講者がそれに呼応するのです』。札チャレ講習は、まさに、講師と受講者の熱意のスパイラルアップ(好循環)によって、創られているのです。

ボランティアの心得三か条！

私がボランティアさんの研修会で話す、「ボランティアとしての心得三か条」があります。この心得をいつも忘れずにいてもらえれば、とても素敵な時を過ごすことができます。

一つ目は、『今、優しい自分であるか？を自分自身に確かめてください』。人は、生活の中で起こる様々なできごとによって、心が揺れ動きます。ボランティアをするそのときに、今、自分が優しい自分であれているか？を確かめてください。優しい自分でいられていれば、ボランティアとして、失敗したり、人とぶつかったりすることはありません。

二つ目は、『継続は、義務ではありません』。ボランティアは、自分ができるときにできることをするものです。一度、始めたからといって、ずっと続けることを義務として考える必要はありません。一年でも二年でも、ボランティアができなくなっても良いのですが、その後、またできるようになったら遠慮しないで参加してください。

三つ目は、『ボランティアは、やらせていただくものと思えるかどうかです』。最初は、ボランティアは、やってあげるものだと思うのが普通です。間違っていません。でも、実際にボランティアをやってみて、私は、やらせてもらっているのだわ。と思えるようになったら、もう何の心配もいりません。相手に喜んでもらえるボランティアになれています。どこか心の奥底で、私はやってあげているという心がある人は、いつか、相手や周りの人とぶつかって、お互いに不愉快な想いをするでしょう。

これが、私が札幌チャレンジドで感じえた心得です。ボランティアをしている方やこれからやろうと思っている方は、ぜひ参考にしていただければと思います。

新しい市民社会に向けて！

人々の生活の中でパソコンやインターネットが様々な場面で活用されている現代社会において、障害のある人たちにとっても、その活用は、人としての豊かさや可能性を大きく伸ばすものとなっています。

ＩＴがもたらすものの本質がどこにあるのかを考えると、それは、便利さや効率性の実現ではありません。人と人がより理解を深めることであり、ＩＴが無ければ実現しえなかったことが実現できることによって得る満足感です。全ては、ＩＴを使う人の心のありどころが中心です。

その人、その人にあったＩＴの活用方法を、独力で見出せないひとも大勢います。使い方が分からない、使いたくても普通のパソコンでは物理的な操作が困難である、目的が見出せないなど

様々なハードルが存在します。

今、日本各地には、たくさんのパソコンボランティア団体が、そのハードルを低くする、取り除くために活動しています。その活動は、単にパソコンの操作方法を教える、学ぶということに価値があるのではなく、人と人が出会い、お互いを理解しあい、お互いが必要なことを自然に行うことに価値があります。

障害のある人へのＩＴ支援の先にあるものは、障害の有無に関わらずユニバーサルな社会の実現に向けて、市民同士が助け合う「市民自治」の実現です。少子高齢化、経済成長が見込めない新しいパラダイムの社会がもう既に始まっています。その新しい社会を持続可能な社会として創っていくのは、「市民自治」です。

市民が自発的に考え、行動して一歩、一歩、歩んでいる全国各地のＩＴ支援の取り組みは、まさに「市民自治」を具現化している素晴らしい現実です。より良いＩＴ支援の輪を拡げていくことで、日本が、誰もが安心して暮らすことができる心豊かな国となっていけるように、みんなで力を合わせてやっていきましょう！

埼玉県障害者 IT サポートセンター「事業とパソコンサポートボランティア活動の概要」－よりよいパソコンボランティア活動推進にむけて－

増田　隆　埼玉県障害者 IT サポートセンター

埼玉県障害者 IT サポートセンター（以下「ITSC」と略す）の推進員として、埼玉県から受託した事業を運営して、３周年を迎えようとしております。より良いサポートを目指して努力を重ねておりますが、その現状と課題について報告させていただきます。

1．埼玉県障害者 IT サポートセンター（以下「ITSC」と略す）の事業概要

・2004 年５月、埼玉県福祉部より、埼玉県障害者協議会（県内障害者団体連合会）・社会参加推進センターが受託して、さいたま市浦和区の埼玉県障害者交流センター内に、常勤１名体制で発足。

・事業内容は、埼玉県策定の「障害者 IT サポートセンター運営要綱」にもとづき、以下のとおり。

a. 障害者への電話、FAX、電子メール、面談による IT 利用相談事業（04 年６月から）

b. パソコンサポートボランティア（パソボラ）養成事業（04 年 11 月から）

c. パソボラによる障害者への個別訪問サポート事業（04 年１月から）

運営方針：H/W と S/W に依存した IT に Heartware（気配り）を加えて！

2．埼玉県障害者 ITSC の IT 利用相談とパソボラ活動状況

1）ITSC パソボラの現状とプロフィール（07 年３月現在）

・登録パソボラ数：85 名（男：42、女：43）（内９名は活動休止中）

・年齢構成：39 歳未満：8 名、40-59 歳：39 名、60 歳以上：38 名

・パソボラ、ＰＣ教室講師等経験者：約 50%、ボランティア経験者：約 20%、障害当事者：約 15%

・パソボラの地域分布：ほぼ埼玉県全域に派遣可能

2）最近の活動実績

・2006 年の相談・訪問サポート件数（１ヶ月あたり平均）

期　間	相談件数	訪問サポート件数	訪問パソボラ数
06 年４月～ 06 年 12 月	約 120 件	17 件	20 人

（注）相談件数にはパソボラや市町村からの照会、連絡件数を含む

・障害別サポート割合：　視覚障害　61%、肢体障害　17%、　内部障害　13%、その他 9%

・サポート対象者：　障害者手帳を保持する埼玉県内在住者。但し、「障害があることで、パソコンによる情報の入手やパソコン操作の習得等が困難な方」

・サポート場所別割合：自宅訪問 76%、ITSC 等施設サポート 26%（本人ＰＣ持参を含む）

・依頼を受けてから訪問までの日数：通常１週間、緊急時１－２日

・訪問サポート時の平均サポート時間：2-3 時間

・サポートの内容：パソコンと周辺機器の利用支援（Micro Soft の OS と MS-Office をベースにした、文字入力、ブラウザ、メールソフト利用）

3）関連団体との連携－より効率的、永続的なサポートにむけて

a. 埼玉県障害者交流センター（埼玉県社会福祉事業団運営）

・ITSCが同居する障害者交流センターでは、以前より障害者向け初心者パソコン講習や相談会を実施しており、これらの受講者が個別サポートを希望した時はITSCが引き受けている。

・ITSCのパソボラ養成講座開催時に交流センターの講習設備や障害者向入力補助機器等を利用させていただくとともに、パソボラの技能向上のための講習会を共同開催している。

・多数のパソボラに交流センターとITSC両方登録願い、一緒に活動いただいている。

b. 地域のパソボラ団体との連携

・埼玉県内にはITSC設置前から、経験豊富な地域のパソボラ団体があり、代表の方にパソボラ養成講座の講師を委嘱したり、会員にITSCパソボラとして登録いただき相互に連携して活動している。

・パソボラ団体のない地域では、ITSCパソボラが中核となって、地域のパソボラ団体結成推進を支援している。

c. 障害者団体との連携

・ITSCの受託母体である、埼玉県障害者協議会は県内４０有余の障害・難病団体の連合会で、各団体を通じてもサポート要望に対応している。

・同協議会内には以前からIT委員会があり、パソコン教室、視覚障害者や盲ろうの方への継続的パソコン講習を実施しており、これらの設備をITSC内での個別サポートに利用している。

・パソボラには地域の障害者団体や障害者通所施設等でのパソコン講習会等での講師としても活動いただいている。

3．ITSCの運用状況 - より効果的なサポート実現に向けて

1）サポート地域－訪問サポート不可能地域はほぼ解消

・パソボラの訪問サポート範囲は自宅から片道１時間、交通費が活動手当範囲内、車で片道25Km以内を目安としているが、ほぼ県内全域を訪問サポート対象地域としている。

・ITSC事務所のあるさいたま市から県内全域をみることは困難であるため一部地域については、地域のパソボラ団体の幹部に訪問調整を委託している。

2）各種サポートへのパソボラの対応力強化（サポート技能向上対策）

・地域のパソボラ団体活動、教室への参加促進（視覚、肢体障害対応等）

・障害者交流センターと連携したサポート技能向上講座開催（年数回開催）

・重度肢体障害者への対応（各種補助機器の試用等）

・各種専用ソフト業者の協力を得て、研修用ソフトの確保と研修用PCの貸し出し（特に音声関連）

・Mailing Listを活用したパソボラ相互の情報交換（サポート概要は都度ＭＬに報告）

3）ITSCの予算制約（超過）への対応

・予算の制約と同一人へのサポート偏重回避と機会均等の観点から派遣サポートを抑制している。（障害種別派遣サポート回数制限、サポート範囲の限定等）

・サポート回数超過（サポート終了）時には地域パソボラ団体やパソボラ個人へ引継ぎ、依頼者の一部個人負担など、地域での柔軟な対応をお願いしている。

・複数でサポートすることを原則とするものの、実態に応じ単独サポートも実施。

4）依頼内容への対応（サポートすべき範囲）について—障害実態に応じた柔軟な対応

a.H/W トラブルや購入アドバイス

・メーカー／販売業者サポートとの切り分け（視覚障害者の場合、訪問して確認が必要）。
・メーカーなどへの送付作業支援と修理返送後のサポート
・購入時のアドバイス、サポート依頼への対応、回線接続トラブルへの対応

b.S/W　サポートの範囲

・ITSC の「パソコン入門」テキスト、某 100 円ショップの入門用市販テキスト（OS/ インターネット、メール、MS-Office）内容程度でサポートレベルを統一
・代表的な音声ソフト（スクリーンリーダー、メーラー、音声出力ブラウザなど）

c. 周辺機器、入力支援ソフトサポート

・入力支援機器（特殊マウス、トラックボール、KB ガード、トーキングエイドなど）
・入力支援ソフト（音声入力ソフト、PETE、オペレートナビなど）

4. 増大する課題への対応 -ITSC、ボランティア活動の限界

－ IT の進化により、益々格差が広がる障害者の情報バリアフリーを実現するための課題－

・予算の制約により実施している回数制限やサポート範囲の限定をどう乗り越えるか？
・重度肢体障害、知的障害者、精神障害者など長期間サポートを要する方の対応策
・盲ろう者など重複障害者への対応、点字サポート可能なボランティアの不足
・MS 社の最新 OS のような多機能化、マルチメディア化にともなうサポート要望へ対応策
（MS 社の OS や MS-Office など標準的な支援のみでも限界にが来ている。）
・新規の専用ソフトへの対応は殆ど困難（音声ソフトでも、K 社以外は殆ど困難である。）
・ウイルスソフトの多機能化と迷惑メール増大に伴うトラブル増加への対応
・デジカメや多機能化する PDA、携帯電話などの要望への対応

参考資料:

a. 埼玉県障害者 IT サポートセンター広報チラシ(パソコンサポートと 110 番)

障害者パソコン・サポート110番

＊＊＊パソコンでお困りの障害者の皆様へ＊＊＊

048-825-2749 埼玉県障害者 IT サポートセンターへ！

＊パソコンを買ったけど、難しくて使えない！
＊普通のパソコン教室では、教えてもらえない！
＊視覚障害者で、インターネットやメールをやりたい！
＊手が不自由でマウスが使えないけど、パソコン使えるの？

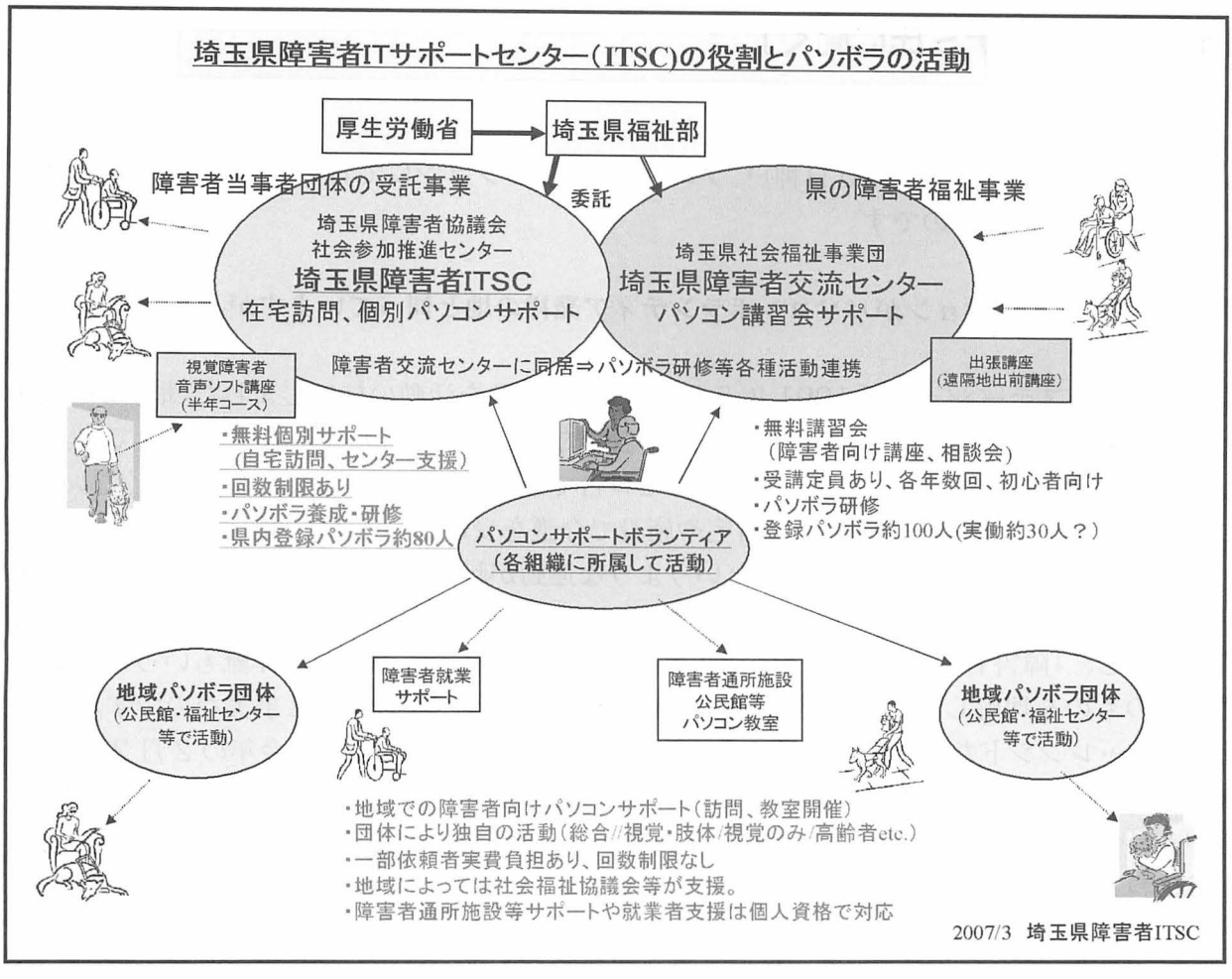
など、「障害があることで、パソコンによる情報の入手やパソコン操作の習得等が困難な方」を対象に、ご希望の日時に、ご希望の場所でボランティアによる無料の個別・出張サポートをさせていただきます。

サポートご希望の方は、お気軽にご連絡下さい。

○電話受付・電話ご相談対応日：火、木、土曜
（午前１０時～午後３時）
○派遣サポート対応日：原則として、火、水、木、金、土曜日
（午前１０時～午後５時）
○サポート場所：ご依頼者ご自宅又は障害者交流センター内、等
（状況によりご依頼者の近隣の福祉センター、公民館等への派遣も可）
○連絡先電話・FAX 番号：048-825-2749
○サポートセンター所在地：さいたま市浦和区大原３－１０－１
障害者交流センター内埼玉県障害者協議会

[ご注意、ご参考情報]
①ご依頼地域、ご依頼内容、ご依頼時間によっては対応できないことがあります。
②サポート回数には制限があります。
③祝祭日及び年末年始（１２月２９日～１月３日）は休ませていただきます。
④電子メール（smile-s@amber.plala.or.jp） ＦＡＸでは常時受け付けています。
⑤ HP: http://www.ssc-saitama.jp/it/itsupoort.html
⑤本事業は、埼玉県障害者協議会・社会参加推進センターが埼玉県・福祉部の委託により実施しているものです。

b. 障害者 IT サポートセンターの役割とパソボラ活動



社会福祉法人プロップ・ステーション
「理事長　竹中ナミ氏に聞く」

この記事は2007年1月20日神戸、プロップ・ステーションにて竹中ナミ氏にインタビューした内容をまとめたものです。

プロップ・ステーションがパソコンボランティア発祥の地と伺っていますが。

プロップ・ステーションは1991年5月の発足からITを活動の柱にしました。最初からそれだけのためにというとおかしいですが、それを目的にして生まれたようなものなのです。実は16年前というのは、パソコンは一般家庭にゼロ台でした。一般家庭にパソコンが全くないときに、コンピュータとか通信を使って、自宅や施設で介護を受けている人が「働いて稼ぎたい」と考え、タックスペイヤー(納税者)にまでというような運動が起きたということが、普通に考えたら有り得ないことですよね。だから私たちが活動を始めた時も、誰もその内容を言ってもわかってくれないし、「障害者に高いコンピュータを買わすんちゃうか」みたいな非難もいっぱいあり、活動そのものを理解していただくまでに何年もかかったというのも実は事実なのです。そもそも私がチャレンジドたちと活動を始めたきっかけというのが、自分の娘、今年の2月2日で34歳になったのですけれども、彼女が重度の脳障害のため全くの赤ちゃんタイプで、視覚も聴覚も精神も身体も全部が重症で、私のことはまだ母親とほとんど認識ができていないという状態なのですね。身体のほうは、最近少ししっかりしてきて、手を引いたら(短距離なら)歩けるという状態です。私は彼女を通じて、すごくたくさんのチャレンジドたちと出会いました。チャレンジドたちの多くは「この人だってこの世界で自分の娘を支えてくれる人になれるやん、この人もなれるやん、この人もなれるやん」、というように、いろいろなポテンシャルを持たれている方が多かったんですが、自分の娘のように本当に全面的に守って支えてもらわないといけないという人も、彼等のような人も、日本では同じように「障害者」と一括りに呼ばれて、かわいそうで気の毒な存在で、家族にそういう子がいると世間から蔑まれ、隠したり恥ずかしがったり悲しんだりしている。現実に私も自分の娘があまりに重症だったので、生後3か月で重度の脳障害だとわかったのですが、その時に私の父が、「おまえがこの子を育てるのは苦労するから連れて死んだる」とか言うたりした経験もあるのですよね。私はそれが不思議というか、「そんな日本ってなんや」、というのが自分の中の強い気持ちだったのです。同じ人間として生をうけて、それを障害があるのとないのとで「恥ずかしい」まで言われてしまうのってなんなのかしらと、めちゃくちゃ理不尽に感じました。チャレンジドたちと出会ってみて、彼らと一緒に活動してみて、やはり世の中のほうがヘン。世の中のほうが絶対変わるしかない。結局、世の中って、自分自身が変えなければ変わらないし、変えようと思うんやったら自分がなんとかするしかないわ、というのが私自身の確信になって行きました。

障害を持つ人自身がどう思っているかを知るために全国アンケートを？

障害を持っているチャレンジド自身はどう思ってるのかなあ、と考えた。障害があっても自分が社会の中で活躍したいと思っているのか、つまりお仕事したいと思っているのか、それとも、「自分たちは無理や」というふうに、家族や社会と同じように思っているのかというのを知りたいと思って、全国の重度・重症の人にアンケートをとったのですね。それはたった二つの質問でした。一つは、「あなたは大変重い障害があるが、働きたいと思ったことは？」

もう一つは、「働きたいと思うときに、武器はなんだと思いますか」というこの2点。本当に介護を受けて在宅や施設に居るというような人たちだから、もしかしたらお返事なんか全く来ないかも知れない、と思っていたのですが、私たちの手許にある重症の方ばかりの名簿から、1,300名くらいに送ったのですが、なんとそのうち200通くらい戻ってきまして、しかもその中の8割の人が「私も働きたい」、「これからの武器はコンピュータや」と答えていたんです。アンケートの中で、彼ら自身が、こうすれば自分たちはこうなれるという答えを実は出していたのですね。答えの中から課題も見えました。まず自分がコンピュータを使えば働けるのではないかと思うので、“勉強する場所がほしい”。友だちにベッドサイドで習っている人もいたのだけど、友だちに習っているだけでは身についた技術がプロとして通用するのかどうかわからないから、“ちゃんとプロから習って評価”をしてほしい。評価されるくらいになったら、“当然働きたい、仕事がほしい”。でも働きたいんやけど、自分は家から出るのがたいへんだから、職場へ行け、毎日通えと言われたらそれだけで潰れちゃう。だから“仕事のほうが来てほしい”、というこの4つの壁が明確に見えました。でも、コンピュータに期待している！

私は自分がコンピュータみたいな機械系のもんは嫌いやし、そんなもん触りたいと思わなかったけど、彼ら自身がそう言っているのだったら、「勉強をする場所を作って」「一流の人に教えてもらって評価できるようにして」「なおかつ仕事は、とれる人間がとってきて」「それでその仕事を在宅でする」この4つをクリアしたら、彼らの思っていることは実現できるのではないか。楽天的な性格の私は、明確に何かが見えたら即動けるタイプなので、この4つをクリアしたらええのかと思って、何人かの重度のチャレンジドたちの仲間でプロップというボランティアグループを作ったのが1991年5月だったわけです。だから最初から活動の柱に、コンピュータを使い、勉強する場所を設け、そこに一流のコンピュータ・エンジニアらにボランティアで来てもらい、仕事は在宅でできるようにすると、発足からゴールがキチンと見えていた珍しいグループとして発足しました。当時はまだNPOという言葉はなかったのですけれども、プロップはまさに「パソコンボランティアのはしり」ということになります。

ボランティアは一流のプロ？

これ私の持論なんですが、最重度の人が力を発揮するためには道具は最高のものでないとあかんし、教えてくれる人も一流の人やないとあきません。障害者の世界を見てみると、とにかく一流のプロと出会う機会はゼロなのですね。家族や介護ボランティアや福祉施設職員など温かい気持ちでお世話してくれるという人たちばっかりに囲まれて、その子の中に眠っている、あるいは眠っているかもわからない、仕事につながる可能性の部分を引き出したり磨いたり、実際に銭儲けにつなげるなんていうようなプロは回りに、はっきり言って一人もいないのが「障害者福祉の世界」やったのですよ。だとすると、やはり社会で彼らが働けるようにするためには、自分たちがそんな環境を作り上げていかないといけないし、福祉の世界にそういう人がいないのなら、そういう業界の人とつながりを持つということで、一流のエンジニアの人たちに声をかけたわけです。そうするとびっくりしたことに、自分たちも実はボランティア活動をしたかった。だけど世の中のボランティア活動は、車椅子を押しますとか、お食事やお風呂のお手伝いをしますとか、そういう介護系のことばっかりで、自分たちのような技術者が飛び込んで行けるような世界ではないと思った。だけどプロップステーションが技術でそのまんまボランティアをしてくださいというのは、もう僕たちにとって新しいものが生まれたということですごい嬉しい、と最初の説明会に30人くらい一流の企業の一流のデザイナーやエンジニアという人が集まってくださって、それでコンピュータのセミナーを発足することができました。

チャレンジドがパソコンを使ってボランティアに？

プロから技術を伝授され、スキルを磨いたチャレンジドたちが、在宅スタッフとしてパソコン通信を使って活動を進めていた時に、1995年1月17日の阪神淡路大震災が起きました。私の家は神戸市東灘区に有り、全焼しました。阪神間でプロップを始めたものですから、仲間が全員被災者という状態になったんですが、「私は生きている」、「僕は無事でした」というのを仲間が、電話線と電気が通じたらすぐにみんなそれを発信し始めたのですね。次には、誰それさんはどうしたというと、どこそこの避難所に入れた、大丈夫やったみたいというようなことを、またそれがわかって、どこで今日は水やお弁当をもらえるのとか、車椅子でも使わさせてくれるお風呂屋さんはないかみたいなことが、情報が飛び交いだして、みんなが避難した養護学校かどこかでおむつがなくなっちゃったというときに、それをチャレンジドが書き込んだらバトンリレーみたいにずうっとそのメールがつながっていって、東京の紙おむつの会社から千箱くらい届いた！

ということもありました。

震災の年は後にボランティア元年と呼ばれて、日本中の方やあるいは世界の方が力を貸して、応援してくださったのですが、パソコンボランティアという言葉もあの時に初めて使われました。ですから実は、ベッドの上のチャレンジドがパソコンボランティア第1号なんですよね。パソコンのプロの技術者によるボランティア活動もプロップのセミナーが日本初の第1号やし、「パソコンボランティア」も第1号・・・道具も人の技術も最高水準のものを使うことで、そういう結果が生まれたわけです。

初めてといえば、プロップ・ステーションは日本で初めて障害者と言われる人から、セミナーの料金という「お金を取った」団体なのです。今でもそうですけど、障害者からお金を取るということは日本ではずうっと許されないことだったんですね。でも私は、自分で自分を磨こうとする時に、リスクを負わないでできるなんて嘘やと思うたんですよ。だから、一般の企業のセミナーみたいに高いお金ではないけど、僅かでも自分でリスクを背負って、元を取ろうというつもりで勉強にきてください、私たちスタッフも自腹切りながら活動を進めてるけど、参加する全員で出し合ったお金で活動を続けて行こう！って。でもね、やっぱり石は飛んできましたね。「おまえら障害者からカネとるんか」、というのがすごいありましたね。ですけど腹を括って有料セミナーやってきて、結局そうやってリスクを背負うこともした人たちが今皆さんプロになられたり、人に教えるくらいになられている。あるいは自分が堂々と「これできるよ」と言える状態になっている。だから結果からしたらそれは間違っていなかったなと思います。またプロップのキャッチフレーズは「チャレンジドを納税者にできる日本」というのですから、これまたさんざん批判されました。このキャッチフレーズは、J.F.ケネディが大統領になった時～1962年ですが～最初に議会に提出した教書の中で、「私は全ての障害者を納税者にしたい」、というふうに書いたのを知り、自分の目からウロコが落ちたことから生まれたんです。なんでケネディはこんなことを言ったんかなぁ？と思ってバックボーンを調べたら、ケネディ家というのは親族にかなり障害者が居て、なおかつ自分の一番可愛がっている妹のローズマリーさんも知的ハンディを持たれていた。それでケネディは、政治家である前に一人のアメリカ国民として、アメリカで障害を持って生まれた時に人がどれだけ貶められるかというのを、いやというほど感じていた。そして「障害があるから人は働けない、ましてやタックスペイヤーにはなれなくて当たり前」という考え方そのものが差別やと気付いたわけです。そして、アメリカという国は、「国家として“彼らをタックスペイヤーにする”という意志を持たんとアカン」、ということを、1962年の教書に書いたんですね。翌年彼はダラスで暗殺されてしまいましたけれど、その考え方はアメリカの制度の中にずうっと生きてきて、ADA法やリハビリテーション法が生まれてきました。「差別がな

い」というのは、どのような状態か。それは「人が生まれ、生活し、学び、働き、能力に応じたステータスを得、タックスペイヤーになって行く、そのためのチャンスが平等に与えられることだ」とアメリカは定義したわけです。ですからアメリカではチャレンジドの自立運動も、「チャレンジドはタックスペイヤーになる権利を持っている」という言葉をスローガンとして掲げてきました。日本ではとても考えられないスローガンですし、税金なんか払いたくないと誰もが軽口で言うけれど、社会の基盤が税金で整備されている以上、私は日本のチャレンジドも「誇りあるタックスペイヤーになるための運動」「それを実現できる道筋を皆で造る運動」を展開したいと思いました。そんな想いから、プロップのある意味「過激な」キャッチフレーズが生まれたわけです。

プロップが提唱している「チャレンジド」という言葉も、15～6年前にアメリカの人たち自身が「ハンディキャプト」や「ディセイブルパースン」のように「マイナスや不可能な部分だけに着目した呼び方ではないものを生み出そう」ということで誕生した呼称で「挑戦という使命や課題を与えられた人。挑戦するチャンスや資格を与えられた人」などを意味する造語です。プロップはこの言葉に「意識の１８０度の転換」という大きな意義を感じ、「ネガティブな意味を持つ“障害者”ではなく“チャレンジドであろう！”」という想いを込めて使っています。

ところで私はいつも「私は、つなぎのメリケン粉」って言っているのですけれど、障害があろうがなかろうが、地位があろうがなかろうが、その人の中にある「人の役に立ちたい」とか、「喜んでもらえることをしてみたい」という気持ち、そういう気持ちをつないでいくというのが私の役割かなっと思ってます。つなぐことに関しては、実は私は娘のおかげで天才的になれたんですよ、ははは。普通そんなSOSが出せるかぁというようなSOSでも平気で出しちゃったり、現実にだって私、自分の娘を育てながらやってきたことは、この子を一人で自分が抱えたら潰れる。絶対いろんな人にSOSを出しながら育てるという形でやってきましたから、その時に、人をつなぐ。親としてこの子のことは最終責任は自分にあるけれど、自分だけではあまり非力なのでみんなの力を借りて、それをコーディネートするのが母ちゃんの役割、それ以外にないなと。自分の力の限界はもういやというほどわかった。私は「つなぎのメリケン粉になろう！」ってやってきて、それがそのまま今の活動になっています。そして、そういう仕事をさせてもらっているというのはすごくラッキーなことやと思わずにいられません。だって普通は誰でも、自分のやりたくない仕事もやらなアカンのが人生じゃないですか。その中にいて私は本当に自分の好きなこと、自分に向いてることばっかりやって、つまりいろんな人をつなぐ仕事だけをやらせて貰ってる。すごくありがたいことだと思っています。

パソコンボランティアに求められる資質は？

チャレンジドが在宅で働く時になにが必要ですか？とよく聞かれるんですが、その時必ず言うことは「人柄とスキル」です。そして重要なのはスキルよりむしろ人柄。同じスキルでどちらを選びますかと聞かれたら、当然人柄のいいほう。

プロップは多くのボランティアに助けられてここまできましたが、ボランティアも人間なのだから、当然好き嫌いがあって、なおかつボランティアに来るきっかけはさまざまです。ですから活動をスムーズに進めるためにはコーディネイタが必要です。これはまさに「つなぎのメリケン粉」。要は、その人がいかにプロップで力を発揮してもらえるかを考え実行する。コーディネイタである私の役割はそれに尽きるんですけど、コーディネートって実に自分が磨かれる仕事やなぁと毎日感じます。修羅場というか、試練というか、勉強になることばっかり！

ボランティアさんというのは、給料をあげてお仕事をしてもらうわけではないから、クビにするとか命令するとか、普通は絶対にできない。ですけど、どこかで一線をひかないといけない時

があるんです。ボランティア同士で、この組織は私でなければ、僕でなければみたいな、何か権力争いみたいになった時にはもう終わりです。プロップ・ステーションの活動の中で自分が役立つならばしますということで来られた方が、自分がこれをしたいから、ここを使ってやらせてくださいと言い出して、それがプロップのミッションと違うときは、これはきっぱりとやっぱり辞めていただかねばならない。だから、本当にお金を払って人を使うより、ボランティアという方々に気持ちよく自分の力を発揮してもらうというのはめっちゃ難しいことだと思います。ですから、どこの組織であれ、やはりそういったコーディネートの力量が問われるのではないかと思います。

最近では、うちのパソコンボランティアには高齢の方もいまして、昔大型コンピュータでずうっと技術を磨いて磨き上げて、しかも社会人としてもそれなりのものを身につけられてきた60代、70代の方々が、うちのボランティアのけっこうメインでいらっしゃるんです。そういう方は社会経験、人生経験、仕事経験を持っていらっしゃいますから、普段のセミナーではボランティアとしてサポートして戴き、企業や行政から仕事の発注を請けたときには、在宅ワーカーの人たちにお仕事を振り分けたり、その人のお仕事をチェックしたり、あるいはその人の体調を気遣ったり、社会的なことを教えていただいたりということを「お仕事として」(ペイをお支払いして)やっていただきます。

何年も何年もお手伝いをしてくださって、何年も何年も付き合うから、お互いに腹を割って話もできるし、その人の人柄もわかるし、その人に安心して信頼して任せられる。

だから、単に、私はパソコンができてボランティアしますってぽんと行って、そこでお互いにとっていい仕事ができるかっていうと、それは無理やと思います。だから、パソコンボランティアという組織がいくらできても、やはり年月と、それからそういったお付き合いの深さみたいなものが必要だと私は思います。

行政との連携はいかがですか。

行政は重要ですよね。日本の福祉って、全部税金でなされているわけですから、特に障害者は。そして障害者手帳の級数や、年金の給付を決めることから、雇用率の数字を決めることなどなど、全部国が専権事項としてやってます。地方自治体はそれを受けて仕事をしてるわけです。ということで、プロップは発足時から、国と交渉しながら活動を進めて来ました。プロップの目標は「重度の障害者が自分の住んでいる地域で、コンピュータや通信を使って働き、なおかつタックスペイヤーになる」というものですが、私たちが活動を始めた時ときというのはまだ12省庁再編前でした。そうすると、重度の障害者、これは厚生省の所轄する話です。パソコンやソフトと言えば、これは通産省。通信と言うと郵政省で、働くというと労働省で、税金は大蔵省で、地域でと言うたら自治省です。つまり、プロップの掲げる文字にすると僅か1、2行のこの目標を達成するためには、殆ど全ての省庁が、「この人たちも働けるようにしよう！」「この人たちも社会の中で活躍してもらおう！」と思って政策転換しないとアカンわけですよ。

ということで、最初からとにかく国の役所を走り回りました。「日本の国の役所で誰に会ったらええやろ？」っていろいろな人に相談したら、全員が当時厚生省の障害者雇用対策課長をしていた坂本由紀子さんという女性に会うべきですと言うので、坂本由紀子さんに手紙を出しました。絶対返事来ないだろうなと思いながら、そうしたら即返事が来たんですよ。是非お会いいたしましょうというので、霞が関というところに初めて足を入れて、彼女とお会いして、一所懸命話をして・・・すると「私はあなたの言うことはとってもわかるし、きっとそういう時代は来ると思うけど、あなたは今の時代の2歩も3歩も先にいる。だけど私はそういう時代が来るべきだと思う。とはいえ今の段階で私のできる応援は、後ろから頑張りなさいよと言うことです。」と。で

も彼女のご紹介で、色んな関係セクションや省の方にお会いすることが出来、率直な意見を言わせて戴く機会を得ました。

由紀子さんの何代か後になって村木厚子さんという女性が課長になられて、由紀子さん、厚子さん、ナミねぇの女３人すごく仲良くなって、ぶっちゃけ話とかもできるようになりました。彼女たちが口を揃えて言われたのは、霞が関という男社会で子どもを育てながら女性が活躍していくということの壁はね、障害者が働くということの壁と全く同じで、これは女性問題と一緒で「日本システム」の問題なんだ。だからナミさんの話が私はすごくよくわかるって二人が言ってくださって、そういう意味で、女性の力というのはプロップの大きなバックアップ・パワーでした。

でもその頃、市民運動や障害者運動をしている者と行政の関係というのは、対立的な交渉相手ですね。相手は敵ですから怒鳴り合いの喧嘩になる時も多い。口汚い罵り合いもある。要するにドアをどんどんと叩いて、叩き破って「なんぼか取ってきますわぁ！」。でも私自身はそういうやり方にかなり懐疑的でした。「罵り合いからホンマの理解って生まれるんやろか？」。だから私は外からドアを叩いた時に、中からこっそり鍵を開けてくれる仲間、プロップの考え方への理解者をあっちにも作ろう、全ての省庁に作るんや。全ての省庁に生まれた理解者がそこでのキーパーソンになって、一緒に制度を変えて行けたらえぇな、と思いました。

ところでプロップは活動をはじめて８年目に社会福祉法人の認可を得ましたが、施設も措置（当時）も持たない、コンピュータネットワークである意味バーチャルに支え合ってる異端の組織なので、「第二種社会福祉法人」という位置づけになり、運営そのものに対する補助金は全くありません。活動はいつも刃物の上の綱渡りみたいに大変やけど、でも自分たちが補助金なしでやってきたというのは、無いからこそやれたとも言えるんです。つまり、補助金にはルールが付いて来るでしょ。社会のルールを変えようと思っている人間にとってそのルールは邪魔なわけですから、補助金が無いというのは逆説的な意味でいうとラッキーなんです。そうやって毎日危機感を抱いて活動してきたプロップからみると、行政予算が厳しくなる時というのはチャンスなんですね。主権者たる国民が、自分たちでアイディアを出し合えるという意味で。つまり今の社会状況は「日本人全員がチャレンジド」なんですね。今、挑戦する使命と資格を持っているという状態だと思うんです。何かがあったらしますというのではなくて、無いからしますという、知恵出します、汗出します、それからつながります、いろんな力と、いろんな能力を持ってる人とつながってやります。これから本腰を入れれば、絶対やれる。今までできなかったやり方がこれからできるというふうに、私は確信をしています。

じゃぁプロップと行政のお付き合いの仕方はどんな風か、身近なことで言いますと、プロップは日本の近畿の関西の兵庫県の神戸市の東灘区というところに本部を置いています。一番身近な役所は東灘区役所。私たちは自前のお金が、特の活動の広報に使えるお金が殆どありません。ですから、マスコミとかいろいろな雑誌とかで活動を紹介してもらったり、たとえばボランティア募集にしても来週からこんなセミナーが始まりますよ、にしても、自前のホームページでも発信する以外は、そういう媒体にお願いしてきました。その時、一番市民がしっかり読むのが、東灘区民便りなんですね。次が、神戸市市政便りです。一般新聞よりも克明に読んで、何か今新しいイベントがないかとか、何か新しい補助事業が始まっていないかとか、何か自分が聞きにいきたい講座が始まっていないかとかいうのを、読まれるんです。いまだにやっぱり市民にとっては役所が一番信頼できますから、役所の便りというのは皆さんすごく安心感を持ってお読みになるんですね。そこでプロップ・ステーションは、必ず区民だよりにも市政だよりにも、何か月前までの締切に原稿を出しなさいと言われたらきちんと出して、そのお便りの担当者とうちの事務担当者が綿密にやりとりして、必ず載せていただいて、その時にお問い合わせ先は区民だよりの窓口

と、プロップ・ステーションのどちらに問い合わせをしてもいいという記事を掲載して戴きます。市だったら市の福祉課に問いあわせてもいいし、プロップ・ステーションに問いあわせてもいいという形で、両方の電話番号とか載せていただくんですね。そうすると、相談に来られる方も、問い合わせる方も、すごい安心感がある。今私も神戸市のいくつかの委員会でお手伝いをさせていただいていて、市の新しいビジョンを作る時というのは必ず発言もさせていただいていますけれど、そういうふうに、役所から見てもプロップ・ステーションの活動があることによって、市民に情報が伝えられる。区役所、市役所、身近な役所があることによって、自分たちのやっていることを信頼性をもって地元の人に伝えることができる。あるいは自治会活動もありますよね。プロップの所在地には六甲アイランドという島の自治会活動があるんです。2年前にプロップ主宰の国際会議を六甲アイランドのホールでしたんですが、地域の自治会で活動している方のトップには全員お会いして、ここでやるから応援してくださいとお願いしました。地域あっての活動ですもんね。でもその地域にあるさまざまな問題の根っこはやっぱりほとんど国の制度だなと、様々な局面で感じます。だから、「私の問題で私が悩んでいます」と言う人には、「あなたの問題というのは案外、あなたのような人全ての状態の人の問題で、それはもっと大きく言うと日本のシステムの問題という場合が多いよ」と、私はよく言うんですね。

リハビリテーション関係の方々との連携は？

実は私、神戸学院大学に新たに開設された「社会リハビリテーション学科」の客員教授をしています。リハビリテーションというのが、単に障害をどうするこうするというのを超えて、その人が全面的に社会の中にどういうふうに参画をして、その人なりに活躍できるかということに変わってきたということなんだろうと思うんです。私の娘が1歳から早期訓練ということで訓練所に通っていて、PTさんとかOTさんとか言語療法士さんとか、そういう方々に囲まれてずっときましたけど、昔はとにかく障害というのはマイナスのもので、マイナスのものをちょっとでも正常と言われる状態に戻さないといけないという感じのリハビリだったんですよね。ですけれど今は、マイナスのところがあってもその人が輝くことができるという意味のリハビリになりつつあって、私としては、リハビリの方向性がそういう風になってきたことを嬉しく思っています。ですから、リハビリテーションの専門家の方々とお会いしたときにいつもお話するのは、皆さんそれぞれ、新しい知識を技術として吸収しつつ、やはり全人的に相手のことを見て欲しい。単に足だけ見ているとか手だけ見ているとか、言葉だけ、発話だけを見るのじゃなく、ね。

リハビリテーションの先生たちには、この人たちをどうやって社会に出して、その人の力を充分に拡大して世の中に発揮してもらうかというのを、やはりリハビリテーションの大きな着眼点にしていただきたいです。みんながそこまで行けるかどうかはわからないけれど、少なくともそこを着眼点にしてリハビリという仕事に取り組んでいただきたい。そのためにはやはり、日本の中だけでなくて、世界の情報を集めていただけたら嬉しいなと思うというか、お願いです。そういう意識や見識を持つ人たちと連携していきたいと思います。

プロップ・ステーションの場合は、身体に障害があってサポートが必要という人がパソコンセミナーの受講申込みをされた場合、必ず自分が最も信頼できるサポーターと一緒に来てくださいとお願いしています。そしてサポータも一緒にお勉強していただいていいです、というシステムをとっています。プロップでは介護協力はしていません。あなたがもし本当に社会に出て仕事をしたいと思うなら、あなたが自分に必要なサポートを提供してくれる人を自分で探すということがその一歩だと思ってるからです。サポータの居ない人には、サポート組織を紹介します。介助者を派遣するお仕事とか今すごい増えていますし、あるいは手話の通訳のグループとか、

そういうところとはネットワークがありますから、ご紹介はするけど、「プロップで勉強したいから一緒に行ってください」とそこに依頼するのはあなたの仕事だ、というのがうちのやり方です。

なおかつ、いろいろな機器も必要ではないですか、入力装置でも。それはあなたが家で自分のキーボードにつないでいる入力装置を、つまり自分に必要なアタッチメントは自分の使い勝手の良いものを持ってきてくださいとお願いしています。

支援機器情報については、「こころウェブ」をご紹介して、必要なものを一緒に見たり、ということが一つあります。「こころウェブ」はすごく喜ばれますね。こういうホームページがあるということすら知らない方がいっぱいいらっしゃって、そこを見て自分で選んだ中で、最後にこれかな、これかなみたいなご相談があるというようなことが多いですね。なぜうちがアドバイスができるかというと、講師が全部チャレンジドだからです。私は足だけで勉強してきて今先生をしてますとか、私は指先しか動かない状態で勉強して今講師をしていますとか、私は手話通訳者を連れてきて勉強してこういうふうになりました、教える時も手話を使いますとか、そういう人が先生になって、彼ら自身の中に、経験の蓄積、どんなソフトを使いどんな勉強のしかたをし、どこでつまずいてどこで苦労をしたかというものが全部あるんですよね。プロップのセミナーにこられる方にとって一番大きなポイントはそこですね。自分に技術を伝授してくれる人自身が、そこに至るまでにすごいいろんな経験を、身体的な経験、心理的な経験、家族との軋轢もいろいろなものを経験して来られているということですね。その分野においては、私はぜんぜん太刀打ちできません。

ゴールはトータルなライフワークのサポートですか。

できたら就労までいきたいけど、そこまでは無理でもインターネットは使えるようになり、とか自分のホームページを作りたい。それがどんなにささやかな目標でも、できた時にはすごく嬉しいですから、その次のステップに行かれる時の意気込みが違いますね。

ライフサイクルの全てに、これからはITがますます役立っていくものだから、それを自分で身につけておくのは、それは絶対得じゃん、ということですよね。パソコンのプロにはなれなくても、使い方はしっかり身に付ける、これが重要。たとえば、真ん丸を描くために人間はコンパスを使うじゃないですか。でも思い出してみると、あのコンパスで上手に丸を描けるようになるまでに、けっこうやっぱり難しかったんですよ。私は手先がどんくさいからよけいなんですけど、だから要するに道具って使えて初めて結果が出せるというものですよね。だから、丸を描きたいと頭でいくら思っても、本当の丸というのはコンパスがないと書けない。特に脳性麻痺なんかの手が震えちゃう人にとっては、直線とか真ん丸を描くなんて至難の業というか、まあ無理な話ですよね。だけど、パソコンだったらA点とB点とをポイントして、あとはクリックしたらどんな太い線でも細い線でも1cmの線でも1kmの線でも、丸やったら中心指定して2cmとか数字を入れたら半径2cmの丸が描けるわけでしょう？

これがどんなにすごいことかということですよね。だから、傍から見たらささやかな、真ん丸とか線を引くとかあるいは漢字が書けるとかね、でもそれが指先だけでできたり、瞬きだけでできたり、あるいは知的なハンディがあって読めなくても打てたり計算できたり、本当にパソコンは凄い道具だと思います。プロップのチャレンジドたちは「ITは自分たちにとって、人類が火を発見したほどの道具」と言うてます。つまりこれによって初めて人間に、社会的な存在になれた、って。

最後に、パソコンボランティアの人にメッセージをお願いします。

私たちは、パソコンを使ってボランティアをするチャレンジドのことをパソコンボランティアと呼んでいますが、その時に一般的にイメージされるのは「健常者が障害者にボランティアする」という場面かと思います。でもプロップではチャレンジド自身がパソコンの講師をし、ボランティアもします。こういう関係が広がって欲しいなぁ、というのがメッセージの一つですが、もう一つ技術的な面で言うと「3のことを教えるには10の力が要る」ということですね。つまり、きっちり相手に教えてあげて、そのひとが覚えられるような教え方をしようと思うと、その人には相手に教える量の3倍の技術が要るということです。だから、パソコンボランティアを目指される方が相手に何かを伝授してあげようと思っているのであれば、その技術は相手の3倍要るということを絶対肝に銘じていただかないと、ボランティア活動の意味が薄いですね。だから、まず教える相手の人がどのくらいのことを求めていらっしゃるのか。それの3倍の技術を本当に自分は持っているかということをよく自分が見つめなおして、なおかつ持っていなければその技術を磨いてからボランティアを始めるということが重要だと思います。

それと、ボランティア活動そのものに関して言うと、どうしても教える、教えられるという関係性、つまり上下関係ができてしまうわけですね。プロップ・ステーションでラッキーだったのは、超一流のエンジニアのボランティアの人たちが、ここへ来て初めて自分の技術が役立つ、社会に役立つということが自覚できたとか、あるいは初めてこういう重度の障害者の人たちに会って、自分と違うこういう世界があるということを知ったとか、自分が毎日平然と駆け上っている駅の階段がどんなに大きな障壁になっているかということに気付いたということを、いっぱい言ってくださったんですよね。ここに来ることが自分たちにとってプラスになったということを言ってくださった。私はボランティア活動というのは本来そういうものだと思ってるんです。一方的にかたっぽが何かを与えてかたっぽが何かを受けるという形になりがちなんですけど、技術は伝授するけどかわりにこの人から何か吸収したろう！と思う、そんな時に一番長続きするし、お互いにとってもいい関係だと思うので、やはりそうなれるようなボランティア活動を目指す。最終的には技術ではなく人が絶対問われますから、自分はどんな人間でどんなことが苦手で、性格はこんな性格で、だからこの人にこういう部分は伝わってほしいけど、こんなとこは伝わってほしくないな、こんなところでは迷惑かけんようにしようとか、常に自省しながら活動して欲しい。ただ、その場所にボランティアをコーディネートする人がいるのであれば、「関係性」というのはコーディネイタの責任の部分が非常に大きいですね。ボランティアさんにどういう人のところに行っていただくか、どういう人と接していただくかというのはコーディネイタの一番重要な仕事ですから、ボランティアをする人と同時に、コーディネートをする人に対しても改めて「厳しい仕事ですよ」というのをお伝えしたいと思います。

ボランタリーな気持ちでサポートしてくれる人というのは地域に絶対必要ですから、できるかぎりその狭くて小っちゃい区域にも居て欲しいんですが、どうしても東京にボランティアさんが集中して、「僕パソコンボランティアというのに所属したんだけど、僕の地域で教えてという人も見つからへんし、活動自身がないんです、せっかくボランティア登録したのに」という声をたくさん聞きました。ですから、そういう全国組織的に今なっているのであれば、やはり津々浦々にいらっしゃるボランタリーな活動をしようという志を持っている人たちにきちんと情報を流してあげて、あなたの近くにこういう人がいますよ、というようなことを両方に伝えてあげれるような役割もやはり果たしていってほしいなと思います。そういうネットワークがきちんとできて、逆に初めてボランティア活動というのはすごくしやすくなるんじゃないでしょうか。

ボランティアは自分の意志による自発性というのが一番大きなものですけど、対象となる相手がいる以上、絶対無責任にはなれない。そこで重要なのは、つまるところボランティアさんの人柄なんですね。無責任でもしゃあないと思う人なのか、ボランティアだけど、ボランティアだ

からこそ逆に無責任になれないと思うのかというところで、やはりボランティアの質というのは決まってしまうと思う。だからボランティアって簡単にできそうで、滅茶奥の深い仕事。「ちょいボランティア」みたいな、ちょっとやるみたいなことも、そういう人もいい。だけどそういう人ばかりではボランティアの世界ってなんなの？　というようなことになっちゃうからね、自分はどちらのボランティアか？自分はちょいボランティアなのかそうでないのかを自覚しておく必要がある。ちょいボラも必要ですよ。ちょっと力を貸してよ、というのは。それを寄せ集めることが、地域を変えることにもつながりますから。

それから、本来きちっとビジネスとして成立しないといけないことまでもがボランティアでやられていることが福祉の世界ではすごく多い。それは私はよくないと思っています。これだけのことができるのであれば、それは当然ちゃんとお金をとってやるべきよ、と思うところも、今までボランティアでやってきたし、とか思って無理して続けて、結局疲れて潰れちゃったというような事例をいっぱい聞くんです。しかも非常に専門技術も要って、そこまで磨き上げるのに時間もお金も投資されてやってこられた方がね、でも社会的評価はすごい低いというようなことで辞めていかれたなんていうことは、専門性のいるボランティア活動ではいっぱい見てきましたよね。だからどこかでそれは、きちんと収入になるシステムにしないといけない。でもまずは、本当のいいボランティア活動をする人が増えてくれへんかったら、やっぱり地域なんか絶対よくならないですものね。

＜インタビューを終えて＞

私たちは、障害者の方々への IT 支援という視点でお話を伺ったが、プロップ・ステーションは実に一般家庭にパソコンがまだ普及していなかった１６年も前から IT を障害者の方々の武器と認識し、活動の柱にしていたことは驚きに値する。今回の我々の調査・研究の目的は必ずしも就労に結びつけるための IT 支援ではなかったが、プロップ・ステーションは IT を活用した就労支援が非常にうまくいっている事例であることがわかった。竹中氏のお話の中には、「IT はチャレンジドにとって、人類が火を発見したほどの道具」、「ボランティアに求められる資質はスキルより人柄」、「活動をスムーズに行うためのコーディネート力」等々、障害のある方々への支援を考える際の多くのヒントが込められていたように思う。

社会福祉法人 プロップ・ステーション

兵庫県神戸市東灘区向洋 6- 9　神戸ファションマート 6E—13
TEL:078-845-2263　FAX:078-845-2918
http://www.prop.or.jp/
prop@prop.or.jp

竹中ナミ氏（プロップ・ステーションにて）

IT 講習風景

資料

IT 支援団体データベース及びマップについて

２年間の調査研究の結果を受け、より良い支援には各方面の連携が不可欠であることがわかりました。これを受け、障害者 IT 支援団体の検索と支援者間のネットワークの広がりに役に立てていただくことを願い、全国の障害者 IT 支援団体マップを作成し、当協会ウェブサイト、ノーマネットへ掲載いたします。
URL:http://www.normanet.ne.jp/~it-map

都道府県をクリックすると、その地域で活動している団体の情報が得られます。また、障害別に検索することもできます。
テキスト版も用意いたしました。

このデータベースは掲載許可をいただいた団体の情報です。また、全ての IT 支援団体を網羅してはいませんので、ご理解下さるようお願いいたします。
尚、掲載されている内容についてはそれぞれの団体にお問い合わせ下さい。
障害者への IT 支援を実施し、このマップへの掲載をご希望されている団体はお申し込み下さい。
it-map@mx.normanet.ne.jp

このデータベースが多くの方々に活用され、より良い障害者 IT 支援につなげることができましたら幸いです。

企画委員会構成

湯汲　英史	社団法人 精神発達障害指導教育協会　常務理事
大杉　豊	
小松　省次	社会福祉法人 日本身体障害者団体連合会　情報専門官
三崎　吉剛	東京都立中央ろう学校　主幹
河村　宏	国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所　障害福祉研究部長
畠山　卓朗	星城大学リハビリテーション学部　教授
望月　優	株式会社アメディア　代表取締役
寺島　彰	浦和大学総合福祉学部教授

事務局

野村　美佐子	社団法人 日本障害者リハビリテーション協会　情報センター次長
有田　由子	社団法人 日本障害者リハビリテーション協会

考察及び今後の展開

はじめに

平成17年度よりインターネットとパソコンを利用した障害者へのICT支援について、特に地域におけるパソコンボランティアの活動を中心とした調査を行なった。昨年は約100のパソコンボランティア団体にアンケートと聞き取り調査を行なった結果、様々な課題がでてきた。特にIT支援団体と行政との連携や作業療法士などリハビリテーション関係者との連携などネットワークの構築の必要性があげられた。またより良いIT支援のためには、障害の特性に配慮していく必要性もあげられた。そのためには、当事者の観点から考えなければならないという考察も出てきた。

上記のようなことをベースにして、平成18年度は次の3つのことを中心に全国的に聞き取り調査を行なった。

(1) 行政とパソボラ団体との連携
(2) パソコンボランティアとリハビリテーション関係機関との連携
(3) 障害者に配慮した当事者によるIT支援モデル

また調査だけでなく情報技術の分野における有識者、あるいはこのプロジェクトのために立ち上げられた企画委員会の委員の方々の協力により、昨年に引き続きパソコンボランティアの活動を中心とした「IT支援セミナー」を開催した。これらの活動から考察と今後の展開について述べる。

考察

ここで今年度行なった活動について考察と有用な支援モデルの構築につなげた提言をいたした。また障害者の情報バリアフリー事業を積極的に行なっている日本障害者リハビリテーション協会情報センターで何ができるかを述べて行きたいと思う。

上記の(1)については、県のITサポートセンターと行政の連携が多く見られた。昨年行なったパソボラのアンケートでも、十分な予算がないという回答があったが、そこの部分では行政、あるいは自治体からの支援は非常に有効であると考える。

また札幌チャレンジドの加納尚明氏は、連携の変わりに「協働」という言葉を使用しており、行政に対して対等であることにより有益でユニークな活動ができると指摘している。

(2)の「パソコンボランティアとリハビリテーション関係機関または関係者とのネットワーク」に関して、神奈川県総合リハビリテーションセンターでは、リハビリテーションエンジニアと作業療法士が協力しあって、利用者にパソコンの支援をする際に、身体状況に応じて入力装置やソフトウェア等、その人にあったものを選定、あるいは、補助装置を自ら製作して対応し、支援を行なっています。そこには、パソコンボランティアとの連携もある。このような連携は障害者支援モデルの1つとなる事例である。

今回の調査の中で作業療法士への調査も行なったが、在宅でパソコンを利用するALSなど重度の障害者への支援は病院と地域の作業療法士、そしてパソコンボランティア団体との連携があった。そこに企業も関わってもらい、極力ユニバーサルデザインに統合していけば、市場ができて、利用者が手ごろな値段で購買できるのではないだろうか。しかしよほど工夫しないと採算が取れない場合が多いので、企業のCSR(社会的責任)に訴えると共に、行政の経済的な支援が必要である。

やはり、調査によると、医学の専門家でないパソコンボランティアは、上記のような連携を希望しているが、そういう連携相手を捜せていないというのが現状である。

しかし、平成17年度に総務省から公表された「障害者IT利活用支援の在り方に関する研究会」の報告書の中で、「リハビリテーションの分野では、IT支援を本来業務として進めやすいのは作業療法士である。」という結果を受けて日本作業療法士会(OT協会)のなかに、都立多摩療育園医療課主任の田中裕次郎氏がリーダとなり、IT支援組織が作られた。この組織とe-AT協会と一緒に立ち上げたATネット(http://www.e-atnet.jp/)を通して、作業療法士の仕事を紹介していく予定になっている。今後の進展が期待される。

(3)については、当事者の視点が大事だということがわかった。そこで当事者が関わるIT事例についても調査・報告も行なったので本報告書を参照してほしい。今年度のセミナーにおいても、本事業の企画委員などの協力を得て、様々な障害分野の特性を生かしたIT支援についてそれぞれの専門家からお話をいただいた。その中で障害者に何を支援するのかという点が特にクローズアップされた。セミナーの中で、でてきたポイントが以下である。

・コミュニケーション支援
・生活支援(自立への支援に結びついていく)
・就労あるいは様々な社会活動参加の支援
・情報や文化へのアクセス支援
・場の提供

以上のことを考えたときに「IT支援というのは、やはり生活支援の一環として、あるいは生活の流れの中で支援していくべきで、ITだけが先にあるのではない。」という星城大学リハビリテーション学部の畠山卓朗教授の言葉は、まさにパソコンボランティアのあり方を述べているように思う。

今後の展開

本調査・研究プロジェクトは、今年で終了するが、地域における障害者IT支援の向上、ネットワークの構築、支援者と利用者の広がりを目的にIT支援団体データベースおよびマップを作成したので多くの関係者に利用してもらいたいと思う。詳細は本報告書の「IT支援団体データベース及びマップについて」を参照いただきたい。

また今回の調査・研究で学んだことを当協会の「パソコンボランティア指導者養成事業」研修の中で生かしていきたい。と同時にこの指導者養成事業を通してさらに障害者の地域におけるより良い支援の調査・研究を続けていきたいと考える。

謝辞

2年間継続して実施いたしました本調査研究にあたり、非常に多くの方々にご協力をいただきました。ここに、心より感謝の意を表します。

聞き取り調査実施には、調査対象者の団体の皆様方に、ご多忙のところ貴重な時間をさいてご協力いただきました。地域の団体の方には、「都市部では障害者の方々へのIT支援の情報が豊富で、困ったとき情報交換ができる。そのようなネットワークがここにはないのでできることを願っている」という率直なご意見をいただきました。

また企画委員の皆様には、調査先に関するご助言、セミナー講師としてのご参加、資料のご提供など多大なご協力をいただきました。また、ご専門の立場から都立多摩療育園の田中勇次郎氏、東京都盲人福祉協会の金沢真里氏、筑波技術大学の内藤一郎氏にご講演を賜り、厚く御礼申し上げます。

報告書作成にあたっては、べてるの家の伊藤知之氏、大塚誠一氏、神奈川県総合リハビリテーションセンターの松本琢磨氏、NPO法人札幌チャレンジドの加納尚明氏、埼玉県障害者ITサポートセンターの増田隆氏にご執筆いただきましたことを深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、この調査研究を通して、全国の大変多くのパソコンボランティアの皆様がITを通して障害者の方々の社会参加に役立つようご尽力されていることに対し、感謝と敬意を表するとともに、この調査研究の成果を少しでも当事者、支援者の方々の活動に用いていただくことができましたら誠に幸いに存じます。

「地域におけるインターネット・パソコンを利用した障害者情報支援に関する調査研究事業」事務局

報告書

地域におけるインターネット、パソコンを利用した
障害者情報支援に関する調査研究事業

平成１９年３月　初版

発行所 財団法人　日本障害者リハビリテーション協会　情報センター
〒 162-0052 東京都新宿区戸山 1-22-1
TEL:03-5273-0796　FAX:5273-0615

(c)2007 Japanese Society for Rehabilitation of Persons with Disabilities(JSRPD)
All Rights Reserved